



ACKU_news 48

(2024 年度)



2024年ACKU定時総会 (4月20日、大阪凌霜クラブにて)

目次

第一章 巻頭言	会長 山田 健	1
第二章 山岳会員からのご寄付	山田 健	2
第三章 新役員体制と理事・監事の紹介	各理事・監事	8
第四章 追悼		
(1) 故緒方俊治さん13回忌	山田 健	12
第五章 書籍紹介		
(1) 未知を求めて一知的冒険の旅へー	岡市敏治	13
(2) 岡市氏自家本の紹介	大竹口誠治	15
(3) 山岳関係書籍の紹介	大竹口誠治	16
第六章 紀行・随想・活動報告		
(海外編)		
(1) アンナプルナ山麓 コブラ・リッジ・トレッキング報告	大竹口誠治	18
(2) 第5回グレートヒマラヤトラバース (日本山岳会 120周年記念事業)	吉井 修	25
(国内編)		
(1) 東日本の山々への挑戦-1960年代前半のACKU 関東OBの活動	豊田寿夫	31
(2) 千山巡礼 山に魅かれた冬の南アルプス	井上達男	35
(3) どうせ登るつもりなら百名山はお早目に	山形裕士	40
(4) 新穂高から鷲羽岳 (2024年7月~8月)	谷本 清	46

(5) 低山雑記	吉原敏明	48
(6) 南九州・屋久島登山 (2024年9月)	小林 功	51
(7) 厳冬の仙丈ヶ岳及び残雪の北岳	山本恵昭	55
(8) 二口山塊・大行沢 ゴルジュとナメと石橋と…	川端 充	57
(9) 同期登山ー荒島岳及び能郷白山登山報告書 (2024.5.21~22)	大竹口誠治・松村政則	59
(10) 羅臼岳・斜里岳・雌阿寒岳登山報告書 (2024.7.7~7.11)	大竹口誠治	62
(11) 東京支部新年会及びバラル夫妻歓迎会	大竹口誠治	64

第七章 例会山行報告

(1) 第255回 氷ノ山千本杉ヒュッテ整備例会報告	藤川佳祐	65
(2) 第256回 ACKU例会山行報告書 (雷鳥沢キャンプベース)	山田健／大竹口誠治	66
(3) 第256回例会山行後の念願の雲ノ平・鷲羽岳行	居谷千春	70
(4) 第257回 山岳会・山岳部合同セミナー&新年会	長谷川浩	74

第八章 山岳部活動報告(2024年度)

山岳部 75

第九章 事務局報告(総会・会員近況報告・理事会・会計・予算)

(1) 総会・会員近況報告・理事会	事務局	82
(2) 会計・予算	事務局	91

編集後記

大竹口誠治 94

第一章 巻頭言

巻頭言

山岳会会長 山田健

一昨年、昨年と2年続けてヨーロッパアルプスのトレッキングに行きました。一昨年はメジャーなマッターホルンやユングフラウといった大氷河と大岩壁が織りなす大景観を堪能しましたが、昨年はアルプス山脈でも東方のドロミーティ山群、チロル地方を訪れました。アルプス山脈ではほぼ西端にあるモンブラン(4808m)が最も高く、東に行くにつれて高度も下がり、当該地域ではほとんど氷河がなくなります。ドロミーティの最高峰はマルモラーダ(3343m)で唯一の氷河がこの山の北面に残っていますが、これもあと十数年で完全に消えてしまう運命にあるといえます。氷河がない代わりにドロミーティには鋭い岩峰がのこぎりの刃のように連なっています。これは地質的要因によるもので、大昔アフリカ大陸プレートが北上したことから地中海の底にあった石灰岩が持ち上げられました。それが変質してドロマイト(苦灰岩)と呼ばれる垂直方向に亀裂が入りやすく、割と白っぽい硬い岩がこの地域の基盤岩となっています。山々は色が白いので、特に朝夕のオレンジ色の太陽光線に染められると実に美しく見えます。来年の冬季オリンピックの会場がミラノとドロミーティの中心地であるコルティナ・ドゥ・アンペッツォで開催される予定です。



典型的なのこぎりの刃のようなラテマル山



ドロミーティのシンボル、トーレ・チーメ・ラヴァレド

さて、ドロミーティを後にイタリアからオーストリアのチロル地方に向かいました。ザルツブルグで2泊した後、インスブルックに入りました。この地ではゼーフエルダー・シュピッツェという小さな山をトレッキングで登ったのですが、その時についてくれたインスブルックのガイドと少し話す機会があったので、試しにヘルマン・ブール(1953年ナンガパルバットに単独初登頂したインスブルック出身の登山家)は知っているかと尋ねたところ、さも当然というところで、地元の英雄の自慢話が始まりました。それでは、ヘルマン・ブールがチョゴリザで遭難したあと、日本人が彼の遺品を見つけてブール夫人に届けたことは知っているか?の問いに対しても、その話はインスブルックの人ならみんな知っている、その日本人は尊敬すべき人であるとのこと。もちろんこの日本人はチョゴリザの初登頂者である当会の平井一正元会長のことです。平井元会長はヘルマン・ブールが遭難した1957年の翌年、チョゴリザの北東稜で彼の遺したテントを発見しました。このテントからアタックをかけたブールは雪庇を踏み抜いて遭難死しました。平井元会長は彼の日記など遺品を持ち下り、たまたまBCで訪問を受けたガッシャーブルムIV峰初登頂のイタリア隊に言付けてブール夫人に届けたというものです。それから50年経った2008年には平井元会長はドイツにいたブール夫人を訪ねて対面を果たしています。

さてガイドにその日本人は私の登山の師であることを告げると、本当か!と非常に驚いていました。私の方も、こんなに日本から離れたヨーロッパの地で、平井元会長のことを知っている人がいる、それもインスブルックの街の多くの人が知っているという事実を聞いてすごくうれしく思いました。我がACKUもなかなか捨てたものではない、いやこんなところに当会の指紋が残っていることに感動しました。ゼーフエルダー・シュピッツェの頂上のケースにあったノートには「日本国 神戸大学山岳会 会長 山田健 登頂しました。」としっかりと記入して、さらなる指紋を残してきました。

第二章 山岳会員からのご寄付

山岳会員からの現役活動への援助

会長 山田健

今年度は会員の方から山岳部現役活動に役立ててほしいとの多くのご寄付（現金、現物）のお申し出がありました。そのことについて以下にご報告するとともに、この場をお借りして感謝申し上げます。いずれも現役部員は大変に喜んでおります。ありがとうございました。

なおもし、このようなご寄付をこれから考えておられる会員の皆様は山岳会事務局までご連絡ください。

① 岡市敏治会員からのヘリテージ基金へのご寄付（百万円）

以前にヘリテージ基金へご寄付いただいていた百万円について、その使用目的について現役山岳部が不足する共同装備などを購入するときの支援金として役立ててほしいとの申し出がありました。理事会においてその趣旨に基づいて支出することを決定し、今後、現役からの購入希望に基づいて利用させていただきます。

② 岡市敏治会員からのヘリテージ基金への追加のご寄付（25万円）

①のご寄付に加えて2024年度に追加でヘリテージ基金に25万円をご寄付いただきました。この基金については、山岳会の遠方在住の役員が神戸での理事会等に出席する場合の旅費の支援に使ってほしいとの申し出がありましたので、理事会においてその趣旨に沿っての支出をしていくことを決定しています。

③ 山口幸久会員から山スキーセット一式の現物ご寄付

山スキー板、山スキー用ビンディング、兼用靴、シール、ストック、収納袋の現物寄付をいただきました。現役部員に渡しました。

④ 鶴谷将俊会員からザイル、ツェルトなどほぼ未使用品の現物ご寄付

ピッケル、アイゼン、ハンマー（岩登り用ハーケン、カラビナ付き）エアーマット、ナイロンザイル（40m）1本、ナイロンザイル（20m）2本、ユマール、毛糸の手袋、毛糸の靴下、目出し帽（マスク型）、脚絆、ライトスパッツ、ツェルト、緊急用ストームシェルター（個人用）の現物ご寄付をいただきました。現役部員にわたりました。

⑤ 東郷賢治会員からのヘリテージ基金へのご寄付（百万円）

米寿を迎えられた東郷さんから次の一文が添えられて、現役部員や若手会員が海外の登山を目指すときの役に立ててほしいとの趣旨で百万円をヘリテージ基金にご寄付いただきました。次の「私の足跡」の文章を読みますと、東郷さんが現役山岳部員でおられた5年間というのは、ACKUの歴史の中でも、遭難が頻発し、パタゴニア遠征、高木部長の失踪とまさに激動の時期にあたっています。そのような時期に合宿に行く費用も苦勞して工面されていたことがうかがわれます。東郷さんとはよく千本杉ヒュッテにご一緒し昔話を聞く機会がありました。その時によくお聞きしたことは、自分も若いころに海外の山に行きたかったが、いろんな制約から果たせずに来た、それが今では後悔となっている、是非若い人には金銭などの理由で海外をあきらめることはしてほしくないと。このようなことから、今回のご趣旨でヘリテージ基金へのご寄付があったものであると痛いほど理解できます。この趣旨を尊重して百万円は支出していくことを理事会で決定しました。

1 新人の一人として

私が神戸大学に入学したのは昭和 30 年(1955)の春でした。所属は教育学部小学科で御影学舎に籍がありました。ジュニアでいろいろな学部の学生と一緒に一年半過ごしました。山岳部に入部したのは4月の末ぐらいだったと思います。既に何人かの新入部員がいました。私自身 登山靴もザックも 登山用具の準備は全くできていません。何もなかったといった方が適切だったと思います。運動靴で芦屋のロックガーデンだったか仁川の岩場だったかへ連れていかれました。先輩たちの中にも登山靴でない人もいました。地下足袋で軽々と岩を登っている人もいました。私達新入部員は腰にザイルを巻いてしっかりとした結び方ができているかどうか確かめてもらいながら、繰り返し繰り返し結び方や基本的なザイルの扱いの練習をさせられました。岩場の一寸した凹凸を手掛かりに岩壁で立つことが求められました。傾斜が急になると手掛かりや足場がなくなります。スタンスやホールドという言葉をお口にしながら、登ったり、横歩きをしたり、少し下ったり、岩から体をはなして、自分でルートを探めながら岩登りの初歩を学びました。先輩たちのスムーズな岩登りの demonstration を見せてもらいながら、ロックライミングの初歩を学びました。

ところで 登山靴は余りにも高価なので私にはとても買えません。仕方なく、農家の祖父にお願いして、爺さんが日ごろ田畑で使っていた地下足袋を譲ってもらいました。爺さん曰く「地下足袋をはいた学生なんて見たことないな」返す言葉もありませんでした。ザックは 破れたところをタコ糸で縫ってあるサブザックを先輩から頂きました。大助かりでした。夏山合宿の折は 先輩からキスリングをお借りしました。が、丈夫な糸と針がついていました。後日 烏帽子岳への縦走の途中 キスリングがパンクして、その修理に随分と時間を食って パーティに迷惑をかけたことは忘れられません。

その頃 登山靴やキスリングだけでなく登山用具としてアメリカ軍隊が使っていたテント・スキー・靴をはじめ野営に必要な品物が「放出品」として売られていました。神戸では元町に登山からスキー用具までの放出品専門店がありました。山と人2号・3号の広告を参照して見てください。当時の私の手袋・シュラフ・オーバーズボン・山靴 等々すべて放出品でした。それでも私にとっては高価な買い物でした。

1 年生の春山は 戦後登山活動を再開して以来初めての本格的な取り組みとして年度当初から川畑リーダーを中心としたリーダーシップが生まれ極地法による北鎌尾根より奥穂高という春山計画が検討されていました。OB 会総会でも現役の計画を全面的にバックアップすることが決まり、寄付を集めテントなど共同装備を整えることとなりました。6月の新人養成合宿は岳沢で、夏山合宿は穂高涸沢で行われ、滝谷集中登攀が実施されました。縦走でも北鎌偵察が行われました。秋には三回の荷上げで多量の食料や用具・物資が運び込まれました。その過程で1年生部員も指導され、また、冬山ではスキーや冰雪訓練にも参加して貴重な体験をしました。春山・北鎌合宿には1年生部員は本隊・後発隊に分かれ5名参加しました。私は後発隊の一人として、高木部長や先輩と一緒に高瀬川から上流の天上沢 BC へ向かいました。トロッコの軌道も多量の降雪と氷で覆われており、カチカチでアイゼンをしっかりと効かさねばなりません。ラビネンツークも現れてきました。と一瞬私はスリップして高瀬川の方へ向かって数メートルずり落ちました。「動くんじゃねえ」高木部長の声でした。部長はステップで 5~6 歩近づいて来てくださり、ザックを固定すると同時にピッケルで足場を作ってくださいました。私は己のピッケルを頼りに、雪面に足を蹴りこんで慎重に立ち上がれました。何とかザックを背負いなおし、やっと元のルートへ戻ることができました。すんでのところ高瀬川に転落という危ないアクシデントでした。幾つも幾つもデブリの後を踏み越えたり、硬い雪面にアイゼンを利かせながら、漸く湯俣に着き、翌日 雨の中 BC へなんとか到着できました。天候が不安定のため頂上アタックは随分と遅れているようでした。BC には新しい大型テントが張ってありました。私共は BC と C1・C1 と C2 のルートの確保や食料や装備などの運搬に当たっていましたが、計画はなかなか進みがたく、日数的にも余裕がなくなりつつあるようでした。C1 まで登ると北鎌尾根の上部が見えて、ルートも一部は 確認できそうでした。C2 から上では槍へのルートを探め苦闘が続いていましたが、頂上を前にして断念せざるを得なかったようでした。4月4日、各テントを撤収して、BC まで撤退するための行動に移りました。この日の

雪質は湿雪でアイゼンが効きにくく、何人かが転倒やスリップをしながらの下山だったとききました。私達は BC から C1 撤収に向かい、その途中で上部からの撤収パーティと出会いました。私達は C1 にデポされている荷物をとりに行くためさらに上部へ向かいました。その直後、下津さんのスリップ事故が発生。荷物を置いて何人かが救助に……わたし達が C1 から下ってきたときその事故を知りました。……初めての経験。……どうすればよいのか?…… 下津さんは意識のない状態で発見されたが……無念…… 私の入山時のスリップ事故。幸い高木部長に助けられたが……私もいろいろ考えました。私らがまだまだ未熟だから……腐った雪質をどうすればいいのか……一步一步慎重にしなかったからか……ザイルパーティを組んでなかったからか……下山してからも正解は得られないまま、私は山岳部員の一人として活動を続けました。

2 上級生部員になって

2年生になって山岳部部員の獲得に積極的に動きました。その一つとして一泊二日の六甲山全山縦走をすることになりました。そのために必要な個人装備例えば寝袋やキスリング等々を上級生等から貸してもらっただけでも大変でした。それでも数名の新人が参加してくれました。須磨浦公園に集合。須磨アルプスから高取山・菊水山・鍋蓋山を経て夕方遅くに市ヶ原に着きました。重い荷を背負って履き慣れない山靴で長時間の縦走は大変でした。それから夕飯の準備やテントも張らねばなりません。初体験の人もいました。二日目 出発までの準備がいい勉強でした。きちんとパッキングができると背負いやすくなります。摩耶山への登りはきつく距離も長く頑張りが求められます。神戸の街並みや港が見えるところでは休憩しながら神戸市の地理の勉強です。六甲山牧場からは自動車道で縦走の雰囲気ではありません。最高峰から宝塚までは結構長い下りで頑張りが求められます。地方から神戸に来られた新人には六甲山をホームグラウンドとして体験してもらっただけでも価値があったのではないのでしょうか。

昭和 31 年度(1956)は丹波リーダーの下、夏山合宿は剣岳・真砂沢で OB も含め 30 人になる大規模な合宿で、1 年部員だけでも 9 名が参加しました。雪渓練習をはじめ尾根歩き・岩登り等が実施され、後半は黒部平~槍ヶ岳他 4 パーティに分かれて約一週間の縦走に出発しました。秋は 11 月下旬富士山にてアイゼン歩行・ストップなど安全確保等を習得し、冬期は 12 月末から八方尾根でのスキー合宿および猿倉合宿でのアイゼン等の氷雪技術の習得に当たりました。春山合宿は猿倉から小日向コル BC からの極地法登山の後 鹿島槍ヶ岳への縦走がありました。

この間に、前年度サブリーダーだった岸本氏が部外活動で積雪期の前穂高に挑もうとして雪崩に逢い、帰らぬ人となりました。北鎌の下津氏に続くアクシデントでした。

私は全合宿に参加し、六甲山での岩登りにも積極的に参加して技能の習得に励みました。それだけでなく、近隣の山登りや沢歩き等にも度々出向き、多様な登山を体験しました。2年生の時の登山日数は 200 日を超えていたと思います。そのための必要経費が大変でした。奨学金は全て奨岳金に化けていました。がそれだけでは到底足りません。定期的なアルバイト例えば家庭教師などは再三の山登りのために欠席などすると迷惑をかけることになる為出来ません。不定期でしかも収入が多い仕事があれば、授業をサボってでも飛びつきました。深夜まで働いて終電で帰宅することも珍しくありませんでした。合宿の後、帰る交通費がなくて山小屋の荷物運びのアルバイトをしたこともあります。我が家は私が 6 歳の頃に父が戦死したため、母子家庭となり、家計は苦しく、当時 母は近隣の山仕事などに出て稼ぐなど、細々とした暮らしを強いられていました。ですから、山へ行くからといってその費用をねだるわけにはいきません。私なりに必死に働いて稼がねば山岳部の活動に参加できないことは承知の上で日々頑張りました。

3 リーダーシップを担当して

昭和 32 年度(1957) 水口君がチーフリーダーで私はサブリーダー・3年生 9 名全員で組織ができました。10 名の新入部員を迎え、その養成を目的とした穂高岳・岳沢合宿からはじまりました。

この年度の特記すべきこととして山岳会が総力を挙げてチリ山岳連盟と協力してパタゴニア探検の具体化に取り組んだことでした。田中薫隊長・高木正孝登攀隊長を中心にチリ山岳連盟と困難な交渉が続けられ、毎日新聞社と共催で実施されることが決まりました。私共も大いに意気上がる年度となりました。探検隊は大阪・梅田のビルに事務所を設け、準備に当たりました。山岳部員も関心の度を深め出入りし手伝いをしたのか、邪魔をしたのか……。円満 OB 他数名の隊員が決

まり、いやが上にも霧囲気は盛り上がってきます。現役からも前年度サブリーダーだった前田さんが選ばれました。発注した登山用品が次々と出来上がって運び込まれます。最新のテントやシラフやザイル等々見るだけでも興味がわいてきます。整理や分類や荷造り等々を現役も一緒になって取り組みました。皆の興味と関心はチリ・パタゴニアの次は自分たちの番にしなければ・・・11月幾つかの隊に分かれて南半球へ向かって隊員たちは次々と船出しました。

この年度は穂高岳に集中してバリエーションに富んだ山登りを展開しようとする。その最初は5月下旬の岳沢での新人養成合宿である。雪溪訓練・グリセード・稜線歩きそして下山は徳本峠をこえ島々宿までのクラシカルルートで合宿を終えた。

7月中旬の涸沢合宿の前後に2~3年生を中心とした一次・二次の奥又白合宿を設け充実した岩登り訓練に取り組んだ。涸沢にテント場を設け、北尾根を初めとした尾根歩きや滝谷での充実した岩登りに取り組んだ。たまたま唯一の事故としてクラック尾根に挑んだ私が誤って浮石を掴み13m程の滑落事故を起こしてしまった。幸い前田氏の確保で大事には至らなかった。天候に恵まれず4日間しか行動ができなかった点は残念。合宿の後2~4名の人数のパーティに分かれそれぞれが目指す比較的長期(一週間程)の縦走に出発。それぞれの体力・体調・天候・判断によって白馬岳を目指しながら鹿島槍・針ノ木岳・七倉岳まで下山。薬師岳パーティーは目的地まで頑張る。

秋の穂高合宿は17名の参加で春山での西穂・明神縦走パーティの偵察(試登)と春山は合宿に備え穂高小屋への物資の荷揚げさらに穂高の稜線及び地形の偵察・体験等々さらに青木・山内の滝谷第1尾根登攀等春山合宿に備えての準備となった。

冬山合宿は川畑OBの指導で乗鞍岳冷泉小屋で下級生のスキー技術の習得・アイゼンやピッケル技術の習得等を目的に実施した。2~3年は穂高岳沢でラッシュ形式による冬山技術の習得を目的に実施された。岳沢の雪稜・沢を中心に春山の偵察も兼ねて行われた。

冬山合宿以降 私は事情で山岳部の活動に積極的に参加できなくなりました。山岳部の皆さん特にリーダーシップをとる3年生の諸氏には大変申し訳なくご勘弁を願う次第でした。その間 私は国鉄大阪駅で新聞の配送の仕事に夜遅くまで関わりました。

春山合宿は3年生部員が水口リーダーと斎藤サブリーダーの二人だけ、2年5名・1年4名で構成され計画も縮小せざるを得なかった。涸沢からの本隊・明神縦走隊・西穂縦走隊が穂高小屋に集結し、第2期に入る。ジャンダルム・北穂・北尾根等トレース。

3月28日北穂小屋を起点に青木・山内がクラック尾根をアタックすることになった。二人は7時出発B沢を下り、クラック尾根末端より取り付く。途中何度かヤッホーを交わす。アイゼンの音も聞く。19時応答なし。ビヴァークしたものと判断する。当日、北穂小屋には青木の兄をはじめ岐阜登山会が同宿していた。

3月29日 風雪強く穂高小屋は停滞。その中を岐阜の高橋リーダーが穂高小屋へ連絡に来られ、水口リーダー他2名は直ちに北穂小屋へ。直ちにB沢へ向かうも雪崩の危険性が高いので北穂小屋へ引き換えし、対策を協議。

3月30日 吹雪。高橋氏に穂高小屋へ連絡を依頼。東大山岳部に救援と上高地への連絡派遣を依頼する。7時から水口等3名は深雪の中B沢を下り、北山稜の末端で青木の遺体を発見。切れたザイルの端を手繰ってくと10m程の所で山内の遺体を発見。二人の遺体を包装して岩陰に固定。東大山岳部5名が到着。協議して遺体は蒲田へ下ろすこととする。

3月31日以後 大学本部と山岳部部員やOB・保護者や友人・知人等は岐阜県高山市からの遺体引き受けの救助隊と穂高小屋残留の下級生部員の救出・下山支援隊が同時進行で活動、3日岐阜市の青木宅へ、5日松山市の山内宅へ、救出並びに撤収は7・8日には帰神し、ひとまず無事に終えることができました。

なお、遭難事故に関する山岳会・山岳部での反省・対策・組織等をはじめ新年度の活動の在り方・問題点等々については継続的な課題として検討され具体化されました。

4 再出発 1958年度

新しい年度の山岳部を構成するメンバーは8回生で2年生になった時には10名が在籍していた。それが3年生になったときは僅か3名に激減していた。クラック尾根での遭難事故によるところは理解できるが、もう一つ山岳部を揺るがす出来事があったのだ。

それは山岳部員の何名かも加わって誕生しようとしていた「ワンダーフォーゲル部」の動きでした。何度も膝突き合わせて議論をしたのではあるが、明るく、快活に、そして安全の範囲で自然に

接していこう。その中で思いっきり自然を満喫するのだ。単なるブームではなく、身近に遭難事故死を知った彼らにとっては山岳部の活動には危険がいっぱい・・・と背を向けられてしまって何名かがワンダーフォーゲル部へ籍を変えられてしまった。ブームというのは・・・というわけで7回生が2人リーダーシップに加わることになり、私はマネージャーを務めることとなった。新しくチーフリーダーに選出され豊田君はこれまでの遭難事故を振り返り、大学山岳部特有の僅か2年間の経験でリーダーシップを担当しなければならない条件等を踏まえ「安全な山登りの完成」を基本とする年度方針を示された。新たに提示されたのが、山岳会総会で提案された監督団である。土田新一氏を団長に戦後の若い先輩たちで構成された山岳部の諮問機関でした。山岳部の全ての計画が検討され、部長の承認を得て、具体的な活動が生まれる流れである。どこまで具体化され、山岳部の活動が実り多いものとなりうるかは、未知数。総数45名内新入部員21名山岳部の活動は始まった。

新人養成合宿は新人多数のため装備不足のため5月鹿島槍・穂高岳で雪渓技術習得を重点にもたれた。夏山合宿は7月下旬剣岳二股BCで実施。連日の降雨で雪渓技術の習得が十分にできなかった。源次郎・八つ峰・三の窓・チンネ等でOBも加わり、トレーニングができた。8月には南アルプス・後立山連峰・裏銀座・薬師縦走を実施、一週間から10日間それぞれの山を味わった。秋の強化合宿は富士山吉田大沢でOBの参加を得て、アイゼン・ピッケルワークを中心とした氷雪技術の習得を行った。

冬山は監督団会議で計画変更が提案され、高木部長リーダー・現役豊田・OB円満字がリーダーを補佐する。現役・OB合同合宿に変更。猿倉BC・樺平ACとなる。白馬主稜線アタック・大雪渓から白馬岳等を試みるも成功なし。黒菱スキー合宿はほぼ同時に実施。初めての合同合宿で精神的、技術的・他運営の面でも議論された。必ずしも望ましいものではなかったのではないかな。

春山南ア・北岳合宿3/9-3/27と北沢合宿3/8-3/18 長期参加が難しい

北岳 基礎技術・パーティシップ・2年部員の自信 BH・C1・C2・C3—西農鳥岳

北沢 1年部員と強力な上級部員 スキー・アイゼン技術習得 北岳・駒ヶ岳・仙丈岳

両合宿併せて(高木部長・OB2名含めて)29名が参加。それぞれが目的とする山頂を極め、決して無理することなく、基本に忠実に、安全第一の合宿が展開された。

この年(1958)山岳部主催による慰霊祭を神戸市平野の祥福寺で8月10日執り行った。戦後神戸大学山岳部として再発足し、あらゆる困難と闘いながら不幸にして山に逝かれた諸氏の御霊の安らかならんことを祈りつつ、山岳部の現状をご霊前に報告したいと執り行った。故八巻健彦、永村隆、中川健治、下津実、岸本卯三郎、青木秀哉、山内純二の諸氏の御霊をお祭りし、ご遺族の方々には遠路ご参列願った。大学側からは古林学長、木村学生部長等々、山岳部関係からは高木部長、土田監督団長他OB20余名と現役が参列し、総数75名に及んだ。なお、同慰霊祭において青木・山内両君の遭難碑の入魂式を執り行い、8月12日 滝谷出合い、蒲田川右岸に設置された。

5 高木部長を失って

1962年(昭和37年)高木部長は学術調査のため南太平洋ポリネシアへ向かわれることとなり、その間山岳部長は川上太郎先生が引き受けられることとなりました。が大変不幸なことに同年8月ヒヴァオア島沖にてご逝去されました。58年のクラック尾根遭難以来山岳部の活動についてどうあるべきか山岳会内でも議論され、監督団なるものが生まれました。以来いろいろな考えや提案もなされました。登山学校方式・クラシック登山・リーダーシップの未熟さ・監督団の5年制・・・自主性・未熟さ・監督団対策 etc etc??? 1966年の春山合宿では「監督団の機能が現役の行き過ぎに対するチェックから、それ以前の現役部員の登山に対する心構えや諸技術の指導まで立ち入る必要のあることが考えられた。しかし我々は現役部員自身で再出発する道を選んだ。」と明確に自分自身の判断で山に向かっているとする姿勢がうかがうことができる。

以後監督団に関しては平井山岳部副部長の指導に全面的にゆだねられ、山岳部の歩みに大きな一時代が築かれることとなった。

6 再 私の足跡 (現役の方々へ)

ダラダラと学生時代を振り返ってきましたが第5学年?が始まろうとして学部の事務所に顔をだしました。これまで通り、割のいいアルバイトを探すためでした。顔馴染みの事務職の方から「東郷さんちょっとちょっと」と声を掛けられ「ハイハイ」といつもの返事を返しました。彼は私の耳

元まで顔を寄せ「東郷さん5年生には奨学金はありませんよ」「ええっ?ほんとですか」「あま〜い。落第したんだからネ」「うわ〜 えらいこっちゃ」・・・私は自分の耳を疑いましたが、至極当たり前のこと。心の中でもう一度「うわ〜えらいこっちゃ」とつぶやきました。「自分勝手に奨岳金として有効に活用させてもらっていたのに・・・どないしょう? バイトで稼がなきゃあないな」と納得させながら事務室を出ました。今一つ この1年間で稼がなければならぬ単位数を調べて「うわ〜えらいこっちゃ」とこれまた頭を抱えました。何とか頑張って卒業しました。

今 現役の席にあって山岳部員としてない金をはたいて山靴を買ったり、交通費を工面したり・・・ゼミのテキストもまだ買えないし・・・いや次の雪山であの尾根ラッセルして・・・奨岳金を当てにしながらの合宿を心待ちにしていませんか。

もう一つ 日本の山あちこち登りたいのだが、社会人になったら時間がない、机に縛られるんじゃないかな。学生時代にネパールのいやアラスカのと夢見ている人はいませんか。若さの満ち溢れるエネルギーで信頼する仲間とザイルを組んだらすごいだろな。

私はいま88歳 米寿になりました。退職後20年間 西六甲山にある神戸市の森林事務所で森林ボランティアを務めさせてもらいました。その間 雑木を伐採したり、山道を整備したり、ログハウスを建てたり随分と楽しませてもらいました。これも山の楽しみ方の一つです。

山岳部員の方々に少しでも役に立てたらと思って書きました。 完

第三章

新役員体制と理事・監事の紹介

2024年4月20日付けでの総会決議により下記の新役員が承認されました。

会長	山田 健
副会長	大竹口誠治
理事・事務局長	長谷川 浩
理事・会計担当	岩井正隆
理事	野邊正彦
理事	野邊久美
理事・名簿 HP 担当	香山博司
理事・例会山行担当	藤川佳祐
監事	金井良碩
監事	森長敬

全理事及び監事から就任挨拶と自己紹介文が提出されましたので以下に掲載致します。

(山田健会長)



会長として2期4年間の過ぎ、この度3期目となります。年齢もこの3月に70歳になりました。1986年のクーラカンリ遠征後に山岳会の事務局員となり、その後理事制度が始まってからもずっと平理事、事務局長、副会長、会長と続けてきました。実は2期目の区切りで役員から外れ、もう少し若い人に引き継ぐことを考えておりましたが、諸般の事情でもう1期継続することになりました。5期会長を務められた井上会長のもとで事務局長となって以来、2期の居谷会長、自分の3期の間、山岳会の中核において丸20年間事務を行ってきたこととなります。さすがにこれまでの山岳会の運営や出来事などについては誰よりも詳しいことから、今後何かの役に立つかもしれないと、最後のご奉公をあと1期やって、その後のことはこれ以上迷惑をかけてもいかがかと私自身思っております。肝心の山行の方は、3月の氷ノ山ぶん回し、5月立山の山スキー、6月の千本杉ヒュッテ整備山行、7月の雷鳥沢合宿などはこれからもできるだけ続けていきたいと思っております。

(大竹口副会長)



副会長の大竹口です。2004年から理事、2010年から副会長、2016年からACKUニュースの編集長をしております。山登りの方は、国内では、70歳までに百名山登頂の目標を立てて、昨年は北海道の羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳、関東周辺の山等12座に登頂し、合計で80座登頂となっています。残っているのが九州、四国や東北の朝日岳や飯豊山等、アプローチが長い山が多いですが、頑張って達成したいと思います。海外では、昨年、30年振りにネパールへ行き、初めて、トレッキングをして来ました。30年前に行った時はほぼ観光旅行で、その時は天候が悪いため見られなかったアンナプルナ山群やダウリギリ山群が今回はよく見えて、ヒマラヤの8千M峰の迫力に圧倒されました。昔、1年間だけ勉強したネパール語を、テキスト片手に実施学習出来たのも良い思い出になりました。トレッキングは高齢者でも参加可能ですが、現役や若い人OBには、是非、ヒマラヤ山行を実現してもらいたいと考えており、今後とも、そのための支援が出来ればと思います。

(長谷川浩理事・事務局長)



2020年に引き続いて事務局長を拝命いたしました、1978年入学(S-30)の長谷川です。学生時代、ネパール・パルチャモ(1983年)、クーラカンリ(1985-86年)と山岳部・山岳会には大変お世話になりましたので、皆さんへの恩返しとして、理事・事務局長を務めさせていただいております。

一昨年より、琵琶湖北西部の湖畔に居を移し、老後のスローライフを始めたのですが、仕事リタイアのタイミングが定まらないまま、気が付いたら今年66歳となりました。身体にガタが

来て、思うように山歩きもできていないのですが、昨年は念願のアイスランド旅行を実現し、いよいよ次はパタゴニア、と狙っているところです。

どうすれば山岳会の活動を活性化し、現役支援を進められるのか、若返りを図れるのか、なかなか答えがない中ですが、皆さんと一緒に考えていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(岩井正隆理事・会計担当)



2016年4月から、会計を担当させていただいています。

本格的な登山からは遠ざかっていますが、25年前から会社の夏休みを利用して、富士登山競走、カナダ(ウイスラー)、アメリカ(カリフォルニア・コロラド・タホ湖)、フランス(アルプス南)、オーストラリア(ケアンズ)、ニュージーランド(ウェリントン)のトレイルランニングに参加することで、登山のための体力を養っています。会費徴収などで、皆様にご迷惑をおかけしますが、引き続きよろしくお願いいたします。

なお、「神戸大学山岳会・山岳会」のLINEを開設していますので、参加希望者は連絡をお願いします。

特に30才代~60才の会員の方、甲南山岳会関係の方、ご参加いただき現役部員・若手OBとつながり続けることをお待ちしております。

(野邊正彦理事)



369番野邊正彦です。今年度から山岳会の理事を仰せつかっています。山岳会がどこに向かって行こうとしているのか、何が課題なのかが見えておらず、自らの足腰と一緒にフワフワし力が入らないので、鍛えなおす必要があると思っています。

近況ですが、兵庫県職員としての仕事に終わりが見えて、最近2年ごとに転勤しています。令和6年春からは、兵庫県北部にあるコウノトリ但馬空港を管理運営する但馬空港ターミナル(株)に出向しています。空港業務は初めてですが、4月3日には、空港の制限区域に入るための講習を受けて試験を受け、合格したら、仕事のシフトに入れてもらえて、一人で行う不法侵入者のパトロールやお客さんにお金をいただいて空港内を

案内する見学ツアーの引率などをしました。写真はNHKが空港で生中継をしてくれた時の写真です。アルミカンという松竹芸能の芸人さんと出演しました。

(野邊久美理事)



このたび、2 期目の理事を務めさせていただくことになりました。総会と理事会には参加させていただいているものの、登山は4年前の紹介と同じく、近くの低山を同僚とたま〜に歩く程度です。

現在は、昨年 150 周年を迎えた地元の小さな小学校に勤めています。全学年 1 クラスで総勢 171 名、近所のおばちゃん校長です。こちらはてんやわんやでドラマティックな毎日です。健康第一、ぼちぼち楽しくやっています。

出身中学校の 50 周年記念マラソンを恩師、同級生、その娘さんと一緒に走りました。恩師と教え子の違いがなくなってきました・・・

(香山博司理事・名簿HP担当)



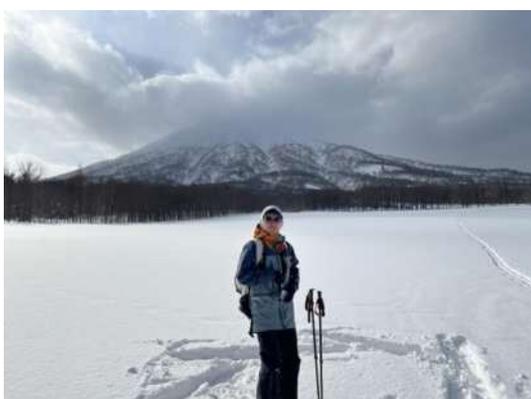
最近の近況を報告します。長男は昨年夏からフランスで研究職に就き、長女は大学に進学し、次女は 10 歳になりました。それぞれの成長を実感しています。

私と妻の父親が相次いで亡くなり、介護生活が終わりました。私の実家は相続後に無事に売却を終えましたが、妻の実家は引き続き整理と手入れを行っています。

私自身は昨年秋から、関西空港にほど近い泉大津市で単身赴任生活を送るようになり、健康管理に一層気を付けるようになりました。昨年 9 月には仙台での所用の際、山形まで足を延ばして月山に登ろうとしましたが、当日は大雨で登山は中止しました。その日の大雨によって能登半島で水害が発生したこともあり、10 月に会社で組織する珠洲市で

の災害ボランティアに参加しました。仕事については、入社以来光ディスクドライブの開発に従事しており、現在はデータセンター向けの大規模光ディスク記録装置の開発に取り組んでいます。販売先と生産拠点が中国にあるため、中国人の同僚と協力しながら仕事を進めており、コロナ明けからは中国への出張も再開しました。また、スマホアプリなどを活用して中国語の勉強も続けており、中国語検定 HSK4 級を取得したので、次は 5 級を目指しています。さらに、仕事には直接関係ありませんが、電気工事士 2 種と電験三種の資格も取得しました。これからも家族の成長と共に、自分自身も成長していきたいと思っています。

(藤川佳祐理事・例会山行担当)



2019 年経営学部卒 藤川佳祐です。山岳部で培った経験をもとに最近はおっぱら山スキーに傾倒しています。異動で 2022 年から上京中、山スキー同志会という社会人サークルに入りました。このサークルでは毎年“羊蹄合宿”<京極ルートの入り口にある山荘に 4 泊 5 日、毎日ひたすら羊蹄山に登って滑る！>に参加、今年で 3 回目になりました。写真は去年の合宿に際に撮ったものになります。なんとか山岳部時代の体力貯金でやり過ごしてきましたが、今年で 30 歳、、、そろそろ貯金の切り崩しでは限界を感じるようになりました。山までが遠い東京ですが、2025 年はちゃんと夏山でトレーニングを積んでからシーズンインしようと思っています。

(金井良碩監事)



山田会長が続投を決意されたので、私も老体に鞭を打って引き続き幹事を務めさせて頂くことを決意しました。しかしながら、今年80歳を迎えますので、いつまでも出しゃばるのはそろそろやめた方が良いと思っています。後進に譲るべきと考えています。理事会もオンラインで開催される時代となっており、対面時代に育った我々世代の出番ではないと思います。当会の今後の発展を期待し、今期だけは頑張りますが、あとは皆様よろしく！

(森長敬監事)



経済学部 25 回の森長です。本格的な山登りはクーラカンリ遠征が最後になりました。あれから 40 年が経ちますが、今なお忙しい日常生活の中でも、山での何でもない情景をふと思い出すことがあります。「人生は思い出で出来ている」とも言いますが、山のお陰で豊かな思い出に恵まれたようです。この春で四半世紀余り務めた社長を息子に譲りました。これから少しは時間も出来ることと思いますので、お付き合いの程よろしく願いいたします。

第四章 追悼

故緒方俊治さん13回忌

山田 健

2012年12月1日に富士山吉田大沢で発生した緒方さん遭難事故から12年が経過しました。先日、2024年11月30日に故人のお墓がある神戸市北区道場町光明寺において13回忌の法要があり、山岳会からは故人との関係の深かった5人（田中俊甫、居谷千春、酒井利直、中川勝八郎、筆者）が出席しました。

この富士山の遭難は、これまで250回以上実施されてきた山岳会例会における唯一の死亡事故でした。故人は1976年のシェルピカンリ登山隊で井上達男さんと共に頂上に初登頂され、1986年のクーラカンリ登山隊では登攀隊長として見事に初登頂に導かれました。また、山岳会の理事、事務局長に就任され長年当会にご貢献いただきました。いつも穏やかで、それでいて存在感のある緒方さんでした。山ではいつもリンゴとイリコが定番で私たちに分けてくださった、あの笑顔を思い出します。

法要当日は素晴らしい秋晴れの下、ご親族の皆様も多数集まり、法主様も13回忌にしては異例の参列者の多さに驚き、あの世で喜んでおられるでしょうとのお言葉がありました。法要後のお昼の御斎は有馬温泉に移って、奥様の順子さんのお知り合いの店にて行われました。

最後にご長男の達人さんから次のような印象的なご挨拶がありましたので紹介しておきます。

曰く、

あの日遭難の第一報があつて夜通し車で富士吉田に向かった時、早朝に見えた富士山の美しさが忘れられません。・・・あの日から自分も神戸大学山岳会の方たちとお付き合いすることが始まりました。お付き合いしてみて、素晴らしいこのような会で活動してきた父を誇らしく思えてきました・・・

合掌



緒方さんの墓前にて 左から、山田、中川、田中、順子夫人、居谷、酒井各会員

第五章 書籍紹介

未知を求めて

—知的冒険の旅へ—

岡市敏治

「知らないことを知る」それはとても楽しいことだと孔子もソクラテスもいっている。リスクをとっても未知を目指す。新しいことに挑戦する。簡単なことはすぐにつまらなくなる。困難があるから面白い。そういうふうには人間の精神はできているのだ。より未知を、より困難を目指そうとする人間の営みには限りがない。それがスポーツアルピニズムであり、人間の普通の生き方だ。このことを私は山岳部時代に高木正孝先生から学んだ。

今年は大正 5 年の山岳部創部から数えて満 110 年になる。クーラカンリに行ったのは 45 歳のときだった。それから 40 年たって、私は今年満 85 歳になる。時の経つのも早い、いくつになっても知らないことをもっと知りたい、より困難を目指したいという思いは変わらない。

1986 年クーラカンリ遠征の 3 カ月間は、未知との遭遇であり、ヒマラヤ高所登山の苛酷に挑む毎日だった。緊張感とそれを乗り越えたときの達成感！未知と困難に挑むことがこんなに面白いのなら、一回しかない人生、あとはこれでいこうと決心した。

一つの企業や組織で人生の目的を達成する人生も素晴らしいが、私はもっとリスクな道を選ぶことにした。それは経営コンサルタントへの道だ。国家資格の中小企業診断士と技術士試験に挑むことにした。大学時代は落第を繰り返して卒業が遠かった私だが、モチベーションが固まると、合格率 3～4% の難関資格をいずれも一発でパスした。

50 歳からコンサルタント業を始めた。化学、機械、製薬、食品等の企業の経営戦略立案と大学や予備校の講師活動である。毎回業種や生徒が変わり、その都度真剣勝負の日々だった。未知なる困難との遭遇、いかにして道を切り拓いていくか。こんな面白いことはない。

未知を求めてより高く、より困難な分野を目指そうとする人間の探求心には限りがない。経営と起業、科学や探検、登山、各種スポーツの分野において、人類は未知への探求を繰り返してきた。そして、その開拓者たちこそ人類の進歩に貢献したのだ。“未知への挑戦”それは年齢を重ねてもワクワクする。

私の娘はオーストリア人と結婚し、ウィーンで孫娘が生まれた。その 13 才になったヨーロッパの孫娘に知力を尽くして、未知への旅について書いたのが下記の本である。

本名		本の仕様	販売価格
A	ヨーロッパの孫に聞かせる 日本と世界の歴史	第1話「宇宙の始まり」 第21話「生命はどうして誕生したの」 A4版 全246頁 2019年刊 発行所 株式会社コスモ情報センター	2,500円 (送料込み)
B	ヨーロッパの孫に聞かせる 日本と世界の歴史 完結編	第22話「ロシアの歴史」 第30話「未知を求めて」 A4版 全132頁 2023年刊 発行所 株式会社コスモ情報センター	1,500円 (送料込み)

A巻については、ACKU news 44 (2019)に大竹口編集長が紹介文を書いてくれた。これは『知的冒険の旅』の物語である。冒頭に述べたことはB巻第30話「未知を求めて」に、ナンガ・バルバットや梅里雪山登山の例を引いてくわしく述べている。

なお、孫娘のパパは物理学の研究者で、若いころ一緒に比良山奥の深谷の沢登りをした。大原の焼杉山(718m)には、夏と冬10回くらい登山した。無論ヨーロッパアルプスも案内してもらった。

『ヨーロッパの孫に聞かせる日本と世界の歴史』
是非この本を買って読んでほしい。本の売上金は岩井会計が「厳しい」という山岳会会計にすべて寄付します。本の購入については、山岳会事務局に申し込んでください。

ヨーロッパの孫に聞かせる 日本と世界の歴史（岡市氏自家本の紹介）

大竹口 誠治

岡市氏の「ヨーロッパの孫に聞かせる 日本と世界の歴史」につきましては、ACKU NEWS 44号でご紹介しておりますが、その後、既存の21話（A巻）に9話（B巻）を追加されて、全巻で30話となっております。今回、9話の追加分をまとめて完結編として別冊で刊行されていますので、その完結編の紹介文を述べさせていただきます。なお、参考までに前回のACKU NEWS 44号の紹介文も最後に添付しております。

全30話、どれも豊富な知識と読書量がないと書けないテーマですので、是非、ご購入頂ければと思います。

完結編（B巻）

完結編には、ロシア、アフリカ、インドの各々の歴史が詳しく記載されており、また、日本人はどこから来たのか、日本語はいかにして作られたのかという、普段、我々があまり考えたことがないテーマについて、歴史上のイベントを織り交ぜて、詳しく説明されています。また、複式簿記を使った「会社の世界史」の説明、文系の私ではまったく知識のない「化学の地球史」についても、分かりやすい図とイラストで解説されています。テーマの最後には、山岳部の思想にも通じる「未知を求めて」で締めくくられておられます。

付録には、「パタゴニアからクーラカンリへ」「年賀状で見る FAMILY 50年史」「宇宙とホモ・サピエンス全史」「全30話要約一覧表」記載されております。特に、「年賀状で見る FAMILY 50年史」は、岡市氏のご家族の FAMILY HISTORY が一目で分かるように毎年の年賀状が添付されており、数年したら自分の年賀状も捨ててしまう私のような者にとっては、宝物のように感じました。

参考：（A巻に関する紹介文－ACKU NEWS 44号より）

本書は、岡市氏が、NPO法人であるHNA（ヘルプ・ネール・アソシエーション）の会報に2011年5月から連載されている本編に、当会の「山と人」1988年版に掲載された「クーラカンリ初登頂物語」等の文書を付録として加えられたもので、岡市氏が設立された（株）コスモ情報センターが創業35周年を迎えたのを機に、一本にまとめて、記念出版されたものです。

本編は、オーストリアのウィーンに住んでおられる岡市さんの13歳の孫娘さんに聞かせる日本と世界そして宇宙についての歴史物語です。

私も、HNAの機関誌は、時々、目を通させて頂いていますが、改めて全編を読ませて頂いて久しぶりに知的な興奮を覚えました。題名には、日本と世界の歴史となっておりますが、その内容は、歴史以外に、宇宙の成り立ちから始まる天文学、複式簿記、ソクラテスと孔子の哲学、ニュートンの万有引力とアインシュタインの相対性理論等の物理学、極限状況下のリーダーシップのあり方、ヒマラヤ山脈がどのように出来たか等の地球物理学、生命はどうして誕生したのか等の生物学、私がインドネシアに駐在していた時に身近にあったイスラム教の歴史も含め、極めて広範囲に亘っています。

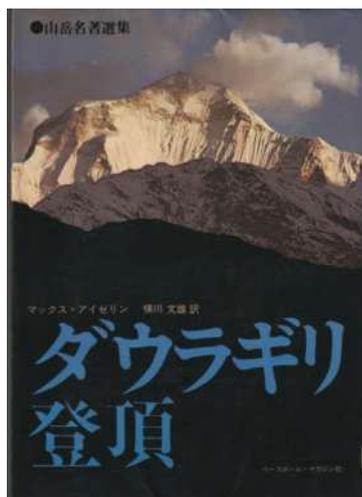
これだけ広範囲な文書を書かれるには、相当な読書量をこなす必要があります。また、文書にするためには、正しく理解していないと書けないと思いますので、岡市氏の読書量と理解力と文書力に驚嘆致しました。また、付録の山岳部・山岳会関係の文書では、クーラカンリ初登頂記、同峰初登頂20周年記念、氷ノ山千本杉ヒュッテ50周年記念、故坂本亨氏の追悼、高木先生の山と人生及び高木先生の没後50年に行なわれた偲ぶ会の様子も記載されており、私自身、今まで詳しく知らなかったことも何点もあり、大変、勉強になりました。この「日本と世界の歴史」は、HNAの会報には、その後も継続して掲載されておられますので、今後も、楽しみにしております。

以上

山岳関係書籍の紹介

大竹口誠治

昨年11月上旬にネパールのアンナプルナ山群及びダウラギリ山群のトレッキングに行ってきたが、アンナプルナについては、有名なモーリス・エルズグの「処女峰アンナプルナ - 最初の8000m峰登頂」を学生時代に読んで深く感動したので良く知っていましたが、ダウラギリについては、深田久弥氏の「ヒマラヤ登攀史」で、スイス隊が初登頂したこと位の知識しかなかったのですが、現地を見たダウラギリに圧倒的な存在感を感じ、帰国後に読んだダウラギリ関係の書籍を紹介すると共に、長年に亘って河口慧海のチベット入りのルートの研究されて来た根深誠氏の著書についても紹介したいと思います。



1. ダウラギリ登頂—マックス・アイゼリン著

本書は、ネパールの8千M峰で最後まで残ったダウラギリ（白い山の意、8167M）を1960年5月に初登頂したマックス・アイゼリンを隊長とするスイス登山隊の記録である。この隊で特徴的な点は、隊長がスイスから乗って来た「イエティ（雪男）号」というセスナで隊員と装備をダンプス峠と北東コルに空輸した点で、ヒマラヤでは初の試みであった。結局、2回の故障のため、同機は未知の谷(HIDDEN VALLEY)に放置されることになった。登頂ルートは過去7回のルートとは異なる北東コルからの北東稜ルートで、7800M地点でキャンプVIを建設して、5/13に6名が初登頂、5/23に2名が第二登を果たした。8千M峰の頂きに一度に6名もの人間が初登頂したのは初めてであった。



2. 私のヒマラヤ—今井通子著

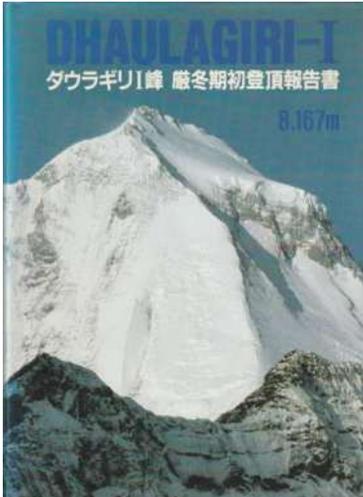
トレッキング時にはダウラギリの主峰しか目に入りませんでした。帰国後に見たNHKの「アース・トラベラー、最後の8千M峰、ダウラギリ」でダウラギリII・III・V峰を縦走したカモシカ同人隊の山行が紹介されていたので、女性として世界で初めてヨーロッパ三大北壁を征服し、ダウラギリIV峰登山隊に参加した、今井通子氏の著書を紹介したいと思います。ダウラギリIV峰は大阪府山岳連盟登山隊が1975年の春に初登頂していますが、初登頂した2人が下山途中で滑落死しているため同年秋のカモシカ同人隊は第2登になります。同隊は、ダウラギリの西側の谷であるマヤンディコーラを北上しミヤグティマータ山を越えて内院の氷河に入り、IV峰とVI峰の間のコルから西稜を経て登頂したもので、著者は登頂出来ませんでしたが、全部で11名が登頂しました。



3. 縦走（ダウラギリII・III・V峰）—今井通子氏

カモシカ同人隊によるダウラギリII・III・V峰の縦走記録。ダウラギリIV峰の登頂を成功させたカモシカ同人隊が、II峰からの隊とV峰からの隊を交差縦走させる従来なかった発想の山行で、トランシーバー交信が途絶える等のトラブルがありましたが、無事、成功した遠征でした。同隊に参加した貫田宗男氏は、昨年K2で亡くなった中島健郎氏が参加していたグレート・ヒマラヤ・トレイルの番組でも時々、出演されており、ご存知の方も多いと思います。

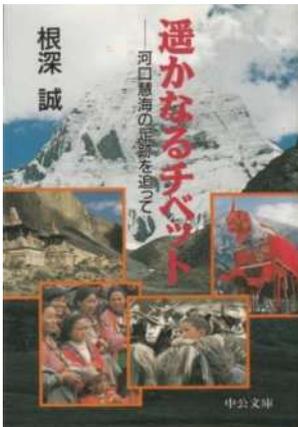
ダウラギリ山群（右から主峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰、Ⅴ峰、左奥にⅣ峰）



4. ダウラギリ I 峰 厳冬期初登頂報告書—北大山岳部・山の会

本報告書は、1982年12月13日に隊員1名とシェルパ1名により厳冬期(定義は12/1-1/31)初登頂した北海道大学ヒマラヤ遠征隊の記録で、ヒマラヤの厳冬期における8千M峰の世界初の登頂となった。登頂ルートはスイス隊と同じ北東稜からの登攀で、登頂後7930M地点でのピバークを乗り越え無事生還を果たした。入山は高度順化を考えて、ツクチュからダンパス峠・フランス峠を辿る北回りルート、下山は降雪を考え、マヤンディコーラ沿いの南ルートを取った。BC(5876M)を含む上部のキャンプはすべて雪洞を利用し、BC(5876M)での太陽電池板及び風力発電を利用した。1980年12月の厳冬期のネパールのバルンツェ(7220M)の経験が生きた登頂で、正に北大山岳部・山の会(AACH)の伝統の力が発揮されたものであった。

登攀環境における3つの悪条件(低温、低酸素、強風)を如何に乗り越えるか、周到に準備した様子が良く分かる遠征であった。



5. 遙かなるチベット—根深誠氏

明治33年の夏に、単身でチベットに潜入した日本人僧侶である河口慧海の足跡を辿りつつ、ムスタン、トルゴ、カイラス山等を巡るヒマラヤ辺境の紀行文。著者はまず、タカリー族の村であるツクチュ(上述)を訪問後、ムスタン王国の都であったローマンタンを訪問。その後、苦労してトルゴへの入域許可を取得して探訪し、河口慧海のチベットへの潜入経路を探った。その後、一旦帰国して、ラサからカイラス山(チベット語では、カン・リンボチェ)周辺を訪問した。結論として、河口慧海がどの峠を越えたかは謎として残った。



6. 求道の越境者・河口慧海—根深誠氏

副題に書かれているようにチベット潜入ルートを探る三十年の旅の集大成で、数十回にわたる現地調査と現地の人々に聞いた話と河口慧海の日記を親族から入手して、2004年時点で慧海が越えた峠をクン・ラ、ゴップカル・ラ、マンゲン・ラの3カ所に絞り込んだ。根深氏はコロナ禍明けの22年に現地に向かい、トルゴ地方の高僧から、日本人の僧がヤクを連れて峠を越えていったとの話を曾祖父から聞いた一との証言を得るなど、大きな成果を上げて、慧海が越えた峠をゴップカル・ラと結論付けた。

著書には、その過程が詳しく述べられている。

(追加) アンナプルナサウスは京大山岳部が1964年に初登頂しました。アンナプルナサウスの登頂記録は以下のサイトで見られますが何故か声は聞こえませんでした。

<https://www.aack.info/ja/archive/Ganesh=Annapurna.html>

以上

第六章 紀行・随想・活動報告（海外編）

アンナプルナ山麓 コブラ・リッジ・トレッキング報告

大竹口 誠治

2024年11月2日～12日まで、HNA-J（ヘルプネパールアソシエーション・ジャパン）が主催するネパールの旅に参加して、アンナプルナ山群とダウラギリ山群を眺望するコブラ・リッジ・ルートをトレッキングして来ました。個人的には、インドネシア駐在中に家族を連れて観光旅行をした1994年9月以来30年振りのネパールでした。詳細な報告書はリーダーである酒井利直氏が、HNA-Jの会報に掲載されており、ACKU会員の多くはHNA-Jの会員でもおられるので、私の報告は、一部酒井氏の報告書を引用させて頂き、トレッキングの行程と写真及び自分が感じた事を中心に報告したいと思います。今回のトレッキングは、酒井氏が、普段、山登りをしていない人でも無理なくこなせるように、1日の行動時間を最大でも6時間、高度差も600M位に留めて計画を立てられており、途中体調不良者は数名出ましたが、予定通り完遂出来たことに対して、改めて酒井氏にお礼を言いたいと思います。

1. 参加メンバー：敬称略

酒井利直 74歳（ACKU会員、企画・マネジメント）・石原 敏雄 78歳（大阪大学山岳部OB）・居谷千春 74歳（ACKU会員）・緒方順子 72歳（故緒方俊治氏夫人）・瀬良孝司 71歳（室町山の会名古屋）・大竹口誠治 67歳（ACKU会員）・大竹口美佐子 62歳（大竹口妻）・廣澤礼子 20歳（大阪大学WV部員） 以上8名

2. 行程

11月1日（金） 全員、成田空港近くのホテルに前泊

11月2日（土） 日本出発

11:30 成田発 16:40 カトマンズ空港着、18:00 RAMADA ENCORE ホテル着、
19:30 インド料理店で夕食、22:30 ホテル着

ネパール航空の飛行機で、カトマンズへ直行。ヒマラヤが見える窓側の席を取ろうとしたが既にすべて埋まっており、座席の隙間等から除く程度であったが、ビジネスクラスに乗っていた酒井リーダーの写真により、エベレスト等の8千M峰が 確認できた。30年前のカトマンズ空港は、タラップもない掘立小屋のような空港であったが、立派な建物になっており、時代の移り変わりを感じた。街中は、車も増えていたが、何故か、カトマンズを含めたネパールには信号機がゼロで、頭を突っ込んだ方が勝ちという、以前駐在していたインドネシアと同じ光景で、懐かしさを感じた。



RAMADA ENCORE ホテルの受付前



インド料理店

（真ん中奥がお世話になったバラル氏）

11月3日（日）曇

07:30 ホテル発、07:55 カトマンズ空港着、12:05 空港発、12:30 ポカラ空港着、13:00 空港発、
14:30 国際山岳博物館着 16:10 同発、16:30 ヒンズー（ビントウバシニ）寺院、17:00 同発 17:50
ホテルアンナプルナビューサランコット着。

ホテルでガイドのTUL（ツル）さんと落ち合い、ポカラ空港へ向けて出発。ポカラ空港が天候不

良のため、飛行機は予定より2時間半遅れで出発した。軒並み飛行機が遅れていたが、遅延を非難する人は殆どおらず、日常の事なので、皆、慣れている感じであった。ポカラ到着後、カイルホテルで昼食。その後、過去の遠征隊の写真等が展示されている国際山岳博物館を見学した。サランコットの山頂にあるホテルアンナプルナビューサランコットの玄関では楽曲とマリーゴールド（ネパール語でサエパトリ）の首輪の歓迎を受けた。ACKU会員の吉井さんの知人である総支配人の井本重喜氏からワインの差し入れを頂いた。



国際山岳博物館入口前



井本氏とホテルアンナプルナビューサランコット前

11月4日（月）曇のち雷雨

08:20 ホテル発、09:00 ナヤプール（新しい橋の意味）チェックポイント、10:30.ウレリ終点着、同 10:50 発、11:10 フォーシーズンホテル着（標高 2,020m）

朝に井本氏にお会いして、日本からのお土産を渡して挨拶した後、ホテルを出発。最初は舗装道路であったが、チェックポイントを過ぎた頃から1時間は悪路が続く、ディズニーランドのアトラクション並みの揺れであった。ウレリ終点からホテルまでの間にロキシーの原料となる粟や稗の栽培地が見られた。11時過ぎにホテル着。到着後、アシスタントガイドとポーターの自己紹介を行って貰った。14時頃から雷雨、夜中まで降り続いた、トランプ組とネパール語学習チームに別れて、思い思いの時間を過ごした。



ウレリのジープ最終地点



ガイドとポーターの紹介

11月5日（火）曇り一時晴

08:00 ロッジ発、10:40-11:50 ナヤタンティで昼食、12:00 同発、13:22 ハングリーアイホテル着（アッパーゴレパニ、標高 2870m）

朝から天気が良くヒンチュリ(6441m)が見えたが、直ぐに雲に隠れてしまった。緩い上りが続く道をゆっくりと歩いた。日本の山と違って、馬や牛（高地ではヤク）のフンが至る所にあり、しっかり下を見て歩かないと、悲惨な目に遭うリスクがある。ホテル到着後の15時頃から再び雨が降り出した。今年はまだ、天候が不安定な様子であったが、天気予報では明日から良くなるということで今後の天気に期待することにした。昨日が、緒方順子さんのお誕生日だったので、ケーキで、お祝いをした。



ホテルから見えたヒウンチュリ



緒方さんのお誕生日ケーキ

11月6日(水)晴

05:00 ホテル発、06:10 プーンヒル(標高3,200M)、06:55 発、07:20 ホテル着、08:20 発、11:20
スワンタキャンドルホテル着(高2,270m)

プーンヒルで日の出を見るために、早朝5時に出発した。途中の料金所で1人当たり150ルピーの入山料を支払った。登山者が多く富士山のように長蛇の列で、ヘッドライトの光が延々と連なっていた。プーンヒルでは天気が良く、アンアプルナ山群とダウラギリ山群の景色を堪能した。その後、アッパーゴレパニのホテルに戻って、朝食後、スワンタのホテルに向かった。ダウラギリの雄姿を眺めながら、殆ど下りであったが、最後は谷底からの登りで汗をかいた。



プーンヒル集合写真(アンナプルナ山群)



プーンヒル集合写真(ダウラギリ山群)



左からバーラチュリ(12の小刀の意)、アンアプルナサウス(7219M)、ヒウンチュリ、アンナプルナの主峰(8,091M)はバラハチュリ(又はバラハシカール7647M)の奥で見えず



スワンタへの下り道からのダウラギリ(8167M)

1 1月7日 (木) 曇

07:50 ホテル発、09:45 滝、 10:00 発、12:30 ダンダカルカの山小屋着(標高 3,020m)

ホテルを出て、田圃のあぜ道を通り、緩やかな道を登って行った。途中、川を渡った所の左手に大きな滝が現れた。滝の横にある茶店（ネパール語でバッティ）で一休み。そこからは急傾斜の登りとなった。前日のホテルにいたワンちゃん 2 匹が最後までついて来た。



スワクタから見るダウラギリの朝焼け



ワンちゃん 2 匹と記念撮影

1 1月8日 (金) 晴

今日泊まる山小屋が、連泊する人がいるとの理由で泊まれなくなったため、もう 1 日同じ所に泊まって休養日になることになった。風邪をひいている人が数名いるので、良い休養日になった。洗濯をしたりトランプをしたりして、各人、思い思いに過ごした。

1 1月9日 (土) 曇

07:20 小屋発、10:40 コブラダンダ着(標高 3,660M)

コブラダンタの小屋までは急な登りが続いたが、3 時間余りで小屋に到着した。途中、猿やヤクに会った。小屋に到着した時は、アンアプルナサウスが見えていたが、直ぐにガスに覆われ、見えなくなってしまった。いつも、午後からは雲が出て、眺望は望めないようだった。到着後昼食を頼むも 2 時間後の 13 時にやっと出て来た。夜も 18 時に時間指定していたにもかかわらず、出て来たのは、19 時になった。宿泊客が多いこともあるが、小屋の対応が悪く、明日は、上部をトレッキングした後に、この小屋に泊まらずに、下に移動することになった。夜中に月明りに照らされたアンアプルナ山群や星が綺麗に見られたが、私の持っているカメラやスマホでは上手く取れなかったため、性能の良いカメラを持たれている諸先輩の写真に期待することにした。



コブラダンダへの途中



寒さで葉っぱも凍っている



コブラダンタからアンナプルナサウスを望む

11月10日（日）晴のち曇

04:50 小屋発、07:00 避難小屋、08:15 折り返し地点着（標高 4,069M）、08:45 同.発、
9:30 休憩、11:15 コブラダнда小屋着、12:05 同発、14:05 ダンダカルカ着

今日の天気は晴で山が綺麗に見えた、上部では数日前に降った雪が残っており、所々、道が凍っている所があり慎重に歩いた。4069m地点まで登り、茶店(標高 4,280m)にまだ遠いので、ガイドのツルさんと廣澤さんの2人のみが上部へ向かうことにした。下りの途中で酒井さんと居谷さんがミニカイヤーレイクの探索に立ち寄った。小屋の対応が悪いので、前日泊まったダンダカルカに宿泊することにして、早々にダンダカルカへ下ることにした。ダンダカルカの小屋は対応が良く、料理も上手く、疲れた身体を十分、癒すことが出来た。



コブラリッジの途中にて記念撮影



朝焼けのアンナプルナ山群



廣澤さん（最高到達点の茶屋の途中にて）



階段状の登りと朝日を受けたダウラギリ

11月11日（月）曇

07:53 小屋発、11:30 スワンタキャンドルホテル着、昼食、13:00 スワンタ発、
14:25 シーユーロッジ着（シカ、1935M）

8時前に小屋を出発し、スワンタで昼食を食べた後、ショートカットの道を下り、ジープ道に合流後はジープ道を歩き、14時半頃にシカの村にあるシーユーロッジに到着した。途中、ネパールの山桜（ネパール語でパインユ）が綺麗であった。分岐点からなかなか辿り着かないので、シーユーアゲインという看板が掲げられているのではないかと冗談を言いながらホテルに向かった。久しぶりに温かいシャワーを浴び、さっぱりした。ビールで祝杯をあげた。夜は18時からガイドとポーターを交えて、打ち上げ会を行った。



カレラ（ニガウリ的一种）の下拵えをする緒方さんと廣澤さん



ガイドとポーターを交えた打ち上げ会

11月12日（火）晴のち曇、小雨

08:48 ホテル発.09:28 カリガンダキ川合流地点着、12:00 昼食所着、13:15 同発、13:45 サランコットマウンテンホテル着

9時前にジープ2台でポカラのサランコットのホテルへ向けて出発した。カリガンダキ川合流地点までは一気に下りであったが、途中、徒歩で登って来る数パーティーの団体を見かけた。車で行く方が楽ではあるが、景色を堪能し、高山病を予防するには歩くのが一番かも知れない。途中の村の風景は、昔の日本の田舎を思い出すようで良かった。合流地点からは、途中、数か所、デコボコ道はあったが、14時前にサランコットマウンテンホテルに到着し、今回のトレッキングは終了した。

その後、咳が続いている瀬良さんをポカラの病院で検査してもらうために2グループに分かれて行動した。結局、瀬良さんは、急性気管支炎と診断され、1晩、入院されることになった。翌朝は、綺麗なアンナプルナ山群が見られた。



シーユーロッジでの集合写真（背景はトゥクチェ(6920M)）

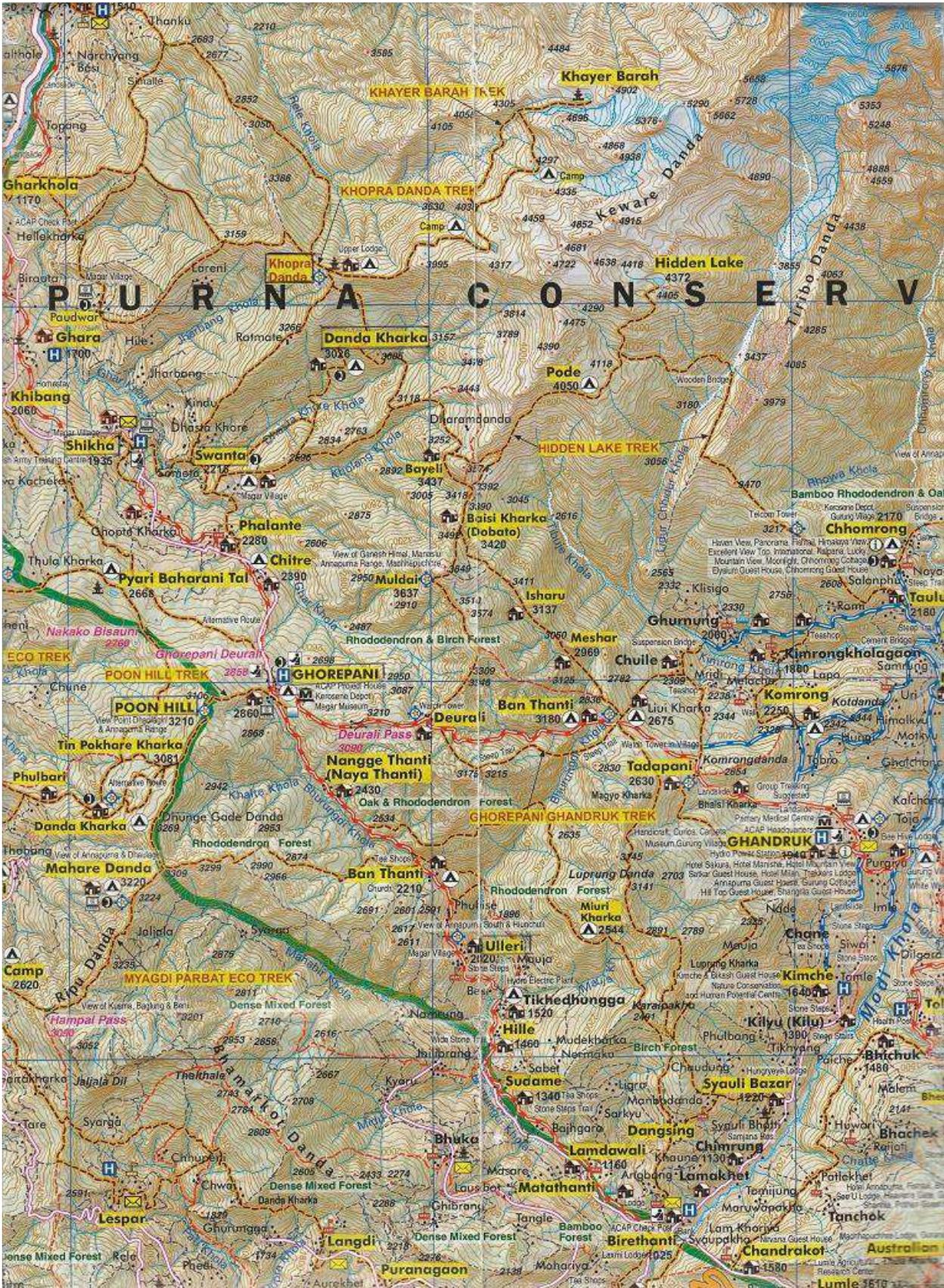


サランコットマウンテンホテルでの打ち上げ

以上

コブラリッジ地図

(訪問地：ULLER, GHOREPANI, POON HILL, SWANTA, DANDA KHARKA, KHOPRA DANDA, SHIKHA)



日本山岳会 120 周年記念事業

第 5 回グレート・ヒマラヤ・トラバース

吉井 修

2024 年 4 月 15 日～6 月 27 日の旅程で、ジョムソンからドルポ、ムグ、フムラ地方を歩き、ネパール・グレートヒマラヤトレイルのハイルート上の西端ヒルサを目指した。この遠征にネパール・グレートヒマラヤトレイル・ハイルート 1700 km の全踏がかかっていた。これまでの 4 回の遠征でルート上、約 1000 km を踏査していたが、まだ約 700 km を残していた。元々は 2 回に分けて進む行程であったが、コロナ禍で 2 年間（4 回分）計画遅れになっていたこともあり、2 回分を 1 回で踏査することになった。

グレートヒマラヤ山脈は東のカンチェンジュンガからマカルー、ローツェ、エベレスト、さらにランタン、ガネッシュ・ヒマールまではその稜線そのものが、ネパールとチベット（中国）の国境をなしているが、マナスルまで来ると、マナスルは完全にネパール領となり、アンナプルナ、ダウラギリ、カンジロバ、サイパル、アピと続く西半分では、ヒマラヤの主軸は国境の南を西に走っており、国境はその北を北西へ走っている。東から西に向かう私達は 8000 峰（ヒマラヤ主軸）を北（右手）に見て進んできたが、マナスルからはヒマラヤ主軸を南（左手）に見て進むことになった。今回歩くドルポ、ムグ、フムラといった地方はヒマラヤの主軸をそれより北のやや低い国境の山脈との間にあるインナー・ヒマラヤと呼ばれている地域である。南により高いヒマラヤの主軸があるにも拘わらず、分水嶺は国境の山脈にあり、この遠征で私達が出会う川は、より高いはずのヒマラヤの主軸の山々の間をすり抜けたり、ヒマラヤの隆起に負けず、深い谷を刻んで、南に流れ、最後はガンジス川となって、インド洋に注ぐ。（ちなみに国境の北側（中国・チベット側）の水はヤルツァンポ川となり、東へ東へとカンチェンジュンガよりさらに東の中国のナムチャバルワの東まで延々と迂回して、そこで大屈曲し、ブラマプトラ川となって、インドに現れ、最後はガンジス川となる。）

今回歩く地域は、南にヒマラヤの主軸がある関係で、インド洋からの湿った空気がせき止められる、また偏西風の影響もあり、モンスーンの湿った空気は北西までは届きにくい。それゆえ乾燥しているというのが、私の理解であった。実際 6 月に入るにもかかわらず、夕刻雪または雨が降ることが 2～3 度あったものの、雨具を使用することはほぼなかった。

ガイド・ポーターの中に今回の全行程を歩いたことのある者はいなかった。情報は彼らの経験の繋ぎ合わせ、空白の区間もあった。キャンプ適地や水場はどこにあるのか、通信はどれだけ可能なのか、食糧はどの程度補充できるのか、進んでみなければ、わからないことが多々あった。ゆく先々で村人から情報を取っての前進になった。

メンバーは、重廣恒夫（76）隊長以下、吉井修（63）、飯田邦幸（69）、轟涼（67）の 4 人。カトマンズで両替や食料・燃料などの購入をおこない、4 月 19 日カトマンズスタッフ 7 名と共にチャーターバスでカトマンズを出発、ポカラを経て 20 日ジョムソンに到着した。ジョムソン手前のマルファでは、チベット入りを目指した河口慧海師が 1900（明治 33）年の 3 月から 6 月まで滞在した家（現在は河口慧海記念館となっている）を訪問した。前半は荷駄をポーターで運ぶ計画で、第 3～4 回 GHT のシャブルベシ方面から 17 名のポーターをカトマンズ経由、ジョムソンにコンバートして雇った。

Great Himalaya Traverse 5th Stage Spring 2024



「百丈の橋を渡って、東からドルポに入る」

4月22日ジョムソン(2720m)～パルヤック(3150m)、23-24日～サンタ(3777m)2泊、25日～カルカ(4096m)、26日～百丈の橋通過～カルカ(4823m)、27日ラプチェ・シャルマ・パス(5140m)～ニワス・ラ(5120m)～カルカ(4776m)、28-29日～ツアルカポート(4302m)2泊。

歩行2日目の23日、ビーマ・ロジュン・ラ(4460m)を越える前後から吹きおろしの風雪が強くなり、未舗装の車道ではあったが、日没までかかって、這這の体でサンタの村に辿り着いた。出鼻を思わぬ寒気にやられた。前途多難を思わせたが、実際にはこの日が全行程中、最も酷い天気だった。サンタでは4月9日にチベット国境のヒルサを出発した「グレートヒマールレースⅡ＝グレートヒマラヤトレイルを西から東(カンチェンジュンガBC)までひた走る過酷なレース」の先頭パーティー5人に遭遇した。グレートヒマラヤトレイルのハイルートより南に迂回する箇所はあるもの、凄い時代がやってきている。

サンタを出て2日目の朝、車道を外れて河口慧海師が通った旧道を辿った。1時間ほどで断崖の上に懸けられた「百丈の橋」に出た。慧海師は「大溪流より百丈余の上なる巖端にかかれる細き橋を渡る。長さ三間、橋上に立ちて橋下を望めば、目眩し身寒き感をあらしむ」と記している。慧海師が渡ったのは1900年。車道がやってきている、手摺がついたというものの、124年の時を経て、当時と変わらぬ「天空の橋」の姿に感嘆した。(写真1・百丈の橋)



写真1：百丈の橋



写真2：ツァカン・ゴンパ

百丈の橋からは5000mを越える峠への登りとなる、峠の前後で各1泊、ジョムソンからは6泊7日でツアルカポートに着いた。ツアルカは1958年、川喜多二郎を隊長とする西北ネパール学術探検隊が長期に亘って滞在し、その著書「鳥葬の国」で有名になった村である。民泊した宿の話では、今はほとんど火葬であるが、今でもチベット暦の一定の日(日本でいう仏滅のような日)に該当した場合は鳥葬が残っているという。ツアルカへも今は車道が通じている。その車道はまだジープが入るには難しく、トラクターとオートバイがやっとの道ではある。が、宿の17歳の息子はカトマンズの学校を卒業し、ジープとオートバイを乗り継いで帰ってきたという。それは昨年の秋から可能になったばかりという話だったが、ツアルカの村もこの後、大きな変化に晒されるだろう。村は旧地区と新地区に分かれていて、間を流れる川には根深誠氏が尽力された鉄橋が架かっていた(根深誠氏に「ヒマラヤにかける橋」という著書がある)。

「ドルポの村々を巡る」

4月30日ツアルカポート～モラ・ラ(5030m)～カルカ(4787m)、5月1日～キャンプサイト(4210m)、2日～ティンジェ(4110m)、3-4日～シーメン(3850m)2泊、5日～ナングラ・パス(4260m)～コマ(4060m)、6日～リガン・パス(4470m)～サルダン(3770m)、7日～ナムグン(4360m)、8-9日～セラ・ラ(5095m)～シェー・ゴンパ(4343m)2泊、10日～カルカ(4721m)、11日～ビジェール(3850m)、12日～ヤンプル・ラ(4813m)～ポー・カルカ下(3664m)、13日～トラ・コーラに下った後～ポー(4087m)

4月30日ツァルカを出てから、5月13日ドルポの北西最奥の村ポーに着くまで、ティンジェ、シーメン、コマ、サルダン、ナムゲン、シェー・ゴンパ、ビジュールとドルポの村を巡った。ビジュール、ポー村を除き、車道が出来つつあるが、まだバイクしか見なかった。

ドルポに入るには東西南北どこから入るにしても5000mを越える峠をいくつか越えねばならないが、ドルポの中で隣村に行くにも、峠を越え、谷を下りての相当なアップダウンがある。乾いた山岳地帯によくぞこれだけの生活が営まれていると感心する。

サルダンは2020年に植村直巳冒険賞を受賞した稲葉香さんが越冬した村。戸数135戸、人口は500人を超えるが、冬の間(約4ヶ月)、今はその多くの住民はカトマンズに移動し、村には動物を飼っている人しか残らないと聞いた。

シェー・ゴンパには中央にシェー・スムド・ゴンパ、北西1.5kmにツァカン・ゴンパ、さらに北東にゴモチャン・ゴンパという3つのゴンパがある。私達は700年前に建立されたというスムド・ゴンパ横の広場にテントを張った。翌5月9日の休息日、私は往路1時間20分ほどのツァカン・ゴンパを訪ねてみた。ツァカン・ゴンパは断崖にへばりつくようにして建っている。そんな遠い断崖の寺に寺守りの僧侶がたった一人、もう4年間も住み込んで、毎日修行を積んでいるという。私には想像を絶する生活に思えた。シェー・ゴンパでは12年毎に大祭が行われる。今夏がその年に当たり、多くの信徒が集まるとのことだった。(写真2・ツァカン・ゴンパ)

シェー・ゴンパからは、ビジュールを経てポー村に向かった。ビジュールから標高差1000mのヤンブル・ラを越えて、一旦トラ・コーラに急降下し、対岸を急登してポー村に着く。ポー村はまさに最奥の村だった。戸数13戸、人口は80人ほどという。村は1000年前から、ゴンパは800年前からあるという。隔離された小さな集落で、営々と自給自足の生活を繋いできた訳で、人の逞しさに驚かざるを得ない。

「ドルポからの脱出、冬虫夏草採りの大部隊に驚く」

5月14日ポー～ニンマ・ギャンツェン・ラ(5563m)～リッジ・パス(5450m)～リッジ・パス下モレーン台地(5089m)、15日～プン・カルカ北方台地(4762m)、16日～ヤラ・ラ(5414m)～チャンディ・コーラ(4830m)、17日～峠(4450m)～タクラ・コーラ(3785m)、18日～ハイ・キャンプ(4350m)、19日～チャンゴ・ラ(5150m)～タジュチャウル(4050m)、20日～シレンチャウラ・カルカ(2945m)、21日～ティヤール(2418m)、22日～マンリ(1950m)、23日～ガムガディ(2095m)

ポー村から西へ、ドルポの脱出が一番の難関と予想していた。稲葉さんからも村人に水場の有無やキャンプ適地について、よく聞くようにとアドバイスをもらっていた。ポー村から5500m前後の峠を2つ越える一日は長い一日だった。ニンマ・ギャンツェン・ラへの稜線からは、背後にダウラギリ山群の高峰が見えた。また右手にはチベット国境の山々が、左手にはカンジロバを始めとする夥しい数の山々が見えたが、体力的にも時間的にも山座同定するほどの余裕がなかった。16日のヤラ・ラ越えも19日のチャンゴ・ラ越えも厳しい道程だった。一部、ロープを出した所もあった。まだ雪も残るこの時期、これらの峠越えは、カッツアルや馬では通過が難しかったと思われる。この時期のドルポの通過にポーターを選択したのは正解だった。

ヤラ・ラを越えてチャンディ・コーラのキャンプサイトに下る途中、驚いたのは冬虫夏草を採取する人の群れ。とんでもない山奥の5000m前後の山腹にたくさんの人が地面に這いつくばっていた。蛾の幼虫に寄生した茸が地表に芽を出す5月中旬から6月中旬までの間、ジュムラ周辺から家族総出でやってくるのだという。チャンディの谷だけでも1000人以上いるという話で、その入り口となるシレンチャウラ・カルカにはこれから現地に向かう家族のテントが村を埋め尽くしていた。私達は登攀道具や防寒具に守られているが、ほとんどの人がサンダル履き。現金収入の道が限られているとはいえ、過酷な山中に凄いなと驚くばかり。小学生くらいの少年少女もたくさんいた。貧しい生活を思わざるを得ないが、ただ、見ていると年に一度の村上げての遠出の出稼ぎ風情、少年少女の顔は決して暗いものではなく、どことなく羨ましい感もあった。(写真3・チャンゴ・ラの登り)、(写真4・冬虫夏草を探す人々)



写真3：チャンゴ・ラの登り



写真4：冬虫夏草を探す人々

5月24日ガムガディ～車でララ湖（2848m）往復

ドルポ、ムグ地方を歩いて、歩行32日目、車道が通じているガムガディに着いた。翌5月24日はナショナルパークであるララ湖をローカルバスで往復。少々観光モードで楽しみ、ガムガディに戻った14時以降は休養、5月4日以来でWi-Fiが通じたので事務局に経過報告、夕食では久しぶりに肉（鶏肉炒め）をたっぷり食べて英気を養った。ここで、ローカルポーター17名は解散、この先はガイド・コックを含むカトマンズスタッフ7名とカツアルと馬、合計10頭の編成で進むことになった。

「ガムガディ～シミコット8泊9日」

5月25日ガムガディ～ナファ（2704m）、26日～チャンケリ・ラグナ（3594m）～サースサプレ（3122m）、27日～ピプラン（1700m）の上流2kmの河原、28-29日～アプシア・レク（3195m）2泊、30日～ブンカ・コーラ（3010m）、31日～マルゴー・レク・バンジャン（4037m）～リバー・キャンプ（3015m）、6月1日～カープナスからジープ使用して～シミコット（2985m）

この8泊9日は村々とカルカを廻っていく。ここまで歩いてきたドルポ地方より平均的に標高も低い。これという高い峠もない。1週間ほど歩けば、また大きな町であるシミコットに出るということで、比較的組し易いのではないという気持ちがあった。ところが、どっこい1日の距離は長く、登り下りは相当のものがあつた。また標高が下がったことで一転、暑さに苦しむ場面も出てきた。特に1700mのピプランから3195mのアプシア・レクまで登った5月28日は午後から2805mの峠を越えてのアップダウンもあり、体にこたえる一日であつた。それ故、翌日を休養日にせざるを得なかつた。また、31日も1000m登って、1000m下る行程で、マルゴー・レク・バンジャンの登りではブルーポピー（亜種とのことである）の青い花に喜んだものの、バンジャン（峠）からの下りは急峻で閉口、これも骨の折れる一日であつた。踏査開始から1か月以上が経って、疲れも出てきたのだろう。シミコットに着く前後から、轟→飯田→吉井→重廣の順にそろって皆、下痢になり、最後に発症された重廣隊長は症状がヒルサまで続いた。しかし、道中では川魚を買って夕食の一品に加えたり、ポーターがワラビを取って、ピリ辛料理にしてくれたり、村の売店でコーラを買っては談笑しながら飲んだり、アプシア・レクの休養日にはテントサイト横の一軒屋のはしゃぐ子供の笑顔に癒されたりで、村々を廻る旅ならではの光景を楽しむことができた。

6月2日シミコット（レスト）

シミコットは飛行場もある街である。この先はケルミの西のサリ・コーラの入口から一旦GHTルートを離れ、中国国境を目指して北上、聖山カイラス（6656m）の望見を目指す。その後、南西に歩いて反時計回り、GHTルートの最西端の町ヒルサに出て、ヒルサからシミコットはGHTルートを西から東へ戻ってくる。最終的にシミコットからカトマンズに帰る計画になった。この日、ガイドを除くカトマンズポーターとカツアル隊は休養日なしで出発。私達は2日間の行程を翌日ジープで追いつく段取りとし、1日休養を取った。ガムガディ→シミコット間ではWi-Fi通信が出来なかつた。シミコットでも通信状況は悪かつたが、休養日の大半を事務局や家族への交信に使うと共に、下痢の療養に努めた。荷駄を運ぶカツアルと馬はシミコットから1頭減つたが、荷駄以外に隊員1名が馬に乗れる態勢を取った。後の行程は、轟隊員は1日を、重廣隊長は大半を馬で進まれた。

「シミコットから中国国境を目指して北上」

6月3日シミコット～ジープでケルミ(2860m)、4日～サリ・コーラ入口(2987m)、5日～サリ・コーラ・カルカ(4224m)、6日～ニャル・ラ(5001m)～ディミチュー(4489m)、7日～タクチェ・コーラ(4362m)、8日～マルチュングライ(4693m)、9日～馬・カツアルで、ロルン・ラ(4933m)往復。

シミコット～ヒルサ間の車道ができたのは8年前だが、車が通ったのは3年前からという。歩行で2日間の行程をジープで3時間走って、荷駄隊に追いついたが、途中、トラクターやジープをブルドーザーが後ろから押して、ようやく急坂を通過する場面もあった。

6月4日朝、放牧に向かう物凄い頭数の山羊がテントサイトの前を通過する。この日は水場の関係でGHTルートを西へ、2時間半も歩かぬうちに、サリ・コーラ入口のロッジの前に宿営することになった。ここは中国国境へ北上する道とシミコット～ヒルサ間の東西の道の交差点であり、何台かのバイク、ジープの通過があった。ロッジに泊まっていた夫婦からハリジェまで車道が通じているとの情報を得た。(写真5・放牧に向かう山羊の群れ)

5～7日の行程に村はなく、カルカや小屋のような家が数軒ある所が2ヶ所あるだけだった。静かで、かつ美しい景色の山旅で、出会ったのは放牧の行き帰りの山羊、交易のヤクくらい。6日に最後の5000m越えの峠、ニャル・ラを越えた。

8日、タクチェ・コーラから中国国境へも車道が出来ているが、ショートカットの旧道を登り、台地の上へ上がった。回りは広大な高原となり、遠くに山並みが見える。いかにもチベット高原という景色になった。サキヤ・コーラを渡る橋まで進みたかったが、牧草の関係でその手前でテント泊となった。

9日、中国国境まで往復30km近くあるということで、隊員はカツアルで往復することになった。正確には重廣隊長と私は馬、飯田、轟隊員はカツアルに乗った。カトマンズポーターは居残りでもよいのだが、彼らも行きたがり、留守番に二人を残して、中国国境を目指すことになった。彼らは早足の徒歩である。まだ暗い3時40分に出発、サキヤ・コーラ、ギャウ・コーラの橋を渡る。途中、キャン(野生の馬)やブルーシープの群れを見た。野生の動物の群れはとても美しい。6時50分、ロルン・ラ着。彼方のカイラスを探すが見えない。チベット国境まで歩き、カイラスの現れるのを待った。ここを訪れたことのある馬方が前方下方に見えるのがマナサロワール湖でその上にカイラスが見えるというが、あれが輪郭かもという程度で、見えたとは言い難かった。それでも我が馬方やカトマンズポーターがカイラスの方向に向かって、体を地に伏せて拝礼を繰り返し始めたのには驚いた。さすが聖山である。

カイラスは見えなかったが、ナムナニ峰(グルラマンダータ、7694m)は見えた。神戸大学西蔵学術登山隊がクーラ・カンリに初登頂する前年の1985年に京都大学学士山岳会・同志社大学山岳会・中国登山協会の日中合同隊によって初登頂された山であるので、昔からよく知っていた。全員揃って、記念撮影をした。中国国境には中国側の「是より中国領土、即戻れ」という標識が立ち、少し先には国境監視所も設けられているが、ネパール側には何もない。対照的なことだと思った。マルチュングライに戻ったのは11時50分だった。(写真6・ナムナニ峰をバックに)



写真5・放牧に向かう山羊の群れ



写真6：ナムナニ峰をバックに

「フムラの村々を歩いて、グレートヒマラヤトレイル西端のヒルサへ」

6月10日マルチュングライ～トーリン (4152m)、11日～ハリジェ (3741m)、12日～ティル (3944m)、13日～マネペメ (3950m)、14日～ヒルサ (3647m)、15日～ジープでチョーラグナ (4107m)～ナラ・ラ (4560m)～シミコット (2985m)、16日シミコット～空路でネパールガンジ～カトマンズ。

中国国境を往復して後はタクチェ・コーラに戻り、そこから西へトーリン、ハリジェ、ティル村を辿って、ヒルサに達した。トーリンは家屋数軒、ハリジェ、ティルは古くからの石積みのそれなりの村であるが、途中にあったジャン (3990m) も含め、過疎が進んでいる。初めはカトマンズに冬の間だけあるいは勉学の子供だけというものが、戻って来なくなるのだろう。過疎の問題がここにも押し寄せている。

行程の終盤、特に6月13日は南にフムラ・カルナリ川の深谷を見下ろして山腹を縫う道であった。グレート・ヒマラヤの大隆起と谷のせめぎ合い、今回の行程では一見してどちらが上流か下流か、わからなくなるような場面に何度も出会ってきたが、このカルナリ川も相当に深い。彼方下流が上流のように見えた。マネペメの手前からは車道となり、最後、中国国境近くになって、九十九折りの道を延々と下りて、ヒルサにゴールした。ヒルサからシミコット間は歩行では6日間の行程であるが、砂塵まじい道でもあり、ジープで戻ることになった。最後はジープになったが、6月15日にシミコットに着いて、踏査を完了した。

(写真7・ヒルサが見えた)

今回の行程は踏査日数55日(内テント46泊)と今までで一番長かった。これを歩き切ったことで、ネパール・グレートヒマラヤトレイル・ハイルート1700km全踏になった。「今もなおなせと囁く声ありて 辿りゆくなり 遠きこの道」。1958年西北ネパール学術探検隊の川喜田二郎隊長の一首と記憶している。私はこの一首を胸に自分自身を励ました。たくさんの支援や応援をいただいて、歩き切れたことがうれしい。



(写真7：眼下にヒルサの町が見えた、吊り橋の右手が中国国境のゲート)

最後にドルポを歩いて思ったことを一つ、書き残しておきます。西北ネパール学術探検隊の川喜田二郎隊長は次のように言っておられる。

「国民・民族により、上昇カーブの時とダウンカーブの時があるんじゃないか。～上昇カーブの時は人々が創造的で、クリエイティブな力を誰しもが持っている。～クリエイティブな時は何か心が広い。大らかなところがある。～保守的になると心が狭くなって、すぐに目に角を立てたりする」。ドルポを歩いていて確かに感じるのは、厳しい生活にもかかわらず、「ナマステ～！」と声をかけてくるおばさんの何とも言えぬ大らかさ、明るさ。冬虫夏草を探す人々、ヤクや山羊を追う少年、食器を熱心に磨き洗う我がポーター達。皆な大らかな上昇志向の夢を持っている。今、得ている状態より、よりよい状態を得たいという願望、希望。その時、その場で、自分の持ち場で、自分の置かれた状況の中で最高のことをしたい、最高の問題に挑みたいと思う気持ち。金銭欲とか、名誉欲とか、そんなものだけではない、そうしないとおさまらない何か。が、今の日本はどうだろうか？ 私自身は大らかでありたい、キラキラした目をと～、会社の後進にもそのようであって欲しいと託してきたつもりではあるが、果たして、どうだろうか？

今回、ドルポの風をいっぱい浴びた。私自身も年寄りな年寄りの持ち場の中で精一杯やってみる気持ち、そして、大らかさ、明るさを忘れたくないと思った旅だった。

以上

第六章 紀行・随想・活動報告（国内編）

東日本の山々への挑戦—1960年代前半のACKU 関東OBの活動

豊田寿夫

1. はじめに

1950年代後半に山岳部で訓練を受け、'60年代の初めから関東で活動を開始した我々には現在の若いOB他のメンバーに伝えておきたいことがあります。特に出身大学の所在地から遠い関東や東北の山々での経験の中にはACKUの若いOBや山岳部員諸君の役にたつものがあるかと本稿をまとめた。

1950年代にACKUは数次の山の遭難を経験し、その反省として山岳部では登山の基礎を、本格的な登攀活動はOBになってからの指導を受けて卒業した。したがって我々の年代の関東在住OBは関東以北の山々について神戸での山岳部在籍中にはなかった新しい登山経験を持っているのである。本稿にしたためた我々の登山活動の記録がお役にたてば幸いである。

ACKUが関東で組織的な登山活動を始めた1960年代の初め東京—神奈川地域に在住していたのは次のメンバーであった：—

前田精三(1959/B卒)、水口一義('59/B)、中家 章('60/B)、豊田寿夫('61/T)、河西孝昭('61/T)、村上 勝('61/J)及びその後に転勤で加わった篠原 均('63/B)

なお、この関東OBの山行記録は山と人第7号(1962-3)p80“東京—メモリアルズ—”に掲載されている〔資料-1〕。本稿はその記録にもとづいて編集したものである。必要に応じて参照願いたい（上記の山と人誌はPDF化されている）。

2. 組織的なトレーニングの開始—谷川岳をめざして

1) 関東OBの行動記録

1961年5月関東OB/4人が当時関東岳人の間で人気だった丹沢の主稜の登山コースをまず歩いてみた。これがACKUの関東における組織的な登山活動のはじまりとなった。そして山梨の笛吹川流域や奥秩父等に対象を広げ、関東の山々を知ることに努めた。

当時、関東における岩登りを含むトレーニング場といえば、関東平野に散在しており、三ッ峠(山梨)、鷹取山(横須賀)、鋸山(千葉)、丹沢(沢登り/神奈川)等であった。特に三ッ峠は全国的にも有名で、関東OBも'61/6月と'62/8月の2回、合計7人が登攀訓練を行っている。他の2か所は石切場であり訓練には適さず、また丹沢の沢登りも水無川の流れが変わっており効果がなかった('62/7月4人)。

2) 谷川岳へ—ACKU/OBの谷川合宿(1961年8月4-10日)

学生の頃の仲間が集まって関東の山になじもうとトレーニングを続けている中で、誰が言い出すとなく出てきたのは上越国境の谷川岳だった。在学中に当時の山岳部長だった高木正孝先生から繰り返し聞いた山である。

そして'61年5月28日には水口・中家・豊田・河西の4人が上野から満員の夜行列車にゆられ土合駅までやってきた。まずは残雪たっぷりのマチガ沢を登り、国境稜線を歩いたあと越後側に下って土樽駅から帰京した。これが“高木先生の山”谷川への取組のはじまりであった。

このあと高木先生とザイルシャフトを組み一ノ倉沢滝沢を登るチャンスは意外と早く訪れた。先生は(旧)成蹊高校在学中の1930年代前半にヒュッテ虹芝寮建設に参画し、谷川岳一ノ倉沢滝沢奥壁の冬季初登攀者(1933年12月)として知られている。この後、欧州に留学してヨーロッパアルプスやヒマラヤで活躍し、ACKUの山岳部長として着任してからは南米パタゴニア遠征で登攀隊長を務めた登山家である。

当時ACKUには南米アンデスへの第3回目の遠征計画があり、同先生と予定メンバー金井健二氏以下4人に加え関東OB前田・水口・中家・豊田・河西の5人を含む登山合宿が谷川の成蹊大学虹芝寮をベースに行われた(1961.8.4-8.10)。

ところが連日雨が続き当日は一ノ倉沢本谷からザッテルを超えて、滝沢のAルンゼルを辿り国境稜線に登るにとどまった。高木先生にとっては28年ぶりの滝沢であり、また最後の谷川岳となった(先生は1年後に南太平洋の調査活動中に行方不明となった)。この時の登路の詳細等は〔資料-2〕p120地図1を参照のこと。

3) 秋の谷川岳へ

1961年8月の合同登山は雨のため1日しか行動できず、参加した関東OBの気持ちは満足できるものではなかった。まず前田他1人(会社同僚)が8月20日一ノ倉沢2ルンゼへ、秋に入ると9月23日には前田・豊田が幽ノ沢に入った。右股を登って連続的に現れる滝場を乗りきり、16:30 堅炭岩近辺のザツテルに到達したところで夕立に見舞われ肩の小屋に逃げ込んで仮泊となり、帰京が1日遅れになった。また10月15日には前田・豊田が一ノ倉沢3ルンゼ、水口・村上が4ルンゼに挑戦したが、3ルンゼは難しく撤退して水口パーティに合流し、西黒尾根を駆け下り土合発の最終列車にやっと間に合ったハードな1日だった。

3. 山岳部/OB 合同谷川岳合宿-1962

1961年8月の谷川合宿のあと関東OBグループ中心の4回(1回は冬のスキー/後述)の山行経験を踏まえ、谷川岳全域の登山ルート状況も分かり登攀経験も積んできた。そこで関西他の若手OBにも声をかけ山岳部上級部員の育成を兼ねた合同合宿を谷川岳で持つことになった。谷川岳芝倉沢出合の虹芝寮で実施された総員10人の合宿('62年8月12-19日)の記録は山と人7号の1962年山岳部活動記録の中に収められている[資料-1/p55]。その概要を下表にまとめたので参照願う。

参加メンバー：

関東OB：前田・水口・中家・豊田・河西・村上 その他：東郷賢治・山形俊二・坂本 亨

山岳部：鷲尾孝二(L)・山上博義・高田和三

本合宿の参加者は若手OBと上級部員により構成されたため、各登攀チームの技術レベルもそろっており、天候にも恵まれて一ノ倉沢とその周辺ルートを総なめにした記録が残っている[資料-1]。筆者は坂本と組み3ルンゼを登ったが、優れたクライマーである彼のトップに助けられ快適な登攀を楽しんだ。前年10月15日に前田・豊田のパーティでこのルートに取付きF₂地点で撤退した時の雪辱を果たした(前2.3項を参照)。

この合宿は参加したOB全員に好評だった。また、参加した山岳部員がOBとザイルを結び一ノ倉沢の主要ルートにチャレンジした様子が記録されている。一方、山岳部のリーダーであった鷲尾が書いた所感には一ノ倉沢での本格的な登攀の感想と六甲を中心とした山岳部の訓練への反省を残している(この部分は[下表]の記録には収録されていない)。

なお、本合宿にはACKU元副会長の松本 清先輩(東洋大学教授)が子息と共に来訪し一泊、谷川岳頂上に登られた。

[表] 谷川岳合同登合宿(1962)記録

8月11日 第1陣8人が上野から夜行で出発 水口・東郷・中家・河西・村上・鷲尾・ 山上・高田	8月15日 晴後雷雨 ①本谷パーティ 山形・鷲尾・坂本・山上 ②幽ノ沢右股パーティ 水口・中家
8月12日 晴後曇 ①本谷パーティ 東郷・中家・高田 ②2ルンゼパーティ 河西・村上・山上 ③南稜パーティ 水口・鷲尾	8月16日 快晴 前田・豊田入山/山上下山 幽ノ沢右股パーティ 山形・坂本・鷲尾・高田
8月13日 快晴 (休養日) 村上下山、坂本入山 カタズミ沢偵察 東郷・中家・鷲尾・山上	8月17日 快晴 ①烏帽子奥壁パーティ 前田・鷲尾 ②3ルンゼ 豊田・坂本 ③南陵パーティ 山形・高田
8月14日 晴後曇 ①南陵パーティ 中家・山上/東郷・坂本 ②2ルンゼパーティ 水口・鷲尾・高田 (滝沢はBルンゼを登る)	8月18日 晴後にわか雨 ①幽ノ沢日左股/滝沢パーティ 前田・豊田 ②幽ノ沢右股パーティ 坂本・鷲尾
	8月19日 晴後雨 徹収 13:00→土合駅 14:20

4. 冬山志向と関東・東北の山スキー

1) 氷雪技術への取組

1960年代前半の日本はスキーブームであった。各自の職場でもスキーバスが出て週末には関東近郊でスキーを楽しむ職場の同僚達も多かった。我々も'62年/1月~2月に日光・菅平でスキーを楽しんだ。ただ我々山岳部OBには彼等と違うとの強がりもあり、'61年末(12.29-1.4)には八ヶ岳で合宿を持った(水口・中家・豊田・河西)。行者小屋の手前でキャンプを設営、横岳以南のピークを登り予想外に

深い雪に苦しみ赤岳の登頂ができた程度だった。参加した4人には冬の八ヶ岳の寒さが身にしみたま月休暇だった。

関東岳人の冬の活動を調べてみると、冰雪技術の訓練に奥日光雲竜峡を使った記録を見つけた。'62年1月に我々も日光に行ってみたが氷結しておらず、2月に再訪して氷滝でアイゼンの訓練を行った(前田・水口・豊田)。

2) 山岳部の冰雪技術の向上への支援

1960年代の山岳部の活動の中でリーダーシップの重荷だったのが新入部員に対する冰雪技術(特にアイゼンとスキー)関連の訓練だった。前者は11月末に秋山合宿(富士山)、後者は冬山合宿と別プログラムで実施しなければならず負担になっていた。1962年の富士山(11月21-27日)にはOB/10人が参加、関東からは前田・中家・豊田・河西が出た。

加えて冬山の岳沢強化合宿('62.12.26-1.8)が続き部員10人に対しOB/8人が参加したが関東からは前田・中家・豊田・村上が参加して指導にあたった。

3) 上越・東北の山スキー

1961.1 冬の志賀高原京大ヒュッテ(3日間)のあと横手山からスキーで草津温泉に出て帰京(前田・水口・豊田+京大OB)

1961.3 福島(猪苗代)→山形(天元台/米沢)のスキー縦走を試みるも強風のため五色沼近辺で打ち切り、高湯温泉に出てJR福島駅から帰京(前田・水口・豊田+京大OB)

1962.2 八幡平全山スキー縦走(3日間)(前田・豊田)

盛岡から田沢湖線で雫石へ、秋田との県境稜線をスキーで北上し2日かけて八幡平に入った。あと松尾鉦山(当時)に出て帰京

4) 谷川・芝倉沢の滑降

1962.3.11 谷川岳・芝倉沢スキー下降(前田・豊田)及び1963.3 同谷川・芝倉沢スキー下降(前田・豊田)/1964.3 同谷川・芝倉沢スキー下降(前田・篠原)

関東岳人からの情報で積雪期の芝倉沢がスキー滑降に使われていることを知り、前田・豊田でやってみることにした。開通して間もない谷川岳ロープウェイで天神平頂上まで登り、越後側から吹き付ける西風にあえぎながらスキーを担いで国境稜線をアイゼンで歩き一ノ倉岳(1974m)に到達した。ここでスキーをつけ芝倉沢に入り左方向に下った(右方向に下れば幽ノ沢に落ち込む)。快適な滑降を続け沢幅が狭くなるS字部では左斜面からの落雪に注意して抜け、あとは沢のスロープにそって湯檜曾川との出会に到達した。

1963年3月にも同じメンバーで芝倉沢に入ったが、沢の中央部には左岸からのデブリが積み上がり滑降の障害となり時間がかかった。1964年の滑降では豊田は所用があり大阪から転勤してきた篠原が代わって実施された。彼はこの種の山スキーには不慣れで時間ロスが多く土合駅の最終列車に間に合わず翌朝の帰京となったとのこと。

芝倉沢のスキー滑降は関東岳人の間ではある程度知られたコースで、その後ガイドブックにも取り上げられている〔資料-3〕。なお、高木先生もこのルートを第2次大戦後に滑降したことを述べている〔資料-2〕。

5. むすび

—関東OBが本稿1-4項のような活動実績を持つ1960年代前半を振り返り、活動範囲を東北の山々に拡大する登山活動の中で特に谷川岳を対象に報告した。新たに関東に赴任する若いACKU/OBが当地での登山活動を行うにあたっての参考に供したい。

—1960年代前半、関東若手OBのリーダー格だった前田精三氏は日本-チリ合同アンデス遠征隊のメンバーとしてパタゴニアでも隊長だった高木正孝先生の直接指導を受け、アレナレス峰の第3登に成功している。同先生と関係が深い谷川岳についても各シーズンの登攀を行い、冬期の芝倉沢滑降についてはACKUチームの先導役を務めた。

—本稿にはACKU/OBが1950-60年代初期の山岳部長として指導を受けた高木正孝先生との最後の山行を報告している。先生の谷川岳での足跡が若手メンバーにも引き継がれることを期待したい。

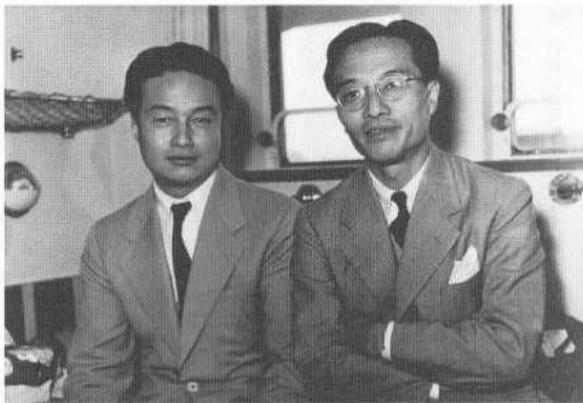
—谷川岳芝倉沢出会には虹芝寮(成蹊学園所有)がある。永らく ACKU の指導にあたられた高木正孝先生と関連の深い山小屋である。本寮を活用して ACKU の若手 OB/山岳部員が一ノ倉沢他の登山ルートのカライミングを楽しんでほしい。

—上記の関東 OB の活動の中心にいた前田精三氏(90 才)は健康をくずし、家族から退部届が出ているとのこと。早期の回復を祈りたい。

参考資料

- 資料-1 山と人 No.7 (1962-3) 神戸大学山岳会・山岳部
- 資料-2 ACKU-news 37 (2011) 同上
- 資料-3 リフトで登る日帰り山スキー特選ガイド 佐藤 明 白山書房

写真-1：高木正孝先生と兄の文一氏



高木正孝(たかぎ・まさたか) (写真左)

大正2年生まれ。兄は医師であり登山家の高本文一(写真右)。祖父は慈恵医大の創設者高木兼寛である。成蹊小学校から成蹊高校へ進学。学友の渡辺兵力と谷川岳一ノ倉沢奥壁冬季初登攀を成功させた。虹芝寮建設当時の不言会旅行部委員長。東大卒業後、留学の為ドイツにわたる。専攻は心理学。この時期ドイツオーストリア山岳会ベルリン大支部に所属して登山をおこなう。昭和27年と昭和28年のマナスル登山に参加した。帰国後、神戸大学に赴任し心理学者として教壇に立つ。昭和33年神戸大学日本・チリ合同パタゴニア探検隊登攀隊長としてアレナレス峰登頂を成功させた。昭和37年8月6日学術調査に出掛けた南太平洋マルケサス諸島洋上で謎の失踪をとげる。

写真-2：山岳部長の頃の高木正孝先生



1961年12月氷ノ山千本杉ヒュッテにて

→冬季幽ノ沢での雪崩による高度差百数十メートルの滑落という事故にあいながら、その3か月後には兄の文一氏と組んで氷結した滝沢を末端から果敢に取り付かれた〔虹芝寮80年史より〕。

写真-3：東京OB会に参加した時の前田精三氏(2016年11月19日、右から2人目)



千山巡礼 山に魅かれた冬の南アルプス

井上達男

千山巡礼の記録を Home Page に掲載し、読み返して校正を続けている。登山の魅力に取りつかれるきっかけは人それぞれにあると思うが、私の場合は山岳部に入部した 1966 年の冬山合宿だ。もう半世紀以上も前のことだ。当時は山岳部員も多く、規模の大きな合宿ができた時代だった。黒部源流の積雪期合宿の後、南アルプスでの集中登山が計画実行された。

当時の南アルプスは富士川源流の野呂川にも天竜川源流の戸台川にも南アルプス林道は開削されていなかった。野呂川は広河原から奥に林道はなかった。両俣小屋近くまでと北沢峠を越えて林道が整備された現在とはかけ離れて原始の沢歩きが楽しめた。一方、大井川源流は二軒小屋以北には現在も林道は開削されていない。当時、冬は伝付峠を越えて入溪しなければならなかった。

千山登山の記録に大井川源流の冬山登山の記録が残っている。歴史物として読んでも面白いのではないかと投稿させていただく。千山巡礼の記録は筆者の下記 HP にあります。

千山巡礼 HP <http://sherpika.e1.valueserver.jp/index.html>

サイト名 Haksanview [千山巡礼] Password: timsenzan

山行名称:大井川源流冬山合宿

行動記録:

日 時: 1966 年 12 月 27 日～1967 年 1 月 8 日

メンバー: 大井川東俣池の沢定着隊:L 河本卓生 香川秀房 中村正男 井上達男

北部縦走 北岳―農鳥岳縦走隊:L 中園卓爾 八田義一 坂東和美

中部縦走 赤石岳―塩見岳縦走隊: L 徳田洋二 鶴谷将俊 金井良碩 坂西俊一 美浦明彦

天 候: 冬型の強まった年末年始

合宿の計画は、3 隊に分かれて南アルプスで展開するもの。北部隊は北岳から農鳥岳へ縦走し、池の沢小屋に下山。南部隊は赤石岳から塩見岳へ縦走し、池の沢小屋に下山。池の沢小屋定着隊は農鳥岳と塩見岳をアタックするという計画だった。

1966 年 12 月 27 日(火) 神戸出発

6 時前にきちんと目が覚める。寒い。温度計を覗きに行く。2℃。六甲の山々はすっぱり雪雲に包まれていた。昨日までに準備はすっかりできた。うんと減らした個人装備に今朝の寒さは少々心配だ。いざ、山着を身に着けると暖かいこと。安心。

気圧配置は冬型。日本海側の各地は大雪とある。山は荒れ狂っているだろう。南アルプス一万尺の稜線で親分たち(赤石岳から塩見岳まで縦走の南部隊、親分とはチーフリーダーの鶴谷将俊氏)は奮闘中のことと思う。

大阪駅で中村さんのほほえましき彼女との離別の一場面に皆心を和ませた。「第一なにわ」は 11 番ホームを滑り出した。差し入れの青山最中をありがたくいただきながら、国会解散、中国文化大革命などの報道で賑わう新聞を読んでいると京都に到着。山科トンネルを抜けると大津。一面プラチナの輝き。舞う銀粉。列車は雪の世界に飛び込んだ。川岸の松林、アスファルトの道、コンクリートの屋根、畑、そして列車の行く手などすべて雪だ。それに雪は降り続けている。とある駅のプラットホーム、待つ人々は寒そうに白い息を吐きながら雪の中にたたずんでいる。(以上午前)

静岡駅で小林廣夫が乗り込んできた。ホームに飛び出して列車の後方に走っていくと、いつか僕が借りて着ていたオーバー姿でやって来た。両手におにぎりの差し入れを持っていた。富士まで一緒に乗っていく。車内では静岡の話に笑ったり、近くの座席の 17、8 の女性の様子を話したり。その娘のことがなんだか頭にこびりついて離れない今だが。富士駅で小林廣夫と別れる。

富士山が列車の右に左に高く美しく聳えている。頂上あたりに積雲を従えている。伊豆半島がずっと先まで山並みを続けて横たわっていた。海は緑か紺か、太陽を照り返してキラキラ光っている。静岡の小高い丘が続くあたりは茶畑が目立つ。

午後 7 時過ぎ、新倉に着いた。

12 月 28 日(水) 伝付峠

昨夜は月を眺めて道端にシュラフでごろ寝。3 時ごろ寒くて目が覚める。被っているツェルトに吐く息が白く凍り付いている。満月があんなに高い角度で輝いている。朝はまだまだだろうなと思いつつ震えていたら眠ったようで、気が付いたらツェルトが剥れていてお月様が明るく輝いていた。が、また眠った。

鼻の頭が冷たくなって目覚めると6時を過ぎて、あたりは明るくなっていた。トラックやバスが動き出していた。

田代川の出合に来て、昨日買っておいたパンやミカンの朝食を摂った。左岸から吊橋に揺られながら渡ってさらにもう一つ渡ってどンドン谷を遡ってゆく。沢は広い。粘板岩や緑泥片岩がゴロゴロしている。左岸に白く凍った滝がキラキラ光っている。落差50mと20mぐらいの二段になっている。歩くと体が温まって来た。

広河原の発電所手前で斜面の上の方100mぐらいからテント大の岩が轟音と共に落ちてきた。おばさんが止めてくれなかったらひとたまりもなくやられていただろう。バキッと樺をなぎ倒し地面を削りながら落下してきた。「おばさんの声が聞こえなかったのか」と河本さんが問いただす。それにしても恐ろしい瞬間であった。

発電所を過ぎたあたりから沢の氷が多くなってきた。枝沢はすべて氷結し、アイスフォールを形作っている。ブルーアイスとなって神秘的に光っているところもあった。

伝付峠の登りは長く、重荷が肩に食い込み苦しいものだった。峠の少し手前、稜線が目の高さに見えるあたりに水が出ていてテントが張れる場所があった。富士山がきれいに見える。ここで今日はテントを張った。

12月29日(木) 大井川源流遡行 押し出し沢

寒さに震えて目を覚ます。3時ごろだろうか。隣でゴソゴソと河本さんがラジウスに火をつけていた。夕食の残りのご飯をおかゆにして塩と梅干しで食べた。星の瞬きが弱くなった頃、出発。少しばかり付いた雪が歩くとキュルキュルと軋む。モミの木のある坂道の左手にオレンジ色の水平線が見える。富士山がシルエットになってスクッと立っている。

すぐに伝付峠に着いた。まだ沈まぬ月に照らされた兎、聖、赤石が西の空に連なっている。大井川源流の東俣も西俣も眼下ずっと下の方だ。雪が少なくて意外に思えた。長かった伝付峠の登りは終り、二軒小屋目指してつるつる滑る急坂をぐんぐん下ってゆく。樹間に赤石、聖がモルゲンロートに輝くのを見た。8時ごろ、二軒小屋に到着。

ここから大井川源流東俣の遡行が始まる。東俣は澄み切った水が流れている。所々ブルーアイスが不気味に光っている。押し出し沢に到着し、今日のテント場とした。水は近いし、薪も豊富にある。焚火をして温まった。

12月30日(金) 池の沢 Base Camp

ぐっすり眠っていて起こされる。快晴だ。月明りを頼りに沢に水汲みに行った。なかなかロマンチックな雰囲気だ。青い光を放つ雪を踏みしめて河原に出てみると石に着いた氷が雪よりもっと透明で冷たい光を放っていた。

長瀬沢はすぐに左手から合流する。吊橋をいくつか渡ってどンドン進むと広い河原に出た。雪原の間を縫って流れがあり、樅と唐松に覆われた中の島がある。右岸から向池の沢が流れ下っている。紅葉のころに来ればきっと心を奪われるだろう。河原の雪原に下りて歩を進めてゆく。二か所の渡渉にてこずって一休み。川上を見通すと池の沢の小屋が見えていた。

テント設営後、12時に出発して池の沢を偵察する。倒木が多く行く手を阻む。沢芯は薄氷が張っていてまことに歩きにくい。池の沢の池のワンピッチ手前ぐらいまで行った。右岸のふみ跡を伝って帰幕。

12月31日(土) 農鳥岳アタック 晴れ後曇り

2:45 起床 4:00 池の沢テント出発 7:00 池の沢、池 8:00 広河内岳頂上 10:05-10:10 農鳥岳頂上

12:20 池 14:10 テント帰着

昨日トレースをつけておいたのでピッチを上げて池の沢を登った。樅の倒木を越えたりくぐったり、樹林をトラバースしたりで、極力凍結した沢芯を通らぬようにした。積雪は膝ぐらいで乾燥している。1時間程度で昨日のトレース終点に到達した。あたりは真っ暗な沢に直径50~70cmの巨木が鬱蒼と茂っている。倒木がぎっしり詰まって狭くなったところを抜けるとパッと開けてすり鉢の底のようになった池に出た。ようやく広河内岳の稜線が少し見えてくる。空は濃紺色に見えてもうすぐ夜明けであることを告げている。池を過ぎたあたりから沢はゆっくりと左手に曲がっていく。

農鳥岳頂上から間ノ岳、北岳

池から上部は倒木がなく、大きな岩もなくピッチが上がる。すぐに樺やハイマツが出てきて右手にコルが見えてきた。沢は開けて左上方に広河内岳を見ながらガラ場を抜けて右手から巻き気味に稜線に出た。あたりは雪がほとんどなくて夏道も出ていて歩き良い。右手に富士山、後方に塩見岳、赤石岳、前方に農鳥岳、間ノ岳、北岳、甲斐駒ヶ岳さらに北アルプスも見える。雪が極端に少ない。

稜線の東斜面で風の当たらない場所に入って行動食を食べ、アイゼン、ヤッケを着けて農鳥岳をめざ

す。風はさほど強くない。気温は-10℃で寒さもほどほど。広河内岳の頂上からはアイゼンをガチャつかせて岩の上を進む。コルあたりの風だまりで一服し、東斜面をトラバース。頂上手前のコルに出たら左を巻きながら農鳥岳の頂上に出た。山頂はそよ風で気分が良い。写真を数枚撮った。西の方から押し寄せてくる黒い高層雲を気にしながら急いで下山にかかった。



農鳥岳頂上にて



農鳥岳頂上から間ノ岳、北岳

広河内岳から池の沢に下り、池に着いてほっとする。香川さんはココアを持参しラジウスと鍋で沸かしてくれた。飲むと皆元気が出て BC まで一走りでも帰幕した。

積雪期の 3000m、強風と寒気の稜線。富士山、赤石岳、塩見岳、北岳、甲斐駒ヶ岳そして北アルプスの山々がはっきりと見える。東の方は雲海にすっぽりと包まれている。農鳥岳の頂上は南北に延びた細長い稜線のガラガラの露岩の一部にあった。最後の登りでトップを許され、山頂に立った喜びは忘れられない。

BC に帰りついて夕食前のラーメンを作り終えて、さあ食べようとしたとき、テントの外で人の声があった。入り口を開けるとそこに美浦さんがいた。赤石パーティが到着したのだ。皆の顔は真っ黒で相当疲れた様子だ。山の中で仲間に出会うことがこんなに嬉しいとは知らなかった。美浦さんは左のほほにキスマークのような凍傷を作っていた。南から北への縦走に雪の女神がご褒美をくれたのだ。

今日は大みそか。狭いながらも快適なテントの中では紅白歌合戦の音楽が流れている。アタックを終えて充実感に浸りながらゆったりとして曲を楽しんでいる。

1967年1月1日（日）元旦 雪

今日、天気が崩れることは前日の天気図で分かっていたので休養日となった。1967年の正月だ。こんな山の中で迎える正月は特別にうれしいものだ。師走は山の準備でてんでこ舞だったので正月の意識は全くなかった。昨日のアタックは天空の白い楽園散歩。今日は降り続く雪と雪をかぶったモミの木の林。素晴らしいお年玉だ。が、待てよ。僕らには塩見岳に登って無事に下山しなければならない大仕事が残っている。本当の正月はそれからだ。



池の沢 BC

1月2日（月）雪

朝、ほんの少し雲が薄くなったので岳沢の偵察に出かけた。谷筋はクラストしてアイゼンが効くと思うも間もなく、ゴジラ落としとなった。全く進まない。そこを抜けると今度は腰まで潜るラッセルだ。二俣を過ぎると風が荒れだした。樹木に積もった雪を掻き落として 10m 先も見えない雪煙に襲われた。ワンピッチ詰めただけで引き返した。BC に帰り着いたころ激しい吹雪となった。

1月3日（火）雪

天気図はすごい冬型。本当にすごい。元日からずっとこの悪天だ。塩見岳のアタックを目前にして天気待ちするのも長すぎる。時折薄くなる雪空のベールをかすかに差し込む太陽にテントが明るくなれば心浮きたち外に出てみたりする。が、一向に回復する気配はない。

朝、実は下界では真夜中なのだが、1時にシュラフのジッパーを下す。さらさらと音を立ててテントを叩く雪に失望しながらもアタックの準備を急ぐ。3時、気温-16℃。完全装備に身を固めてテン

トの外に出てワッパをつけ始める。しかし、雪は一向に止みそうなく、風を伴って益々強く降りだす。あたりはもちろん真っ暗。ラテルネの光束の中を無数の白い線が斜降する。音もなく冷たくそして寂しい。アタック中止。今日はまたも沈殿。それぞれ思いのままに過ごすことになった。

河本さんと香川さんは岳沢の偵察に出かける。上部二俣の手前までラッセルでトレースをつけて戻って来た。僕と中村さんはテント場の対岸にある45度程度の傾斜のある雪壁(ほんとに小さな斜面)でアイゼンワーク。カッティングしている中村さんが滑った。下まで瞬間で滑落した。そのスピードにびっくり。ストップは一度だけ試したが、夏山でのトレーニングの成果か、うまく止まった。めでたし、めでたし。

春山の計画などを話すために赤石パーティが滞在している小屋に行った。

午後、吹雪を突いて農鳥小屋から坂東さんたち北岳パーティがBCに下山してきた。中園さんは右の頬に凍傷を作っていた。ガスに視界を失って白根沢を下って来た。

合宿の残りの計画は我々塩見岳のアタックを残すのみとなった。皆に見守られながら登るのだ。

1月4日(水) 雪後霧、後曇り

1:00 起床 3:00 出発 10:45 塩見岳頂上 12:50 帰幕

寒い。昨夜はアタックのことを考えて寝つきが悪かった。と言いながら7時間は寝ただろう。朝食は至って簡単。湯さえ沸けばそれにラーメンを放り込むだけ。30分もあれば出来上がる。ゆっくり食べてお茶を飲むとさあ出発だ。真っ暗な池の沢出合は風もなくラテルネのあかりの中を粉雪が舞っている。温度計は -16°C を指している。この分だと稜線は -20°C 以下であろう。小屋にコールを掛けたが返事がない。皆さん眠っているのだろう。



悪沢岳と塩見岳 農鳥岳方面から

岳沢の入り口は縦の木に覆われ、袴のように山鼻が重なっていてわかりにくい。前日に付けたトレースの雪は凍てついた上に新雪が10cmほど積もっていて歩きやすい。事前のラッセルが役に立っている。200m程進むと沢は左手に曲がり傾斜が増してどんどん高度を稼いでいく。最初の二俣あたりはデブリがたくさん出ていてその上は雪が締まっていて歩きやすい。このあたりからラッセルは深くなったが、河本さんたちのつけたトレースが暗闇の中でもはっきりしていて歩きやすい。二番目の二俣、滝の上に出たとたんに風が強くなった。風成雪が沢にできていて潜ったり潜らなかったりして困った。時々雪を踏み抜いて首まで潜り足が中で中ぶらりになることがあった。僕だけ3回も危うく流れに浸かるところだった。このあたりから沢の傾斜はぐんと緩くなり谷が開けてきた。いよいよドン突きだと思っている頃、風がさらに強くまた、夜も明けそうにない。そこで雪を踏み固めてツェルトを被って時間待ちだ。ガスは相変わらず濃いガスが雪は止んでいる。持ってきたラジウスで暖を摂った。濡れた手袋まで乾かすことができた。ラジウスは実にありがたかった。

6時半、少し明るくなってきた。ツェルトの中で完全装備に身を固めて荒れ狂う沢の上部に出発だ。風は一步進むごとに強くなるようだった。稜線に近づく雪は締まってやがてピッケルがクーキュルと歌いだす。風の音と合奏だ。ピッケルでできた穴は青く澄んでいる。

濃いガスのために北荒川岳へ向かう稜線のコルから下る沢を見落としてしまい、どんどん左に追いやられ、北沢岳の急斜面を登ることになった。雪は落ち着いているが雪崩が起きそうな気配に緊張する。沢を登るのをやめて右手の岩稜に取付いたが意外に悪い。急斜面に大きなステップを切ってアイゼンに履き替えた。かなり方向が狂ったことに気づいていたので沢の曲がり角まで引き返して小さな尾根をトラバースして最低コルに出ようとしたが、濃いガスと深いラッセルに阻まれた。もう一度地図をよく見たうえで右へトラバースするのは時間を取られると判断して雪の良く締まっている小さな尾根上で傾斜40度の雪壁を200m登って稜線に出た。稜線に出てほっとした。まつげが凍り付く湿った風も何のことはない。舐めてまつげを溶かしてもらったりする。豆粒ぐらいになったまつげの氷は視界を妨げる。あまりにもうるさいので引張り抜いたらまつげが10本ほど着いて取れた。その時なぜかそれがとても悲しく思えた。視界はとてもよくなったが。

塩見岳へは手前のピークから稜線の雪稜がよく発達してナイフリッジとなって続いていた。塩見バツ

トレス側はスッパリ切れ落ちていてガスが不気味に湧き上がってくる。時々コブシ大の雪片を吹き上げてくる。一步一步を確実にかつ安定したスピードで頂上を目指した。

頂上だ。中村さん、香川さん、河本さん、そして僕の4人は狭い稜線で肩を組んで山頂に立った。うれしかった。風が少し収まり、太陽がほのかに顔を見せた。周りは何も見えず霧のベールの中から風が飛び出してくる感じだ。何をやる間もなく頂上を後にした。早くもトレスが消え始めている。ナイフリッジを通過して中尾根と主稜線のジャンクションに戻ってほっとした。今度は間違えずに北荒川岳への稜線を下っていく。この時すごい突風が吹きだした。じっとしていても岳沢に吹き飛ばされそう。風の間合いを狙って岳沢に入り、風を背に受けて広い斜面を走りながら下った。登りに間違えたのは無理もない。沢とは名ばかりで広々とした斜面だ。出合いには樺の木まで生えている。

二俣の下でアイゼンに加えてワカンを装着。風も収まっているのでここで昼食を摂った。谷の底からコールが聞こえてきた。食事も早々に急いで下る。徳田さん、中園さん、鶴谷さん、坂西さん、そして金井さんたちの顔が現れた。熱い紅茶をいただいた。腹の底にジーンと染み渡った。

BCに帰るとアタックが成功したのでテントを撤収して皆が泊っている小屋に移動した。夕食は全員が一緒に食べた。楽しいひと時だった。

1月5日（木） 二軒小屋まで下山 快晴後晴れ

7:00 出発。全員12名での行列行進は下山ペース。大井川の歩道は何度か吊橋で対岸に渡らなければならぬ。中には踏板が腐って落下している橋も多く、スリル満点の通過もあった。12:00 二軒小屋到着。

1月6日（金） 伝付峠を越えて七倉に下山 晴れ

7:20 二軒小屋出発。9:45 伝付峠。12:00 新倉。帰心矢のごとし。皆元気に峠を越えて七倉に下りて行った。二軒小屋から保利沢までアイゼン着用。

参考：縦走隊の概要

北部縦走隊

1966年12月27日 戸台発-北沢長征小屋 12月28日 野呂川経由、両俣小屋

12月29日 左股滝出合 12月30日 北岳登頂--北岳稜線小屋 12月31日 雪 沈殿

1967年1月1日 雪 沈殿 1月2日 間ノ岳-農鳥小屋 1月3日 農鳥岳-白根沢-池の沢着

中部縦走隊

1966年12月24日 畑薙ダム出発-樺島 12月25日 赤石小屋 12月26日 富士見平--ラクダの背コル--第一ピークのコル 12月27日 曇り視界なく沈殿 12月28日 小赤石岳-荒川小屋

12月29日 荒川前岳--高山裏 12月30日 大日影岳-三伏小屋 12月31日 塩見岳-岳沢-池の沢小屋到着

どうせ登るつもりなら百名山はお早目に

山形 裕士

昭和47年(1972年)、大学3年の槍ヶ岳千丈沢での夏山合宿において、私は北鎌尾根 P2・C 稜で先行パーティーによる落石を頭部に受け重傷を負いました。故平井一正先生、ACKU の多くの先輩方と現役部員達からなる救助隊による困難を極めた3日間に渡る救助活動の末、D ルンゼを千丈沢まで降ろしていただき、ヘリコプターで救助され大町病院に収容されました。診断は全治2ヶ月の開放性頭蓋骨折でした。お陰様で、最近物忘れが多いことを除いて事故の後遺症もなく今まで元気に過ごしてきました。半世紀前のことではありますが、改めて私の遭難事故に際し、故人を含む多くの方々にご支援を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

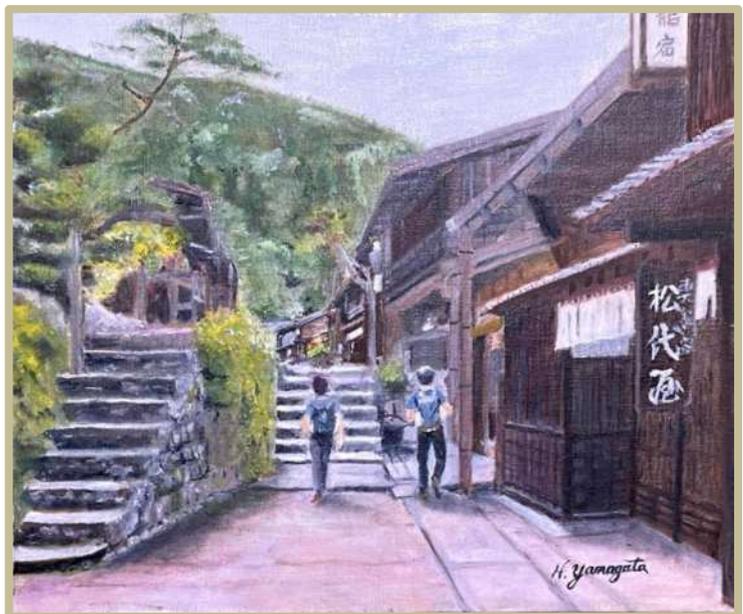
さて本題ですが、その時見舞いに来てくれた友人から一冊の本を頂戴しました。新潮社刊、深田久弥の「日本百名山」初版本です。以来、この本はずっと自宅書斎の本棚にあり、やや堅く格調高い深田の文体と相俟って必読ガイドブックになっていました。私は特に百名山全山完登を目標にしているわけではありませんが、若い頃は「今のうちにハードな登山をしておいて、楽な山は老いてからの楽しみに残しておこう」という程度にぼんやり考え、無意識の内に「歳を重ねたらその内いつかは完登することになるのだろう」と思っていました。

ところが、ゆっくり登山する時間もなく65歳で神戸大学を定年退職し、さらに5年間私学に勤務して忙しく過ごし、その後もあつという間に時が過ぎて、今年から後期高齢者となります。本稿のタイトル、「どうせ登るつもりなら百名山はお早目に」は、昨年(2024年)老夫婦が百名山の8座を登ってしんどい思いをした経験から導き出した、若い人へのアドバイスのつもりです。

1. 新緑の恵那山

5月18日。神戸の自宅を車で出発し豊橋に寄って孫と遊んだ後、夜、中津川に向かいホテル泊。翌19日早朝、まだ暗いうちにホテルを出発。恵那山トンネルを抜けた阿智村の園原昼神インターを出て、6時に恵那山麓の広河原登山口駐車場に着きました。あたりは目映いばかりの新緑に包まれていました。朝食後6時半に歩き出し7時広河原登山道入口。簡易の木橋が架かる本谷川を渡りました。そこからは太い根っ子が伸びて階段状になったきつい尾根道をひたすら上り、8時半に4合目、9時半7合目着。その頃から小雨が降り出し雨具を着用。日頃の行いが悪いせいか、雨中の登山は慣れっこです。尾根の上部は歩きやすい道でした。富士山は望めませんでしたが南アルプスが霞んで見えました。10時45分に恵那山頂上の標識のある地点に到着。真の最高点を探して山頂付近を行き来し、「恵那山最高点 2,191m」と書かれた紙製の標識が木の枝に括り付けられているのを見つけました。昼食後12時過ぎに頂上をあとにし、雨で濡れた道を滑らないようにゆっくり下って15時半登山口着。その頃には雨も上がり16時に駐車場着。一昨年岳友会(山岳部同期会)で行った藪原スキー場から眺めた恵那山は随分大きかった印象ですが、いざ山中に入ってみると登山中は山頂が見えず、頂上からの展望も効かず山の大きさを実感することなく往復しました。下山後、ホテル「富貴の森」に宿泊。欧米のプチホテルのような雰囲気の良いホテルでした。

翌20日、福沢桃介が水力発電所開発のために木曾川に架けた全長247mの木製吊り橋、国指定重要文化財の桃介橋を歩いて渡りました。その後、長野県木曾郡南木曾(なぎそ)町の妻籠宿を散策しました。中山道69次のうち江戸から数えて42番目の妻籠宿は、中山道と伊那街道が交叉する交通の要衝として古くから賑わっていました。岳友会で訪れた奈良井宿ともよく似ていますが、インバウンドが多いことに驚きました。ただ、英語表記の案内板や説明等はほとんどなく、彼らが日本の古き良き宿場街をどれだけ理解しているのか気になりました。その後、島崎藤村ゆかりの馬籠宿にも立ち寄り神戸に帰りました。



「妻籠宿」 油彩 F8号

2. 奥秩父、^{みずがきやま}瑞牆山

6月26日。梅雨の合間を見つけ朝9時に車で神戸を出発。中央道の長坂ICで高速を下り山梨県北杜市のみずがき湖に15時半到着。湖畔を散歩中に家内が転倒し膝から出血。幸先悪し。この日は近くの温泉旅館、津金楼に宿泊。27日(晴)。5時半に車で出発。瑞牆山荘前の県営無料駐車場(標高1,529m)に駐車。6時に登山開始後すぐにシカと出会いました。7時に平成の名水百選に認定されている湧き水の出る富士見平小屋着。やがて雲の中から姿を見せた瑞牆山は花崗岩の山で兵庫県の雪彦山を大きくしたような感じでした。いくつもある岩山のどれが頂上なのかわかりませんでした。登山道にはシャクナゲが咲いていました。7時40分、天鳥川を渡ったところで、真二つに割れている高さ10m程の丸い巨岩「桃太郎岩」に着きました。割れた岩が左右に開いて転がらないようにと枯れ木の突っ支い棒が沢山立てかけられていて思わず笑ってしまいました。

しばらく登ると神仏を想像させる奇怪な岩峰、「大ヤスリ岩」が行く手を阻むように立ちはだかります。このあたりから大きな岩がゴロゴロしており、両手両足を使って登るので結構ハードです。いくつかの梯子や鎖場を登る間に、私は腕時計を岩に擦って傷を付けてしまいました。9時半に瑞牆山頂上(2,230m)到着。展望は良好で、登るときには威圧感があつた大ヤスリ岩を見下ろし気分爽快です。遠くには翌日登る予定の金峰山が識別できましたが富士山は雲の中でした。

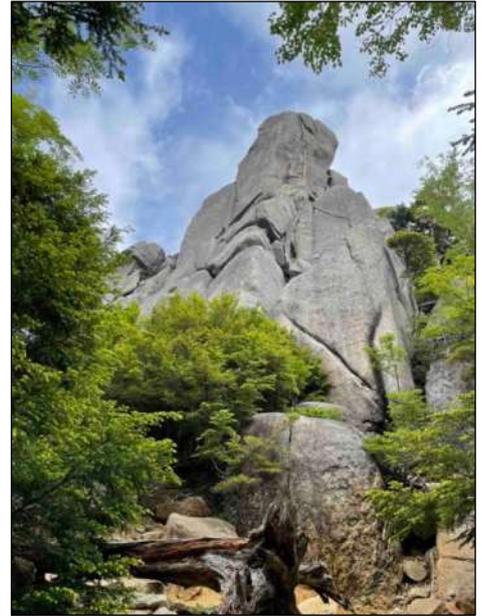
下山後、信州峠付近から眺めた瑞牆山は大ヤスリ岩が突き出ている、やはり奇怪な山でした。この峠を越えた長野県川上村では見渡す限りのレタス畑が広がっていました。この日は岩根山荘泊。

翌日28日(雨)。金峰山登山のため長野県側から車で大弛(おおだるみ)峠に登ろうとしましたが、岩根山荘で聞いた通り車底を石が擦りそうな悪路で、雨も強くなってきたため断念し途中で引き返しました。信州峠を再び越えてこの日は美術館巡りとし、山梨県立美術館のミレー展、南アルプス市立美術館の白簾史朗写真展を見学しました。白簾史朗は南アルプスや富士山を沢山撮影しています。さらに思い立って南アルプス懐の奈良田まで足を延ばし、白簾史朗記念館を訪れました。日本と世界の山の写真が展示されていました。ゴーキョピークからのエベレスト、スイスのマッターホルン、ドロミテのTre Cime、カナダのMt. Rundleなど我々夫婦も眺めた懐かしい山々の素晴らしい写真をじっくり鑑賞しました。白簾史朗愛用の大小ホエブス、ピッケル、アイゼン、ハーケン、ザイル等、私も昔使ったことのあるものが多く展示されていました。

3. ^{きんぶさん}金峰山

お盆休みの前に山梨県の山に登りに行きました。最初に、6月に断念した金峰山にリベンジ登山しました。8月4日、中央自動車道・勝沼ICを出てフルーツラインを北上するとブドウ畑が広がっていました。ブドウの他にもモモ・サクランボなどが季節毎に栽培されています。道路沿いのあちこちで即売されていて勝沼市民が羨ましくなりました。その日は金峰山荘泊。

5日(晴)夜明け頃に車で宿を出て金峰山登山口の大弛峠まで入りました。峠の標高は2,360mで日本最高所の車道峠です。お陰で金峰山の登山は随分楽です。5時50分に峠を出発。6時半、朝日峠。7時朝日岳(2,579m)、6月に登った瑞牆山を少し下に望みました。逆光で霞む富士山も見ることができました。8時40分、金峰山(2,599m)頂上。近くの五丈岩は金櫻神社本宮の御神体で岩登りは禁止されています。1時間半ほど頂上で景色を楽しんで12時50分には大弛峠に戻りました。帰途、大きなサルオガセを見つけました。この日は信州峠を越え、長野県川上村の白木屋旅館泊。



大ヤスリ岩



瑞牆山頂上

4. 甲武信ヶ岳

8月6日(曇後雨)。朝7時、登山口の毛木平から、千曲川源流の整備された沢伝いに甲武信ヶ岳を目指しました。沢沿いはやはり多少涼しく感じられました。9時15分小さなナメ滝のところで休憩。この沢はイワナが釣れるようです。11時15分、千曲川(下流は信濃川)水源地に到着。伏流水が湧き出ているそこから上には水はありませんでした。12時に尾根に出て12時半に甲武信ヶ岳の頂上(2,475m)着。ガスで何も見えず、弁当を食べ頂上から南に少し下った甲武信小屋に13時40分着。到着後すぐに土砂降りとなりました。宿泊客は我々夫婦以外に2人だけでした。翌日の天気が心配でした。

7日(晴後曇後雨)。翌朝、小屋から御来光を望みました。心配した天気もまずまずで一安心。小屋から甲武信ヶ岳に登り直しました。頂上に6時半着。早朝の清々しい空気が気持ち良かったです。甲武信ヶ岳は甲州(甲斐国、山梨県)、武州(武蔵国、埼玉県など)、信州(信濃国、長野県)の境にあるので名付けられたとのこと。千曲川(信濃川)、荒川、笛吹川(富士川)の水源の地でもあり、奥秩父の中央に位置しています。山頂から日本百名山の43座が見られるとのことですが、よほどの気象条件でないと難しいでしょう。前々日に登った金峰山も遠くに見えました。五丈岩が粒のように見えるので金峰山は判別しやすい山です。山頂には早くも赤トンボが飛んでいました。

毛木平への帰りは、登ってきた千曲川源流を下らずに^{さんぼうざん}三宝山(2,483m)を経る尾根道を辿りました。甲武信ヶ岳から平易な道を約1時間で到着した三宝山は甲武信ヶ岳より少し高い埼玉県の最高峰です。三宝山から下の尾根は岩稜が多く、鎖を挿んで下りる岩場も何カ所もあり、しんどいながらも面白かったです。9時40分に武信白岩山、10時45分に大山の岩稜を越えて、12時にやっと十文字小屋に到着しほっとしました。

15時に毛木平駐車場に下山した途端に激しいスコールに見舞われました。甲武信ヶ岳の周回コースを辿る道はガスや雨の合間にしっかりと展望も得られ、岩稜の登降も味わえたバラエティーに富んだ充実した登山でした。イワギキョウ、各種キノコ、サルオガセなど高山植物も見ることができました。

下山後、瑞牆山登山の時にも通った、長野県南佐久郡川上村のレタス畑の横を走りました。この辺りは千曲川と高原盆地の冷涼な気候でレタス生産量日本一とのこと。東南アジアからの留学生が農作業に従事していました。レタス作りは私が生まれた1950年頃から始まったそうです。余談ですが、ここは日航機123便の墜落地点である御巢鷹の尾根のすぐ南になります。この日は清里のペンション泊。

翌8日は休養日とし、野辺山にある国立天文台の宇宙電波観測所を見学しました。大きな電波望遠鏡を見て回る途中に、これまでの観測成果や宇宙科学の解説がいくつも掲示されており興味深かったです。この観測所の最大の成果は、M106銀河の中心に秒速1,000kmで高速回転するガスの円盤があることを観測で捉えたことです。このことはブラックホールの存在を意味しており、この発見は世界で初めて実験的にブラックホールを確認した証拠となりました。それも太陽の3900万倍の質量をもつ超大質量ブラックホールなのだから。感心するばかりです。また、7つの異なる周波数で太陽電波を受信し、電波の強度と偏波(電波の振動の方向)を観測する太陽電波強度偏波計により、太陽活動と黒点の数が11年周期で変動していることが確認されていますが、何故11年周期なのか、不思議です。

この日は野辺山から再び山梨県に入り、勝沼からフルーツラインを経て大菩薩嶺登山口の上日川峠にあるロッジ長兵衛泊。宿泊者は我々だけで、旬の本場のモモが食べ放題というおまけ付きでした。

5. 大菩薩嶺

8月9日(晴)。山梨県と長野県の間を行ったり来たりした今回の旅行ですが、最終日は再び山梨県側から大菩薩嶺を目指しました。7時、ロッジ長兵衛(1,600m)を出発し40分ほど歩いて福ちゃん荘に到着。登山とは無関係ですが、1969年11月に武装訓練のためにここ福ちゃん荘に潜伏していた赤軍派の53名が逮捕された所謂「大菩薩峠事件」の舞台です。ここから唐松尾根ルートに登りました。雷岩を経て大菩薩嶺(2,057m)頂上に9時20分着。まったく展望がきかない残念な頂上でした。これまで登った百名山の中で、「何でこの山が百名山なの」と思った山の一つとなりました。深田久弥がこの山を百名山の一つに選んだのには中里介山の長編時代小説「大菩薩峠」の影響が少なからずあるようです。



大山付近の岩稜地帯を下る

頂上で人懐っこいシカと出会いました。この辺りはシカが多いことで有名なようです。まわりの木々の樹皮はシカによると思われる深刻な被害を被っていました。雷岩に戻り勝沼方面の下界を眺めながら大休止。上日川ダムのある大菩薩湖を右側に見下ろし、避難小屋のある賽ノ河原や親不知ノ頭と名付けられた view point を通過し、大菩薩峠 (1,897 m) までの緩い下り道では様々な高山植物を見ることができました。峠には中里介山の名前にちなんだ介山荘がありました。残念ながらガスで視界がもう一つでした。峠からオフロードバイクで上り下りできそうな程の広い道を下り、福ちゃん荘を経てロッジ長兵衛のある登山口の上日川峠に 11 時 40 分到着。実際、私の高校時代の友人は大菩薩峠までサイクリングで登ったことがあるとのことでした。関西人の私は関東遠征の気分で来た山ですが、東京からは気軽に登れる初心者向きの百名山となっているようです。下山後、「大菩薩の湯」で汗を流し、神戸までドライブして帰りました。



大菩薩峠

6. 谷川岳

10 月上旬に群馬、新潟の谷川岳、巻機山、苗場山に三日連続で登りました。紅葉シーズンの前で天気にも恵まれず修行のような登山でした。

10 月 3 日 (曇後雨)。前日宿泊した群馬県利根郡みなかみ町の水上温泉から谷川岳に登りました。ロープウェイで 1,319 m の天神平まで上られるのでありがたいです。ロープウェイが雲の中に入った時から今日一日、眺望は諦めねばなりません。天神平の「安全登山の鐘」を鳴らして 8 時 30 分に登山開始。ガスに煙る天神尾根の緩やかな登り道はそれなりにいい雰囲気でした。紅葉には少し早かったですが、所々ナナカマドが色づいていました。9 時、熊穴沢避難小屋を経て「天狗の泊まり場」10 時 10 分着。積雪期によく滑落事故が起きるところです。ガスで何も見えないので、魔の山、谷川岳の怖さはまったく感じられません。霧雨の中、11 時 10 分に谷川岳肩の小屋 (1,910 m) に到着。一休みして甘酒をいただきました。ここから頂上まではすぐです。雨具を再度着用して小屋を飛び出しましたが視界はまったく利きません。風雨が強いので不安になったのか頂上を諦めて帰ってくる若い人もいました。トマの耳を経て、12 時に谷川岳頂上のオキの耳 (1,977 m) 到着。若い頃、一ノ倉沢を見るために向かいの白毛門に一人で登ったことがあります。谷川岳は初登頂です。雨の中、何も見えないので早々に下山し、15 時にロープウェイ乗り場に戻りました。平日では数えるほどでしたが、紅葉シーズンの土日は凄惨な行列になるようです。改めて地図を見ると一ノ倉沢やマチガ沢上部の過密な等高線に目を奪われます。ちょっと下から壁を覗いて見たかっただけですが時間がなく残念でした。下山後、1 時間ドライブして新潟県南魚沼市の民宿に向かいました。



谷川岳オキの耳 頂上

7. 巻機山

翌 10 月 4 日 (曇後雨)。この日も天気予報は午後から雨とのことでしたが、覚悟を決めて出発。井戸尾根から巻機山 (1,962 m) に登りました。桜坂駐車場には一番乗りでしたが、登り出してからペットボトルのお茶を車に忘れていたのを思い出して U ターン。結局 6 時 20 分に登山口発。急坂を 2 時間半登って六合目に到着。左に見上げる形の良いピークが巻機山かと思いきや地図で見ると割引岳 (1,931 m) でした。割引岳に突き上げるヌクビ沢には滝も見えました。左の特徴的な岩峰は天狗岩。それにしても紅葉はまだまだで山は緑一色でした。

さらに急斜面を 2 時間ほど登り、10 時 50 分、ようやく到着したピークは山頂ではなく九合目の前巻機山 (ニセ巻機山) でした。しかし、前巻機山に登って初めて展望が開け、奥に鎮座している巻機山と対面することができました。巻機山を覆う草紅葉 (どちらかという草黄葉) が見事でした。前巻機山から一度下り、割引岳を左に見ながら鞍部にある立派な巻機山避難小屋に 11 時 30 分着。このあたりは雄大な景色で気分爽快です。

避難小屋から池塘も点在する最後の登りをゆっくり登り 12 時に巻機山頂の標柱がある頂上着。前日登った谷川岳の稜線に雲がかかっていた。西方の妙高山、火打山も確認が困難でした。強風を避けて熊笹の陰に陣取り、宿で作っていただいた大きなおにぎりを頬張りました。牛ヶ岳の北面は紅葉が綺麗でした。真の最高点はここよりも少し東にあるのですが、風が強く時間もないので前巻機山に戻りました。その後、雨が降り出し、粘土質の泥んこの急坂を滑ったり転んだり悪戦苦闘しながら 17 時に桜坂駐車場に下山しました。雨中の下山は転倒せずに歩くのに必死で写真を撮っている余裕もありませんでした。前巻機山より上は桃源郷ですが、下はひたすら下るだけでした。往復 10 時間以上かかり、かなり疲れましたが、下山後さらに車で 40 分の宿泊地まで移動しました。



巻機山（右）と割引岳（左のピーク）

8. 苗場山

翌 10 月 5 日（曇後雨）。前日の雨の巻機山登山で疲れ、この日も午後は雨との天気予報でしたが、取り敢えず行けるところまで行こうと決め、山上湿原が有名な苗場山へ祓川コースから登りました。

かぐら第 1 高速リフトの終点から 6 時 40 分に出発。しばらく歩きづらい露岩がゴロゴロしている沢の道を進むと「下の芝」に到着しました。予想に反し、天気はまずまずで雲海の遠景も美しく、谷川岳や巻機山より紅葉も色鮮やかでした。笹とシラビソの道を抜けた「上の芝」の辺りも木道で歩きやすく、気持ちの良いところでした。小松原分岐を過ぎ、八合目の神楽ヶ峰

(2,030 m) に 9 時到着。苗場山は 2,145 m なので、高度的にはほぼ登ったようなもの、あとは楽勝かと思えばしばらく水平道を行くと突然遠くに大きな山が現れました。何と雲の向こうのあの山が苗場山。まったく別の山のように見えました。ここまでの登山は何だったのか。これは時間がかかるはず。気を取り直し、まずは一度下ります。急下降したところの雷清水で水を補給し、お花畑を過ぎて、岩場もある急坂を 1 時間ほど登ると突然大きな原っぱに飛び出しました。きつい登りが打って変わって高原散策となり驚かされましたが、ここまでしんどい道を登ってきたご褒美のようでした。

苗場山山頂 (2,145 m) に 12 時着。頂上付近が平坦な草原状になっているのは前日登った巻機山と似ていました。広い湿原を眺めながらランチタイム。至福の一時ですが、この日も午後から雨の予想なので、高原散策を早々に切り上げて、下山にかかりました。結局、ガスが完全に晴れることはなく、13 時 45 分に神楽ヶ峰付近まで戻りましたが、雨が降り出し雨具着用。前日の巻機山の下りと同様、この後、降雨で小さな沢となったゴロゴロ、ドロドロの岩伝いの滑りやすい悪路を、バランスをとりながら降りていくのに神経をすり減ら



突然現れた苗場山は別の山のように遠かった

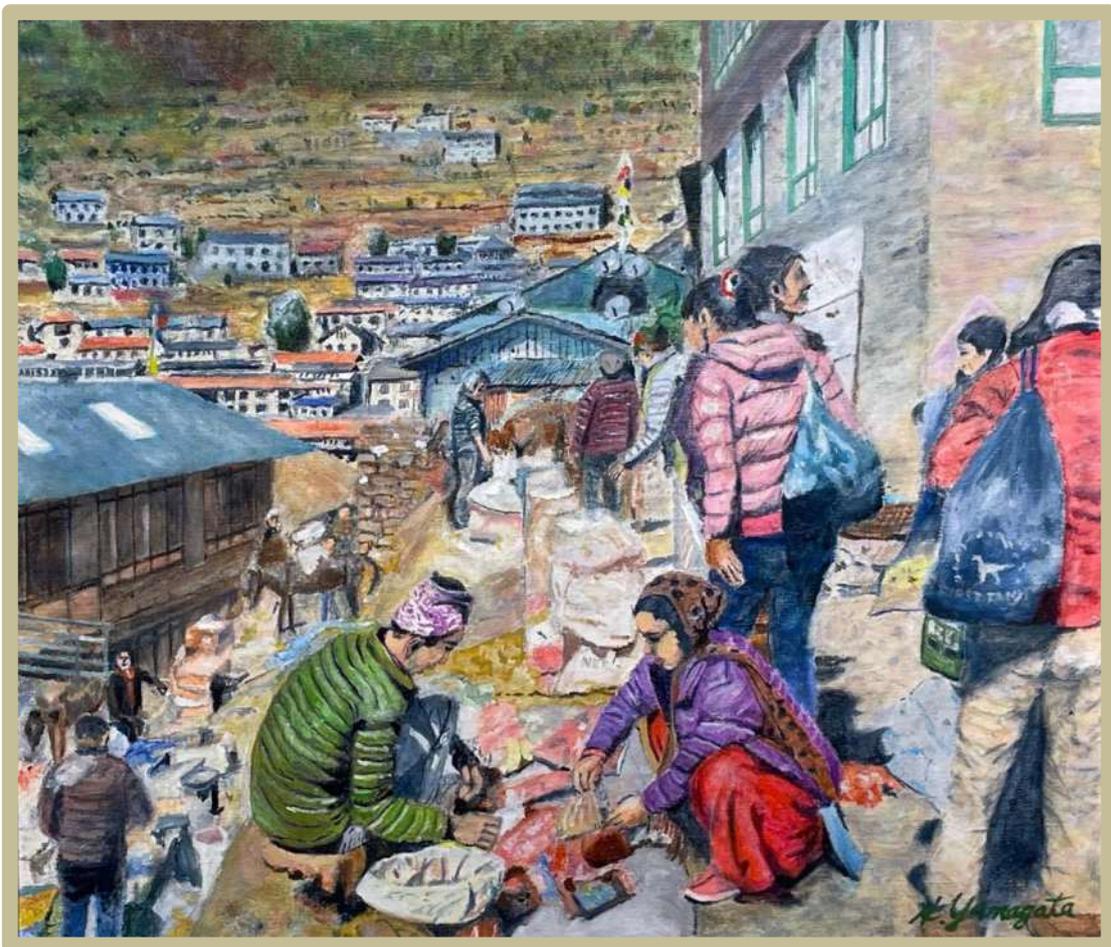


頂上湿原

しました。16時50分に和田小屋に生還。結局この日も10時間以上の行程となりました。ここから、かぐらスキー場の駐車場まで歩き、三日間の修行山行を終えました。それでも何とか三日連続のしんどい登山ができたご褒美として、最終日は苗場プリンスホテルに宿泊し、しっかり疲れを癒やしました。

以上のように昨年、夫婦で百名山の8座に登りましたが、まだ私が登った百名山は80座ほどです。残っている山の多くは北関東、上信越などに集中しており、神戸から車で遠く不便です。日本百名山が比較的関西人に不人気だとすればそのあたりが原因なのでしょう。ただ、これまで登った百名山のほとんどは確かに良い山でしたし、登った山が90座を越えると本気モードになるのかもしれませんが。

昨年登った山はいずれも標準コースタイムを越えており、特に我々の場合は膝が弱いので下山に予想外に時間を取られます。早朝に登山を開始しても夕方遅くに下山というパターンが多く、大きな山の日帰り登山がしんどくなってきました。そういうわけで、「どうせ登るつもりなら百名山はお早めに」。できれば後期高齢者となる75歳までに完登するという目標を立てられることをお勧めする次第です。



「ナムチェのバザール」油彩画 F10 号

ネパールの首都カトマンズから国内便でルクラに飛び、そこからゆっくり二日間のハイキングでエベレスト街道の拠点ナムチェ（標高 3,440 m）に到着しました。ここで高度順化のために連泊し、その後ゴキョピーク（5,360 m）を目指しました。ナムチェはチベットから来たシェルパの里として知られています。摺鉢状の斜面に広がる集落には多くの民家やロッジ、レストランが軒を連ね、シーズン中は世界中からトレッカーが訪れ賑わいます。昔はインドからのコメや工業製品など、チベットからの岩塩、ヤクの乳製品などを交換する交易の場でしたが、今でも毎週土曜日にバザールが開かれています。ツレ（右端）はバザールで蜂蜜を購入しました。

新穂高から鷲羽岳（2024年7月～8月）

谷本 清

初めて投稿させていただきます、経済学部昭和54年卒業の谷本です。
60歳で会社員生活を早々にリタイアさせてもらい山登りを再開しました。
すぐに泊りの山行も再開し最初は小屋泊にトライしましたが、決まった時間の食事や他の登山者の方と一緒に行動が苦手ですぐにソロのテント泊に移りました。（せっかく決まった時間に決まったことをしないといけない会社員生活が終わったのですから）
前段はこれくらいにして本題へ。

2024年のメインにしたのは新穂高からの黒部の奥座敷でした。
実はこのルートは一度前年の秋にトライして天候不良（予報が変わった）で退却したルートでした。
なので、2024年のメインにして梅雨明けの時期にリトライを期していました。

1. 参加者：谷本 清

2. 行程

7/29（月）新穂高登山者駐車場 14:10→わさび平 15:40

名古屋を車で出発し途中で晩ご飯と翌日の朝ごはん、昼ご飯まで調達し新穂高に到着。自宅を出てから気軽に槍・穂高方面へ行ける点は名古屋の地の利をつくづく感じる。
新穂高の登山者用駐車場は激混みとよくSNSに投稿されているが、小生の場合はいつも平日スタートが功を奏しているのか結構近い場所に停められ感謝。
駐車場で準備を整え新穂高登山指導センターで登山届を提出してわさび平へ向かう。

7/30（火）わさび平 6:50→鏡平山荘 13:10

夜中にふりだした雨が朝になってもやまず少し出発を躊躇するも、昼頃から回復に向かうという予報と今は梅雨明けで少々濡れても低体温症にはなるまい…と思いついで出発する。
鏡平山荘に到着する少し前ごろにはますます雨が強まり道の一部が小川状態に。山荘で人が話しているのを断片的に聞いたのだが、通ってきた小池新道の沢に渡してある簡易な橋が流されて、山荘の宿泊キャンセルや山荘からの下山をあきらめた人もいたらしい。
山荘の人に確認すると天気予報が（去年と同じく）変わって本日は終日雨、小生も弓折乗越から先の稜線は天気の良い日に歩きたいと思い、本日の目的地は双六であったが鏡平山荘泊りに変更。快く泊めていただいた山荘に感謝。
晩ご飯は山荘でお湯がいただけただけなので休憩スペースの一角でアルファ米を食べた

7/31（水）鏡平山荘 7:00→弓折乗越 8:25→三俣山荘 18:30

今日は予報通り雨が上がり山荘前で朝ご飯を食べて鏡平を出発。弓折乗越までひたすら上る。
弓折乗越から双六小屋までは多少の登り下りはあるがお花畑もところどころにでてきて歩きやすい。
双六から先は双六岳の頂上を通る稜線ルートに行くが結構な登り下りと長い距離でかなり疲弊した。
三俣山荘手前では道を間違えたかしらん…と思うくらいなかなか着かない。たまたま三俣山荘から道の見回りに来た山荘の人に会い安心した。双六と三俣間の遠さは帰り道でも痛感することになる。

8/1（木）三俣山荘 7:20→鷲羽岳 8:50→三俣山荘 10:30 | 11:45→双六小屋 16:30

テントから鷲羽岳を往復したあとテントを撤収して双六へ向かって出発。
当初は前日の三俣の到着後に黒部源流を往復しこの日の朝に鷲羽岳を往復する計画だったが、鏡平山荘泊りに変更したことで源流と鷲羽の両方は無理になり、今回は鷲羽岳を優先した。
この日は天気が素晴らしく良く鷲羽岳の頂上でのんびりした。鷲羽池、硫黄尾根、北鎌尾根が重なりその端に槍ヶ岳。本当に素晴らしい景色だった。
三俣から双六へは巻道軽油とした。巻道のワードでまあまあ平坦でアップダウンの少ない道かなと思っていたがこれが大間違い。足場の悪い箇所、鎖のある岩場などありしかも距離が長い。
尾根筋の道を歩くときに時折双六小屋が見えるのだが近づいている気がしない。ちょうど中間あたりで双六から来た人とすれ違ったが、交わした挨拶は「本当に長いですね」だった。ただ、三俣蓮華岳から三俣山荘方面に下りた巻道分岐で行きも帰りも雷鳥に会えたのにはほっこりした。

8 / 2 (金) 双六小屋 7:30→鏡平山荘 9:45 | 10:50→わさび平小屋 14:00 | 14:40→登山者駐車場 15:50
早いものでもう下山日。天気も良くのんびり下る。鏡平山荘まで来るとすでに暑い。名物のかき氷で少し涼んだ。

わさび平山荘ではこれも名物の冷やしたトマトとそうめんをいただく。

新穂高登山者指導センターは今朝まで居た所に比べるとめっちゃくちゃ暑く、この先名古屋に帰るのが嫌になった。

この日は穂高方面に来た時にいつも泊まる平湯温泉の宿に素泊まりで一泊し、足の疲れを少しだけ和らげて翌日名古屋に帰った。

3. 感想

今回は黒部源流には行けなかったが、後半は天気もよく全体としては満足のいく山行になった。

黒部源流域はスケールが大きく楽しいところと改めて感じた。次はまだ行けていない黒部五郎岳や一度行った雲ノ平などにもまた行きたいと思う。



鷲羽岳頂上にて



三俣山荘越しの鷲羽岳への登り



鷲羽岳山頂直下から鷲羽池、硫黄尾根と槍ヶ岳



2023年8月2日に剣岳に登頂

低山雑記

吉原敏明

近頃、低山登山がブームになっていると言う。中高年が手軽に出来る運動として人気になっている。私の会社時代の仲間も多くリタイア前後からゴルフをやめ、フルマラソンやトライアスロン、バイクツーリングなどを始めた。私もゴルフのようなストレスフルでいささか俗物的なスポーツから転向した。まあ、才能もなかったのだが。低山登山の魅力は身軽で気ままなことである。私は週1回単独で登っているが、計画もなく前日にここに登ろうと決めている。登山後は居酒屋に立ち寄るのが習慣となっており、近頃は居酒屋から行き先の山を決めるという不埒な山行もある。人が少ない平日登山のため、電車に乗ると仕事に向かう通勤客を横目で眺めることとなる。皆様がお仕事に向かう中、こちらは気楽な登山で申し訳ない・・・とは露ほどにも思わず気分よく向かう。まあこれも十分に働いたからこそだろうが。

以下、関西近郊の山を紹介したい。

【滋賀県】 武奈ヶ岳

京阪出町柳駅からバスに乗り坊村で下車し登山を開始する。登山口の地主神社に立ち寄る。このような地元の神社、仏閣に出会うことも楽しみの一つだ。

最初の2時間は山腹の急登をひたすら登るのだが、目の前の急斜面を見上げると心が折れそうになる。稜線に出ると笹の原を通り頂上に着く。頂上からは福井、京都の山並み、琵琶湖の眺めが気持ちいい。琵琶湖側に下り、イン谷口バス停よりバスに乗り JR 比良駅より帰る。

【京都府】 比叡山

叡山電鉄修学院駅から登る。鷲森神社を通りぬけ、雲母坂（きららざか）を登る。熊注意の標識がやたら多く不安になる。ケーブル比叡駅を通り頂上の大比叡（おおひえ）に着く。

頂上からは延暦寺側に降る。鐘の音が聞こえ厳粛な気持ちになる。延暦寺を通りぬけ JR 叡山坂本駅に降るのだが、途中、老舗「鶴喜そば」に立ち寄り疲れを癒す。

【大阪府】 飯盛山

大阪府の南部に位置する。南海電鉄孝子駅より登る。頂上は開けており大阪湾が一望出来る。関西国際空港を離発着する飛行機を眺めるのもいい。南海電鉄みさき公園駅に降る。

【奈良県】 柳生街道

近鉄奈良駅より JR 笠置駅まで歩く。トレランで有名なコースである。

里山の風景も良く、柳生の里の武家屋敷跡も通り心地よいトレッキングが出来る。

【和歌山県】 龍門山

大阪からの日帰りとなると限られる。JR 粉河駅からみかん畑の間を登り頂上に着く。

和歌山市、紀伊水道が一望出来る。

（番外）熊野古道

日帰りではないが熊野古道を挙げる。

大辺路（おおへち）、中辺路（なかへち）、小辺路（こへち）と歩いたが熊野古道らしさでは中辺路だろう。熊野大社まで歩くが途中宿に一泊する。コロナ禍に歩いた時は宿の客は私1人であった。宿の女将は、コロナ以前はほとんどが外国人であったと言い、不安気であった。今は、賑いは戻ったであろう。

【兵庫県】 六甲山

神大 OB としては六甲山を挙げたい。ただ、大学時代は最高峰の頂上に登った記憶がない。

堡壘岩や芦屋ロックガーデン、蓬莱峡に岩トレで行ったばかりである。

人気は宝塚や阪急芦屋川駅から登るルートだが混雑する。おすすめは裏六甲から登るルートで谷上駅や有馬温泉駅から登ると人に出会わない。
六甲山頂からは油コブシを下るかケーブル山上駅からケーブルに乗り下る。鶴甲より大学構内を通りぬけ阪急六甲駅へ行く道は当時を思い出させてくれる。



武奈ヶ岳山頂



地主神社



北叡山山頂



鶴喜そば



龍門山山頂



熊野本宮大社、大齋原の鳥居



飯盛山



柳生街道



六甲山山頂

以上

南九州・屋久島登山（2024年9月）

小林 功

念願の屋久島に行ってきた。日本で最も降雨量が多く、台風の通り道にもあたるので、空路・海路が運休になることも多く『呼ばれた人しか行けない』とも言われる神秘的な島だ。今年も9月前半に最大瞬間風速70m/secにも達する台風10号がいじめっ子のように屋久島付近で居座り、約3000年もサバイバルして来た弥生杉もへし折った。

それでも樹齢2000年～7200年とも言われる縄文杉はがっしりと生き残った。それは花崗岩の貫入で出来たこの島の岩盤の上で雨量を頼りに貧栄養状態で、成長速度は遅いが緻密な年輪を構成したお陰だという。そしてこの7200年と言うのも、過去1万年の歴史で世界最悪で、南九州の縄文人を絶滅させたとされる鬼界カルデラの大噴火による火砕流が、海を渡って屋久島の宮之浦岳の頂上へも駆け上り、反対側も焼き尽くしたからで、その大災害が無ければもっと古い縄文杉が生き残っていたのではないかと思う。



さて9月20日東京・関西から酒井さん、小林と室町山の会のメンバーが鹿児島島空港へ飛んだ。整備のため到着が遅れ、いきなり空路で屋久島空港に飛ぶはずが、鹿児島港からジェットフォイル高速船の「トッピー」で海路向かうことになった。「トッピー」とはこの地方でよく獲れるトビウオの愛称で、最大400mも飛べるそうだ。海中のマグロなどの大型魚から逃げるためだが、華麗に飛んだ先には海鳥のくちばしも待っている。高速船も浮上して時速80km/hourで航行出来る。通常のフェリーも航行しているが、4時間掛かるところを「トッピー」だと2時間で行ける。宮之浦港が近づいてくると黒々と聳え立つ屋久島が洋上アルプスのようで、太古の恐竜が棲むジュラシックパークの島に到着するような興奮を覚えた。さっそく台風で傷められた登山道の修復状況の情報を収集する。予定していた淀川口からの登山道は途中の車道も含めて復旧しておらず、荒川口からの長いルートなら可能だが、行動時間も長くなるので断念する。縄文杉やヤクスギランド周辺は行動可能なようだ。



20日は安房の民宿の前岳荘に泊まった。岩盤風呂があり、美味しいトビウオ料理や焼き肉料理を出して

くれる。我々が泊まった ANNEX は 2 段ベッドの快適なロッジで長期滞在にも向く。メンバーの方もここに住み着きたい！と言われるくらい素敵な場所だった。またきっと利用すると思う。前岳とは屋久島の主峰群を囲んで海岸近くに屹立する前衛峰群を指す。宮之浦岳を狙う以外に、前岳として、太忠岳、モッコム岳、愛子岳などを候補に挙げていた。この中ではモッコム岳が中級以上の難易度で体力も相当必要とする。我々は翌日の天気予報を睨みながら、どこを狙うか議論していたが、やはり 9 月は雨が多く途中で登山禁止になる場合も多い。今回は 3 日目にヤクスギランドから太忠岳に登る計画を立てたが、昼頃から激しい雨になり、ヤクスギランドも入山禁止になってしまった。とにかくこの島は臨機応変に計画を上手く状況に合わせて行く必要がある山である。

21 日早朝に縄文杉を目指して宿を出発する。バス便もあるが、レンタカーを借りて、天候や状況に合わせて、フレキシブルに行動プランを最適化するのが、この島ではもっとベストな方法だ。縄文杉へのルートでは屋久杉自然館から先は自然保護のため、許可されたバス・タクシーなどの車両しか通行できない。暗い中でも多くの登山客がバスを待っている。特に若いカップルや女性たちのグループも多い。本州の他の山岳エリアでは、全般に平均年齢が高く、私の場合でも 40 歳くらいまでは「お兄さん」と呼ばれていた(笑) この若者集団が多いのは何故だろうと不思議に思ったが、すぐに理由が分かった。縄文杉ルートの途中にあるウイルソン株の巨大な切り株の中に入ることが出来るが、見上げるとそこにはハート型の空が広がって見えるのだ。



縄文杉へは、かつて屋久杉の搬出に使われたトロッコの軌道の上を延々と歩く。ここで代採が盛んだった昭和 30 年代は、標高 600m の地に小杉谷集落があり小学校もあった。子供たちはこのトロッコに乗って通学していたそうだ。屋久杉の新たな伐採が禁止されても、土埋木（どうまいぼく）の切り出しは一定量までなら許されていた。土埋木とは江戸時代に伐採されたが、運び出すことが出来ずに土に埋没するように放置していた屋久杉のことだ。屋久杉は年輪が緻密で樹脂分も多いので土の中にあっても腐敗しない。これを使って作られたテーブルや椅子は〇百万円の良い値段で売られる。この切り出しを担当している職人肌の山師に麓の居酒屋を兼ねた食堂で会ったが、かつては直径 3m 位ある屋久杉の丸太に跨って、トロッコの上を運んでいたという、いかにもやんちゃな感じの兄ちゃんであった。今は林道を使って運び出すが、やはり特別な技が要るらしい。

さて縄文杉は人の手がほぼ介入していない深い森の奥に鎮座し、道のりは往復約 22km、所要時間は 10～11 時間程度、標高差約 700m。林道の終点からは結構な登りになり、屋久島最大の切り株、ウイルソン株を経て、更に登るとようやく縄文杉に辿り着く。それまでも大王杉や様々な巨木を巡るが、縄文杉はひと際巨大であり、保護のために直接触ることは出来ず、周囲の 2 方向からの砦のような展望台からその威容を仰ぎ見る。胸高周囲は 16.1m もあり、かつて落下した太枝が麓の屋久島自然館で観察出来るがそれだけで人の身体くらいの大きさがある。展望台の周囲には赤銅色の樹皮の巨木も聳えていて、異様な雰囲気醸し出している。これはヒメシャラと呼ばれる木だ。屋久島の森は良質な木材の伐採を主とした産業としてきたが、険しい山奥の屋久杉は搬出も困難なため、多くの巨木が遺された。そしてここはまさに太古の昔からの姿を今に伝える場所。しばしここまでの長い道りの苦勞を十分満足する光景に浸る。帰りも来た道を延々と下る。様々な年代の登山客が屋久島を目指して来るが、我々は快調なペースで、約 8 時間半位で往復して来た。



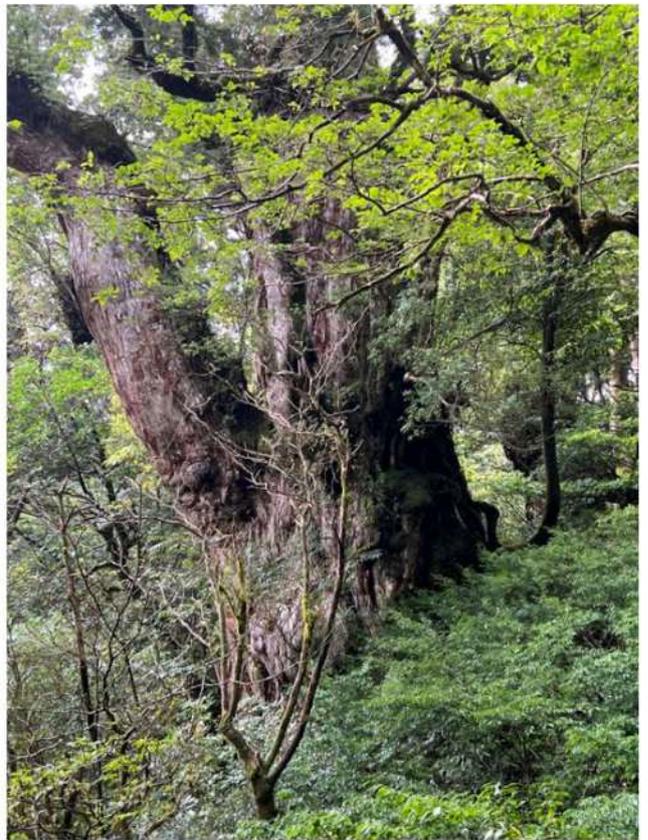
↑ ウイルソン株から見上げるハート型のはずの空



↑ 縄文杉の展望台とヒメシャラの巨木



↑ 縄文杉への登り



↑ 巨大な縄文杉

↓ トロッコ軌道のトンネル



↓ 鹿児島千歳園から桜島を望む



↑ 屋久杉自然館で見た緻密な屋久杉の年輪



↑ 屋久島の地質 赤い部分が貫入した花崗岩

縄文杉から予定より早く下山出来たので、麓の屋久杉自然館で、本州では経験出来ない屋久島ならではの自然の秘密を学ぶことが出来た。

日本列島は激しい地殻変動により骨格が形成され、多くの火山により構成されており、島部は火山起因のものが多いと思っていた。しかし屋久島は全体としてはこの地殻変動によるが、花崗岩の貫入により形成されている。その貫入方向が僅かに西側に傾いていることで、東側に人の住める平らな空間が広がっている。地質図の大部分を占める赤い部分は基盤となる花崗岩で、屋久杉はこの岩盤の上で育つしかなかった。ただ日本で最も多い降雨量の環境が豊富な水を供給することで、屋久杉は貧栄養の地盤の中でも1年1年を超スローに成長させて、結果的には緻密な年輪でがっしりとした構造を造り上げて、毎年台風がメインストリートのように通過するゾーンにあっても、巨大樹の森を構成して来た。

このことは我々の人生の生き様にも通じるものがあると感じた。屋久杉は厳しい環境の中にもそれに緻密に適応していくことで、千年以上生き延びる強固な生命の構造体を創り上げて維持して来た。9月という台風シーズンに訪れて、登山道も荒れて、目指した宮之浦岳登頂は果たせなかったが、また訪れたい、森の中で生命の不思議さを感じたいと深く思わせる。

今回地元の民宿の主人と会話したら、屋久島の沢部（沢登りを楽しむ会）の方だった。屋久島は千尋滝に代表される巨大な岩盤の上に多くの険しい滝を構成しているイメージが強いが、頂稜近い花の江川を、淀川小屋をベースに源頭部を巡る沢のルートは傾斜も落ちて美しい溪相で素晴らしいようだ。これも一度訪ねてみたい沢である。

最終日、屋久島から鹿児島への飛行機も天候が荒れたため運休した。私達は行きと同じく高速船、トッピーで鹿児島港へ戻った。結果的に、仙巖園や尚古集成館などの幕末から明治維新を支えた薩摩藩の歴史の記録をその目で辿ることが出来た。想定外のことが次々と起きたが、結果として予期しなかった収穫が得られた思い出に残る旅だった。

厳冬の仙丈ヶ岳

山本恵昭

地蔵尾根経由で、松峰避難小屋に1泊して快晴の仙丈ヶ岳へ行ってみた。

2月10日柏木登山口の駐車場へ上がる道に20cmほど積雪がある。四駆スタッドレスなのでなんとか登り切り、スコップで除雪して駐車スペース作る。スタックした後続車の救援等、なんだかんだで時間を取られて、8時半に出発。

13時、テントを持って来ているが、尾根から100mほど下って松峰避難小屋へ入る。先客2名。後から4名増えて、今夜は7名が利用。広々しているが、隙間風と埃っぽいのが欠点。尾根までの登り直しを考えると、今日の間にもう少し標高の高いところまで登って、テント泊をした方が良かったかもしれない。

11日ヘッドランプを点けて、4時半に出発。結構、急な斜面が出てくるが、トレースがしっかりあるので順調に進む。無風快晴で、厳冬期とは思えない。

仙丈ヶ岳山頂に10時。どちらを向いても、絶景。No.1富士山とNo.2北岳、No.3間ノ岳が背比べ。甲斐駒ヶ岳の向こうに八ヶ岳。中央アルプスも快晴。北アルプスには雲がかかっている。風がないことを良いことに、しばらく山を眺めながら贅沢な時間を過ごす。

順調なペースで下って、松峰小屋に14時到着。もう1泊の用意はあるが、もう今日のうちに下ってしまおう。スープなど作ってゆっくりと休憩し、14時半発。なんとか明るいうちに駐車場まで行くことができるだろうと思っていたけれど、結局はヘッドランプのお世話になって18時半に駐車場到着。

14時間行動。自分で思っている以上に、歩くペースが遅過ぎ。年寄りアルアル。12月1月とあまり山に行けなかった影響か。65歳を過ぎると、ちょっとしたブランクの間の体力低下はすさまじい。隙間時間を見つけて体を動かさないと、登山寿命がどんどん短くなっていく。

南アルプスの女王と呼ばれている仙丈ヶ岳。今までに、北沢峠から往復したり小仙丈沢を遡行したりと、何度か訪れたことがある。そのたびに、いろいろな魅力を見せてくれた。でも、冬は、夏とはまた違った印象だった。白く雪化粧した、たおやかな姿がいちだと美しかった。

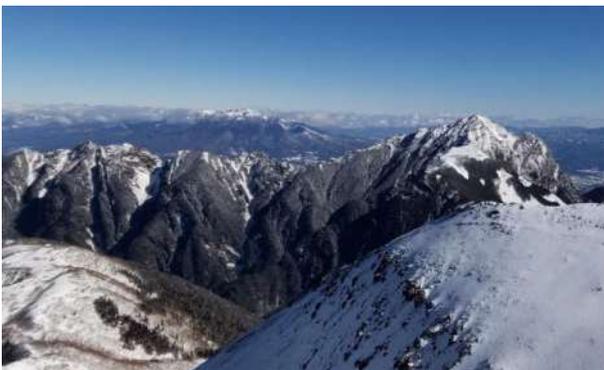
仙丈ヶ岳山頂。奥に中央アルプス。

富士山と北岳、間ノ岳。No.1、No.2、No.3の背比べ。



甲斐駒ヶ岳。奥に八ヶ岳。

登ってきた地蔵尾根



残雪の北岳

山本恵昭

今年のゴールデンウィークは、山スキーもイワナ釣りもホタルイカ掬いも、封印。目指すは、北岳。数年前のクリスマス、鳳凰薬師ヶ岳から見た北岳。その雪煙舞い上げオレンジ色に染まる姿に、一目惚れ。近くによって見てみたい、登ってみたい。冬に何度か計画するも日程が整わず、とうとうゴールデンウィークになってしまった。

5月3日、奈良田ゲートから、ひたすら林道歩き2時間半で、やっと、あるき沢橋登山口。急登を終えると、テント泊予定地の池山小屋に到着。しかし、水作り用の雪がない。東側の藪を1時間かけて下り、沢に水汲みに行くか。いや、時刻も早いので、雪を求めてもう少し登ってみよう。

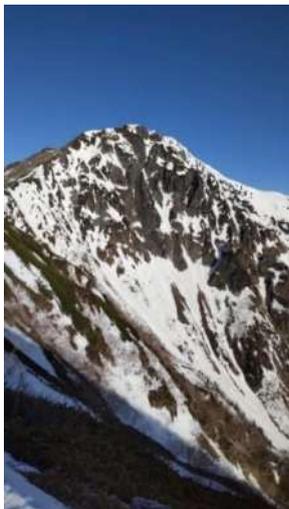
城峰下2280m付近の台地にかろうじて二畳ほどの残雪があったので、その横にテントを設営。雪は塵だらけ。溶かした水は濁っているし、水面は泡立ってくる。でも、他に水を手に入れる方法はないので、仕方なく煮沸して利用する。

4日3時半発、この先も雪はとて少なく、ほとんど夏道。砂払付近で御来光。農鳥岳や間ノ岳が赤く染まる。ポーコン沢の頭まで登ると、突然目の前に北岳バットレスが現れる。雪が少なすぎて思っていたイメージとはちょっと違うけれど、迫力は十分。近づくにつれて、存在感が増す。締まった雪の上をザクザク行くはずが、ハイマツ漕ぎが待っていた。「踏みつけてごめんなさい。そんなに押し返さないでよ」と独り言。八本歯の科尔にもあまり雪は無く、楽勝。

快晴の山頂に8時45分。360度の展望を独り占め。ちょうど、仙丈ヶ岳の両肩に、乗鞍岳と穂高岳。下山中、ヘリコプターが大樺沢上空を何度も旋回している。1月の行方不明者の捜索だろうか。

泊地に13時半。綺麗な雪が手に入るならもう1泊したいけれど、もう濁り水はこりごり。テントを撤収し、下る。16時20分にあるき沢橋登山口。ここで泊まろうかとも思ったが、テントを出すのも面倒になり、惰性で歩き続ける。林道早歩きで、奈良田ゲートに19時到着。ちょうど計算通りに日暮れとなる。15時間半行動となってしまった。

体力の衰えを考えると、身の丈に合った山登りを心掛けないと、と思いつつ。でも、今なんとか辿り着けるかもしれない山に、来年ではもう行けないかもしれない。そう思うと、チャレンジをしてみたくなってくる。そろそろ、山登りの終活時期。頭の中の「死ぬまでに行ってみたい山リスト〇選」から、一つ一つ実行していこう。まだまだ、リストには沢山のプランがある。そして、このリストはいつの間にか、また少しずつ増えていったりもする。たぶん、一生かけても全リストを達成することは出来ないんだろうな。だから、面白いのかもしれない。



北岳バットレス



北岳山頂。バックは仙丈ヶ岳、遠くに中央アルプス

二口山塊・大行沢 ゴルジュとナメと石橋と…

川端 充

東京で単身赴任していた3年間、とにかく山によく登った。赴任前はアルプスから東の山はほとんど知らなかったのだから、これを機会に関東一円だけでなく東北にもできるだけ足を延ばした。

東北の山は大きくたおやかだ。夏は縦走、冬は山スキーと対象はいくらでもあった。縦走では学生のころから憧れだった飯豊の縦走がよかった。スキーは月山周辺でパウダーを滑る楽しさを覚え、八甲田の春スキーも最高だった。もちろん温泉はどこもよかった。

なんとか大阪から東北の山に行く交通手段はないだろうか？新幹線を使えば仙台まで片道2万5千円かかり出費が痛すぎる。高速バスは最近の運転手不足もあって仙台行きしかなく、しかも12時間近く乗らないといけない。やっぱり無理だな～とあきらめかけた時「格安飛行機」があることに気付いた。関西空港や神戸空港から仙台行きが出ているのではないか。それも1万円前後から。これなら東京から新幹線で仙台へ行くのとあまり変わらない。すぐに仙台の友人Tに連絡をとって、東北へ行くことを告げた。

宮城県の二口（ふたくち）山塊は蔵王連峰の稜線を北にたどっていきと行き当たる山塊で、仙台市内から1時間も車を走らせれば行くことができる。一番高い大東岳でも1,365mと特に高くもなく有名な山もないので、ほとんどの人には馴染みがないだろう。大阪から足を運ぶにはいささかスケールは小さいが、沢登りの対象として大行沢（おおなめさわ）が出色で、存在感を放っている。その名の通りナメで有名なので前から気になる山域だったのだ。

仙台空港にTに迎えに来てもらい、途中のコンビニで食料と着火剤を買った。これまで焚火で着火剤を使うのは邪道と考えていたのだが、高桑信一さんが使用していると本で読んで「なんだ、使ってもいいのか」とこだわりを簡単に捨ててしまった次第です。

この日は夕暮れのなか入渓点にある駐車場で一夜を過ごした。

翌朝は空もすっかり明るくなってからモソモソと起きだして、特に会話もないまま準備をして沢に入る。沢はすぐに狭まってきてゴルジュとなった。ゴルジュと言っても、両側がスロープになっていてへつれそうで、へつれない微妙なところ。足で探れば水の中にスタンスの棚が隠れているという感じで、ちょっと八幡平の葛根田川に似ている。慎重に行けば行けないこともないのにTは積極的に泳ぎを交えていく。泳ぎの嫌いな私は内心「えーっ」と悲鳴をあげるのだが、しぶしぶ後続していくと水の流れに勢いがなくなっていく。それならばと、淵が出てきては泳ぎ、結わえたロープでザックを引き寄せるといづつを何回か繰り返す。しかしだんだん寒くなってきた。Tはウェット素材の上下を着ているが、私は薄手の沢登り用のシャツのみ。元気だったのは最初だけで、泳ぐ気力がどんどん失せてきた。次に出てきたのはゴーロ帯。立方体のような巨大な石の塊の合間を縫うようにルートどりしていく。

「ナメはまだか、ナメはまだか」よいしょ、よいしょ、とゴーロを登り続け、二段の幅広の滝ではロープを出して登り終えると沢相もさすがに穏やかになる。そこから少しの頑張り、ぱっと景色が変わった。沢幅いっぱいナメが広がっている。チャラチャラと心地よい瀬音をたて、水は絶え間なく滑るように流れている。

「これか～」「お～」「やほ～」口々に歓声をあげながら、現在地を確認してウムとうなずき、ほどなくカケス沢が出合う右岸の台地に焚火跡のあるテン場を見つける。湿っているが先人が薪を積んでくれていて、すぐに「ここでええか」となった。

さっそく釣りをしようと2人で繰り出す。いつも行ってから気が付くんだけどナメの多い沢って川虫が見つけられないのだ。餌がないものだから私は結局一振りもせず。テンカラのTにもあたりがなく、その日は焚火でウイナーを焼いたりしながら酒を飲み、自分たちやほかの山仲間の近況を話し合う。ある知人は、子供が大きくなって独立し、ほっとしたのもつかの間、奥さんが病に倒れ、それ以来山に行っていないという。他人事ではない。もし自分の身に降りかかれば、山に行くどころではない。「行けるときに行っとくしかないよな～」とまた酒を継ぎ足して薪をくべる。焚火の炎を見つめながら、この一瞬の大事さを噛みしめた。

翌日はカケス沢右又を上る。沢の上部に「北石橋（きたしやつきょう）」という石のアーチがある

人気沢だ。すごく安易に取りついたので、側壁がたっていて高巻きと懸垂下降を繰り返した。今ある体力と技術を総動員し、なんとか突破することができた。たぶん他のパーティーも苦労しているのか、捨て縄がやたらある沢だった。

「北石橋」はよくもこんな地形ができたもんだと感心する。ぽっかりと空いた大きな空間を沢が静かに流れている。大きな空間は、石の塊がボコッと落ちこちたのだろう。「そういえばここに来るまでに巨大な石の塊がいっぱいあったもんな」と、(真偽は不明だが)自分なりに納得した。

テン場に戻り、大休憩でTが大きなイワナを釣り上げ、二人で歓声をあげた。

このようにいい思い出ばかりだったのだけど、最後に一点残念なご報告。一般道を下って駐車場につき「さあ」と服を着替えていると、目を疑った。茶色いやつが3匹、沢用スパッツの上をピョコピョコ動いている。

「ぎゃ〜」

そう、ヒルです。まだ嘔まれる前だったので、多分最後の一般道を歩いている時にくっついたのだろう。そういえば「ヒル注意」の看板があったなあ。沢の中では被害がなかったのですっかり忘れていた。近年、鹿やイノシシが越冬できるようになって東北でもヒルの被害が出ているとのこと。

まあ今思うとこれも話のネタになって、いいエピソードです。

この沢登りから半年がたっても思い出す風景がある。北石橋からテン場に戻る途中に見たブナの森だ。ブナが等間隔に整然と立ち並び、視野のすべてが緑に覆われた。思わず足をとめて見とれてしまう美しさだった。

いまごろブナの森には、しんと雪が降り、雪はあつという間にブッシュを埋めてしまうだろう。そしてスキーでパウダーを蹴散らせている自分を妄想するのだ。



大行沢の下部ゴルジュを泳ぐ



大行沢のナメ



北石橋

同期登山ー荒島岳及び能郷白山登山報告書（2024. 5. 21～22）

大竹口誠治・松村政則

山岳部同期の松村君と百名山である荒島岳と二百名山である能郷白山に登って来ましたので、以下の通り報告します。考えてみれば、同期の松村君と2人だけで山行するのは、大学時代を含めて初めての山行でした。

1. 荒島岳（5月21日）

8：40 岐阜羽島駅発、11：15 荒島岳登山口発、13：50 シャクナゲ平着、
15：00 荒島岳山頂着、18：30 荒島岳登山口着、19：00 宿舎着

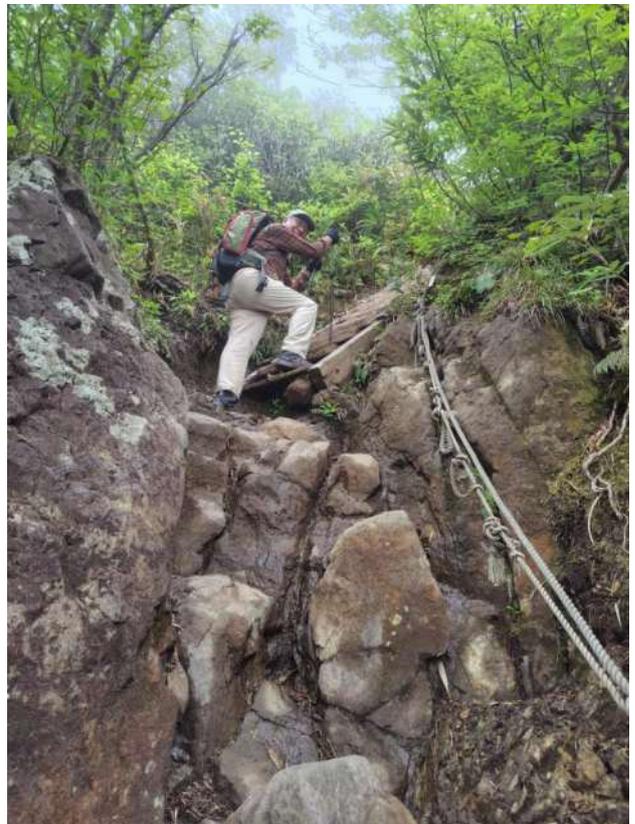
岐阜在住の松村君と8時半に岐阜羽島駅で落ち合い、松村君の車で8時40分に出発。東海北陸自動車道から一部完成している中部縦貫自動車道を経由して、11時過ぎに荒島岳の登山口（標高350m）に到着。中部縦貫自動車道が部分開通しており、かなり時間短縮が出来た。平日にもかかわらず、駐車場はほぼ満車の状態であった。百名山であるので、人気があるようだ。11時15分に登山口を出発し、935mピークに12時50分に到着。途中、タニウツギが綺麗な花を咲かせており、また、ブナの大木が見事であった。傾斜は結構急でひたすら登る感じ。シャクナゲ平に13時50分に到着。登り始めの時間が遅かったこともあり、下山する登山者と次々、すれ違う。シャクナゲ平からは「もちがかべ」と呼ばれる岩場で階段やクサリ場が連続する。荒島岳山頂（1523m）に15時到着。厚い雲に覆われており、眺望はまったくなし。時間が遅いので、直ぐに下りに入った。滑落死亡事故ありの看板があり、慎重に下る。下りの方が気を使った。登山口からの標高差は1200m近くあり、これを1日で日帰りするため、山頂からの下りで疲れが出てくるので、この「もちがかべ」の下りは要注意。シャクナゲ平着16時。元リフト終点からの急な下りは、粘土質の道になり、雨が降ったらすべりやすそうであった。登山口着18時30分。松村君は久しぶりの登山だったので、後半、足の踏ん張りが効かなくなりゆっくりと下った。駐車場から、今晚の宿である大野市内の旅館に向かい、風呂の後に登頂の祝杯を上げた。



荒島岳山頂にて



松村君とタニウツギ



シャクナゲ平から荒島岳への岩場

2. 能郷白山 (5月22日)

07:30 宿舎発、09:10 温見峠着 10:45 能郷白山山頂着、13:30 温見峠発
16:00 岐阜羽島駅着

昨日の疲れがあるが、松村君の体調も回復したようなので、予定通り、能郷白山に向かうことにした。ネットで日本三大酷道と称されている国道157号線を通って、能郷白山の登山口である温見峠を目指して宿を7時半頃に出発。途中の麻那姫湖からは1車線の道路になるが、かなり整備されているため、思った程悪路ではなく、9時10分に標高1020mの温見峠に到着。既に5台位の車が駐車してあった。着替えてから早々に出発。道は急登の部分があり、途中、7ヵ所程、ハシゴがかかっていた。10時40分に1492mのコロンブスピークに到着。コロンブスのアメリカ大陸発見の年と同じ標高なので、この名がつけられたとのこと。ピークからは緩やかな登りになり、ハイキング気分で山頂を目指す。10時45分に能郷白山山頂に到着。当初の計画を立ててから3年越しの登頂となった。山頂では、霧のためまったく眺望なし。今回の山行では、雨は殆ど、降らなかったが、眺望にはまったく見放された山行であった。13時半頃に温見峠を出発し、着替えをして岐阜羽島駅に向かう。途中の根尾能郷辺りまでの1時間程が1車線で、福井県側より、道が狭く、「危険、落ちたら死ぬ」の立て看板もあり緊張する道であった。途中、松村君の実家の近くを通って、16時頃に岐阜羽島駅に到着。丁度、新幹線が出発する時間であったので、大竹口は松村君と別れて埼玉に戻った。



温見峠の駐車場で



コロンブスピークから能郷白山方面



能郷白山山頂にて (松村君)



能郷白山山頂にて (大竹口)

(松村君感想文)

今回、同期(昭和51年入部)の大竹口君と登った荒島岳と能郷白山。
初日に登った荒島岳は福井県の山で、大竹口君の両親の実家に近い事から、彼の提案で登ることになりました。登山口から山頂までの標高差は1200m。私は、自宅近くの標高300m程度の山を登ってトレーニングしてきましたが、このような本格的な山行は久しぶりでしたので、やはりきつかった。特に下山時は急な下りが続き、ストックを使っていたことから、腰にきましたね。翌日の登山が危ぶまれましたが、越前大野の宿で一晩寝たら何とか回復できました。二日目に登った能郷白山は岐阜・福井県境の山で、私の住む岐阜県本巣市にあります。この山を大竹口君と一緒に登ろうという話がでたのは、6年前にさかのぼります。それは2018年9月、「梶やんを偲ぶ会」を岐阜県白川町の笹ヶ峰高原で行った時です。この時は残念ながら、登山口の温見峠に通じる国道157号線が土砂崩れで不通になっていたもので、代わりに飛騨の位山に登ることになりました。そして、一昨年・昨年と能郷白山を登る計画を立てましたが、2回とも直前の天気予報で悪天候が予想されたことから延期となったのです。今回は実に3年越しでようやく登頂できたわけであります。この山は、温見峠の登山口から山頂までの標高差が600m。最初は急登が続き喘ぎあえぎでしたが、県境の尾根まで登りきればあとはなだらかとなり、知らぬ間に山頂に着いたという感じでした。気を使ったのは、温見峠から下る国道157号線岐阜県側の車の走行です。一車線の細い道で路肩にガードレールはなくその下は深い谷。誤って落ちたら、二人とも一卷の終わりという道です。エンジンプレーキをかけながら慎重に下り、一時間ほどでようやく麓の村落に到着する。ここからは、全国的に有名な観光名所の淡墨桜があることから、国道157号線は高速道路と見まがうような立派な道に変わります。こうして無事に大竹口君を新幹線岐阜羽島駅まで送る事ができました。

今回の山行で私が痛感したことは、やはり自分自身のトレーニング不足でした。荒島岳は往復7時間かかりました。スローペースの私に、大竹口君は最後まで我慢して付き合ってくれました。これからはもっとトレーニングを積み、いくつになっても山登りを続けて行きたいと思っております。

以上

羅臼岳・斜里岳・雌阿寒岳登山報告書 (2024.7.7~7.11)

大竹口誠治

北海道の山は、ヒグマと遭遇する危険があり、なかなか、単独行では行きにくい所ですが、たまたま、元の会社の山の会の人達等と同行出来る機会があり、百名山の羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳に登って来ましたので、以下の通り報告致します。

1. 参加者：大竹口誠治、A氏（元の会社の山の会のメンバー）、Y嬢（A氏の山の会のメンバー）

2. 行程

7/7（日） 13:30 女満別空港発、16:00 ホテル地の涯着

予約していたレンタカーで羅臼岳登山口にあるホテル地の涯に向けて出発。

ホテルの手前の道路沿いで、ヒグマを目撃した。ヒグマは、車には目もくれず、ひたすら草を食べていたが、こんな大きなヒグマに山中で遭遇したら、まったく、対処できないことを実感した。

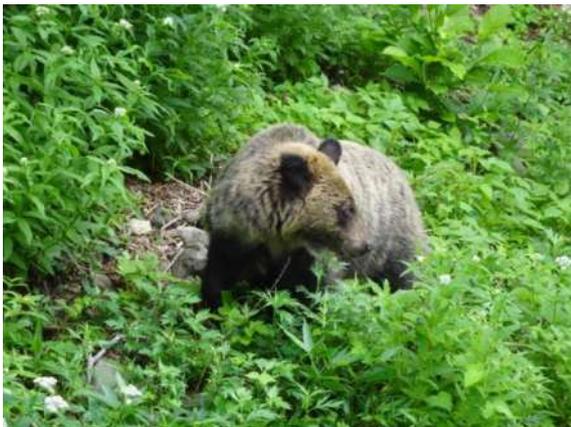
7/8（月） 04:30 岩尾別登山口発、08:40 羅臼平着、09:25 羅臼岳山頂着

10:40 羅臼平着、13:45 岩尾別登山口着

総活動時間：9時間15分、 距離：13.1km、累積登高：1,450m

今日は、今回の山行で一番長い行動時間になるので、朝食を弁当にしてもらって4時半に出発。3時半には行動出来る明るさになっており、緯度の高さを実感した。登山道は、急登の所もあり、また、ダケカンバの枝が、雪の重みのためか登山道に被さっており、何十回も頭をぶつけながら進む。羅臼平の手前の雪渓は、今年は、雪解けが早く、端は薄く、通行止めとなっているため、登山道を進む。偶々、前日が羅臼岳の山開きだったこともあり、登山道は、ダケカンバを除いて、良く整備されていた。

羅臼平から山頂への道は、最後が、岩場の急登になっており、バテバテになりながら、9時半頃に羅臼岳山頂に到着した。山頂は霧のため展望はなく、冷たい風も吹いているため、早々に下山を開始。下りもダケカンバの枝との闘いが続いたが、14時前に無事、登山口に到着した。到着後、今日の宿舎であるウトロの民宿に移動した。



ホテルの手前で遭遇したヒグマ



羅臼岳山頂



羅臼平手前の雪渓

7/9日（火） 休養日で、カムイワッカの滝や知床五湖を散策し、夕方、斜里のホテルに入った。

7/10 (水) 05:00 斜里岳登山口(清岳荘)発、08:35斜里岳山頂着、10:25 熊見峠着、
12:40 斜里岳登山口(清岳荘)発着、
総活動時間:7時間40分、距離9.7km、累積登高 1,058m

ホテルを早朝に出発し、一路、登山口である清岳荘に向かう。旧道の登山道は途中から完全に沢登りルートとなっており、ザイル等は設置されているが、まったくの初心者では難しいルートであった。山頂では霧がかかって眺望がきかないので早々に下山に入る。下りは新道を通ったが、アップダウンがきつく、かつ、長いルートで、登りでは不適なルートであることを実感した。下山後、雌阿寒岳登山口のホテルに移動した。



沢登りルートの途中の滝



斜里岳山頂にて万歳を叫ぶ

7/11 (木) 05:40 雌阿寒岳登山口発、08:05 雌阿寒岳山頂着、09:40 阿寒富士山頂着
11:55 オンネトー登山口着、13:20 雌阿寒岳登山口着

ホテルを6時前に出発し、アカエゾマツの山林を経由して、比較的緩やかな登山道を登る。雌阿寒岳山頂では眺望もよく、火山湖が綺麗に見られた。折角なので綺麗な円錐状の阿寒富士にも登った。帰りは、オンネトー湖畔経由の道を下った。湖畔で食べたソフトクリームは最高であった。



雌阿寒岳山頂から火山湖をのぞむ



美しい円錐状の阿寒富士

翌日には、摩周岳にも登り、北海道の山登りを堪能した。

以上

東京支部新年会及びバラル夫妻歓迎会

大竹口 誠治

2025年2月19日（水）に東京支部の新年会及びHNA-J（ヘルプネパールアソシエーション・ジャパン）の活動でお世話になっているバラル夫妻（前日に来日）の歓迎会を神田で行いました。参加者は川畑さん、豊田さん、山口さん（昨年6月に神戸市から埼玉県へ転居）、酒井さん、中川さん、吉井さん、バラル夫妻と大竹口の計9名でした。東京支部の会合としては、山田会長も参加された会合（2023年5月16日に神戸大学の東京六甲クラブで実施）以来の集まりになりました。バラル夫妻はPLAN HOLIDAYという旅行会社をネパールで経営し、HNA-Jの現地パートナーでもあります。昨年のネパールトレッキングでもお世話になりました。

最長老の川畑さんは、羽鳥湖にある別荘を拠点にスキーを楽しまれているとのことでした。豊田さんは、終活をされているとのことですが、まだまだ、お元気で、今回のACKUNewsにも投稿して頂いています。山口さんは、関東に転居されて半年以上になりましたが、腰の具合は、以前よりは良くなっているとのことでした。酒井さんは、今回のバラル夫妻の来日手続きや東京でのアテンド等で少しお疲れ気味のようでした。中川さんは、初めてのネパールとなる、今年の11月に実施予定のランタナリルン方面のトレッキングとヤラピーク登頂に意欲を見せられていました。吉井さんは、6月中旬から日本山岳会120周年記念事業であるグレート・ヒマラヤ・トラバースの最後の山行のためパキスタンに行く予定になっており、皆さん、お元気でした。若手OBの参加がないのが残念でしたが、今後も、定期的に開催したいと思います。



左から吉井さん、中川さん、酒井さん、川畑さん、豊田さん、バラル氏、ジャヤ夫人、山口さん、大竹口



バラル夫妻
(KALA/DHAR /BARAL 氏 JAYA /BARAL 夫人)

第七章 例会山行報告

氷ノ山千本杉ヒュッテ整備例会報告（第255回例会）

山田健

毎年行っているヒュッテ整備例会を2024年6月22日、23日に実施しました。参加者は、壺阪、山本（恵）、山田、城間（以上OB）、三谷（4）、小田（3）、後藤（3）、石川（1）、吉武（1）の9名。あいにくの梅雨どきの天候で、まきづくりなど十分な作業はできませんでしたが、テラスなどの修理用の木材の荷揚げだけは、天候が悪いなか現役諸君らの頑張りで何とか運びあげました。テラスは2年前にも豪雪で床板が抜け、その時も正垣木材さんに頼んで修理を実施しましたが、この度は同じ個所でシロアリ被害が出て、床板を新しい木材に替えることが必要になりました。テラスのほかにも、1階の天井版の剥がれや、床板の腐食部分の取替も同時に実施することとなり、大学から正垣木材に修理作業を発注してもらい梅雨明けに大工さんに作業をしてもらうため、この日にすべての木材を持ち上げる必要がありました。全部で400kg、最重量の部材は50kgありました。

22日は午後遅くから雨が予想されていたので、何とか雨の降らないうちにと全員で木材の荷揚げ。現役と山本、城間は2回、壺阪、山田は1回の荷揚げを行いました。雨が降り出してあと1回分の木材は翌日に残りました。翌日の天気予報では朝の早いうちは雨が残り、その後上がるように出ていたので、早朝はゆっくりとして、上がってから荷揚げを始めようとその日は寝ました。ところが、早朝目覚めると雨が上がっており、昨日の予報とは逆に2時間後ぐらいに雨が降り出すとの予報に変わっていました。そこで若手6人（城間、現役）をすぐにたたき起こし朝食を食べさせて荷揚げのために大段平まで下らせたところ、予報に反してすぐに本格的に雨が降り出しました。“ウワー、一番悪いときに送り出してしまった、怒ってるかなー、気の毒なことをしたなー”と残ったOB3人は反省。全員かなりビショビショに濡れて荷揚げを完了させてくれました。その後またも予報に反して雨も上がってしまい、天気予報に翻弄された荷揚げとなりました。ご苦労さんでした。



第256回ACKU例会山行報告書（雷鳥沢キャンプベース）

幹事 山田健／大竹口誠治

昨年に引き続き、立山の雷鳥沢キャンプ場をベースにした例会山行を実施しました。昨年は、5名のみの参加でしたが、今回は、ネパール帰りの吉井さんを含め、延べ9名の参加となりました。

詳細を以下の通り報告します。

来年も同様な企画を計画したいと思いますので、積極的なご参加をお願い致します。

1. 参加メンバー及び入山日程

山田健	7月26日～29日	山本恵昭	7月26日～29日
壺阪祐三	7月27日～29日	居谷千春	7月26日～28日（雲ノ平山行へ）
田中信行	7月27日～29日	石原敏雄	7月26日～28日（雲ノ平山行へ）
中川勝八郎	7月27日～29日		（阪大山岳部OB）
大竹口誠治	7月27日～30日	吉井 修	7月28日～29日

2. 行程

7月26日（金）：

中川さんと大竹口は、13時頃に立山駅に到着。当初、山田さん、壺阪さん、田中さん、居谷さんの関西組一行と落ち合って室堂に行く予定であったが、高速道路が混んで到着が遅れる見込みであったので、中川さんと大竹口は先行することになり、15時10分頃に雷鳥沢キャンプ場に到着。関西組は、山田さんが16時20分頃、最終の田中さんは18時前に到着し、17時頃に到着された石原さんも含め、全員が揃ってから夜の宴会を開始した。今年は、昨年の反省から、水場とトイレに近い場所にテントを設営した。（但し、水が溜まりやすい低地に張ることになり、27日の夜中の大雨で浸水してしまい、移転を余儀なくされた）

7月27日（土）：

（1）中川・大竹口隊：剣岳往復

雷鳥沢発4：00、別山乗越5：20、一服剣6：55、前剣7：50、平蔵コル8：40、
剣岳山頂9：25～45、平蔵コル10：10、前剣10：50、一服剣11：45、
剣御前13：40、雷鳥沢14：40、

当初は、27日に剣沢キャンプ場に1泊して、翌日の28日に剣岳を往復する予定であったが、28日が雨の予想であったため、急遽、予定を変更して、雷鳥沢キャンプ場から日帰りすることにした。朝、まだ暗いうちにキャンプ場を出て、ラテをつけながら、35年振りの雷鳥沢をひたすら登る。別山乗越から一服剣までは、所々、ハイマツの覆われた道に行く。武蔵のコルから前剣の登りがきつく大竹口がバテ始める。昔は超人中川、鉄人大竹口とも言われたが、超人は健在なるも、鉄人は、錆だらけになり、鉄の軋む音を立てながら、何とか前剣を登り切った。前剣に登っている途中で、山頂から下山して来る山本（恵）さんとすれ違った。平蔵のコルからはカニノタテバイ等の岩場が続くが、ハシゴや鎖がしっかり設置されており問題なく、9時半頃に剣岳の山頂に到達した。大竹口が前回登ったのは1989年の夏だったので、実に35年振りの剣岳山頂であった。1978年の3月に北方稜線隊と頂上で合流したことを懐かしく思い出した。下山もスローペースであったが、途中の雪渓でかき氷を食べたりして水分補給をして、15時前に雷鳥沢のキャンプ場に辿りついて、剣御前小屋で買った缶ビールで祝杯を上げた。

（2）山田・壺阪隊

朝7時に雷鳥沢を壺阪さんと出発し、一の越に向けて立山山腹を斜めに登って行く登山路に入る。浄土山を正面に気持ちの良い草原、お花畑の中の道を緩やかに登って行く。約2時間半で室堂からの道と合し急に人が増える。ひと登りで一の越山荘の前の広場へ。まだ朝も早いので混雑はそれほどもない。反対側の御山谷の景色を楽しむ。壺阪さんはここから室堂経由で雷鳥沢に向かわれた。私は浄土山に登り、龍王岳まで足を延ばす。現役の時に登った龍王の北壁が足元に見える。浄土山へ戻り西尾根の道を下り、立山カルデラを一望する展望台に立ち寄り、室堂山荘前まで。ここから雷鳥沢へは浄土沢に沿った新しい道を下り、お花畑の朝のぼった道に合流して昼過ぎにBC帰る。

7月28日(日):終日雨で沈殿。

居谷さんと石原さんは、当初、五色が原から薬師岳を越えて、雲ノ平へ行く予定であったが、雨のため、一旦、立山駅に降りて、有峰口から折立へ行き、折立から雲ノ平を目指すルートに変更され、7時頃に室堂に向けて出発された。(詳細は、居谷さんの報告書に記載)

他のメンバーのうち、中川さんはみくりが池温泉に、山本さんは雷鳥沢温泉に入り、のんびりと過ごした。15時過ぎに吉井君が合流した。

7月29日(月)

今日は下山日であるが、吉井さんは、せめて雄山登山はしておきたいと言うことで、5時半に出発し、室堂で、中川さんと大竹口に合流することにした。

田中さんが5:05、山本さんは5:15、壺坂さんは6:30、その他一行は6:50に雷鳥沢キャンプ場を出発し、8時過ぎに全員室堂に到着した。関西組はそのまま、立山駅へ移動後、車で帰り、東京組(中川さん、大竹口)は吉井さんと10:10に室堂で合流し、10:40に室堂を出て、13時に富山に到着し、駅前の店で打ち上げを行い、15:23発の新幹線で東京に戻った。

3. 山本さんのフェースブックの投稿より

やっぱり、剣岳。登って良し、眺めて良し。学生時代から何度登ったことだろう。良い山だ。

今年も、神戸大山岳会の雷鳥沢キャンプ例会に参加。立山周辺の行ってみたいところは、昨年行ってしまった。なので、剣岳へ。

7月26日4日分の食料を担いで、室堂から剣沢キャンプ場へ。

27日4時発のつもりだったのに、寝坊。4時半発。久しぶりの鎖場、バランス感覚が悪くなり怖いと思うようになった。多少の渋滞はあったけど、7時20分に山頂。

早朝は雲におおわれていたけど、今は晴れて360度の絶景。30分ほど、贅沢な時間を過ごす。

スタコラサッサと下り、10時半テントに戻る。撤収して、雷鳥沢キャンプ場12時40分到着。メタボの割には、良いペースで動くことができた。

神戸大メンバーと合流。備え付けのベンチとテーブルで、昼間からすでに宴会モード。そして、薄暗くなるまで続く。年配の方々だけど、皆さんお元気。

28日朝から、結構激しい雨。テント内でスマホ生活。なんと、Wi-Fiが使えるのだ。

10時頃、一旦雨が止んだので、雷鳥沢ヒュッテの温泉に行ってみる。昔のスキー宿のようなちょっと雑然とした雰囲気、なかなか良い。

露天風呂は、小さいけれど、硫黄の香り溢れる源泉掛け流し。晴れていれば立山連峰を眺めながらとなるのだろうが、外は真っ白。

午後はまた雨で、テントスマホ生活 and 昼寝。

夜は、今回一番大きな4人用テントに7人が入り、ワイワイガヤガヤと学生気分ですごく楽しく過ごす。

29日下山日。

朝、あまりに天気が良いので、まだ行ったことのない剣御前に行ってみる。

素晴らしい展望台。目の前に剣岳がドーン。立山川を挟んで奥大日岳。振り返れば、立山連峰と薬師岳。

周りはお花畑。いつまでも、座っていたい。

下山ついでに、ミクリガ池温泉にも入ってみる。泉質は同じだけど、こちらは綺麗で平凡。日本一標高が高い温泉だとか。

天気が不安定で、どうなるかと心配したけど、いろいろ変化に富んだ楽しい山行となった。

4. 壺坂さん俳句

7/26 姿良き 杉林抜け 弥陀ヶ原

7/27 今年は イワカガミもチングルマも 綺麗だ

今年は雪解けが去年より少し遅かったようで、春の雪解けの時の花と、夏の始めの花の両方に会えた。25種類ほどだった。

やっと一の越まで行った 檜ヶ岳までみえた

雲流れ 谷風抜ける テント村

7/28 風に雨 シュラフも濡れて テントの夜

雨の日は テントで車座 懐旧談

7/29 雨に濡れ 2倍の重さ 撤収荷

5. 雷鳥沢キャンプ山日記 (田中信行氏)

○初めに

今度のACKU立山雷鳥沢キャンプ場合宿ほど、入山前にあれこれ心配した山登りは皆無である。

春の奈良や生駒のハイキングで右足が思うように上がらず皆に付いて行けずに遅れに遅れ随分と迷惑を掛けた。「北アルプス登山なんて諦めな！」と忠告されていた。

7月初めに神戸中央市民病院循環器内科で右足大動脈血栓閉塞症と診断され、足が上がらない原因が血流不全と自覚できた。この様な状態で果たして皆に迷惑を掛けずに山登りできるのか？

当初参加を保留にしていたが、同期の壺阪兄から「面倒を見てやるから参加しよう」と強引に誘われて最後は「当たって砕けろ！」で、ついつい参加の返事をしてしまった。

○2024年7月26日(金)晴

早朝始発のバスでJR六甲道駅へ、快速で尼崎駅乗り換え、丹波路快速で三田駅着、居谷兄と合流出来て安堵する。壺阪兄を乗せた山田車が15分遅れて到着、4人で舞鶴自動車道(入口三田西IC)を北上し、順調にドライブした。北陸自動車道(出口立山IC)から立山ケーブル(14:15)乗車、バス(14:40)で室堂平到着(15:30)した。昔は何でもなかった室堂平から雷鳥沢キャンプ場への移動が皆に遅れること1時間以上、懸念していた通りの難行苦行になった。

○2024年7月27日(土)快晴

今朝は快晴、山行日和だ！7時にテント場を三人でスタート、称名川を渡ったところから皆と別れて一人で新室堂乗越し2,390mを目指した。コースタイム30分の所を2時間を費やしてビスタリ登高、木道沿いの高山植物を堪能した。奥大日岳に連なる尾根上に展望台を見つけ立山カルデラを1時間楽しんだ。11時半、無事テント場へ下山した。

先に真砂岳ルートを登られたパーティお二人がテント場脇のテーブルで縦走の準備をして居られた。

有名な日本人登山家二人がヒマラヤK2峰で遭難したことを知らされた。無事を祈った。

○2024年7月28日(日)終日雨

朝4時半、テント内が風雨で浸水した。湿地の近くの水径(みずみち)の上にテントが設営されていた。慌てて皆でちょっと高台にテントを移設して安堵した。終日雨降り止まず沈殿。テント内で昼飯と夕飯を食べた。このテント大竹口兄のテントで7名収容可能、皆が集まってわいわいがやがや、なんとも楽しい雨降り休養日になった。GHTの吉井修兄が雨の中入山、合流された。

○2024年7月29日(月)晴

雷鳥沢キャンプ場から室堂平・バスターミナル迄のコースタイムは80分程だが、右足大動脈血栓閉塞症で脚力が弱った現状を考え、壺阪兄のアドバイスもあって、早朝5時に食事抜きで早立ちした。案の定2時間40分を要した。8時に本隊下山組が到着した。バス、ケーブルを乗り継いで無事山田車に乗り込んだ。姫路の壺阪宅に寄ってJR加古川駅から無事帰宅した。

○最後に

山田様、大竹口様；この度の山旅では大変お世話になりました。ありがとうございました。

下山後1ヶ月の8月29日に満85歳の誕生日を一病息災で迎えることが出来ました。

9月と10月は手術前の精密検査を何度も受けました。やっと11月15日に神戸中央市民病院に入院して、18日に右足大動脈血栓閉塞症の手術を受けました。左手首からカテーテルを1m以上挿入し、閉塞部をバルーンで除去し、ステントを2本入れたとのことでした。手術は「軽快」で成功し、右足が軽く上がるようになりスピードアップし歩行が楽になりました。

(2024年12月28日投稿)



剣御前からの剣岳



平蔵のコルから平蔵谷を見下ろす(雪が少ない)



雷鳥沢キャンプ場での食事風景



劔岳山頂（山本さん）



雷鳥荘からの下りから見る雷鳥沢
キャンプ場と雷鳥沢



カニノタテバイを登る中川さん



雷鳥沢キャンプ場のテント内風景



一の越に向けて立山山腹を斜めに登って行く
登山路

以上

念願の雲ノ平・鷲羽岳行

居谷千春

1. 兄の遭難

私の兄は1970年3月20日頃、南アルプス北沢冬季小屋内に荷物を残し行方不明になった。その2日後、小屋の主人の竹沢長衛氏（二代目）が小屋の見回りに行ったところ小屋内の残荷状態や登山カード（3月17日入山、仙丈・甲斐駒を登り22日に下山の計画）から遭難と判断され高速警察に通報された。すぐさま救助隊（警察・長谷村混成）・信州大学山岳部捜索隊（当地域の合宿を早めて入山）が遭難の可能性のある尾根筋のルートを踏査したが何ら手掛かりを発見することはできなかった。ただ信大隊からは駒津峰から甲斐駒ヶ岳の稜線上の「六方石」の周辺で戸台谷側への雪庇崩壊が見つかったとの情報がよせられた。以降、立て看板設置やビラ配布で入山者への呼びかけや、また該当日に入山した100人近い登山者を登山者カードから割り出して手紙で個別に情報を得て、来るべき5月以降の捜索方針を決めていった。

その後4月の末から10月半ばまで、信州大学農学部友人や父親の会社の多数の有志、また母の教会の神父さんや友人までもが幾度もこの山域に入り登山道踏査をしてくれた。危険な戸台谷・水晶谷の各沢筋踏査や滝つぼチェック、その他沢の谷筋遡行などは信州大学山岳部や山岳部経験のある会社捜索隊のメンバーが担当してくれた。5月の捜索で小仙丈沢のカール底に「黄色のザック」とおぼしきものが遠視され「すわっ！発見か」と緊張したことがあった。翌日遺体収容の装備を持ってカール底にむかったが発見したのは「みかんの皮」だったこともある。

谷筋に関してもかなり綿密に踏査されたといってもいいが、なにも見つからなかった。父は8か月の捜索を終えた時点で経過を「居谷善文遭難及び捜索経過報告」としてまとめ、関係者・協力してくれた皆さまに送布した。ここで捜索にかかわっていただいた各位に改めて深く感謝いたします。

報告書で父が「あとがき」に記している。

「～広域にわたる深山のことではあり、鬱蒼とした密林、立ち入り難い這松地帯、険阻な幽谷を連ねているため、視界の及ぶ範囲は極めて局限されています。今後は個々の小地域を丹念に踏査し尽くすか、通常ルートを外れた一般登山者による偶然の遭遇に期待する以外にありません。～及ばずながら**私共**の手で、何年かかろうとも丹念に捜索したいと念願しています」。



そして遭難から10年経って裁判所から「死亡宣告」をもらい戸籍抹消ができたわけです。上記「私共」という表現の中には、この遭難を機に山に行くようになった両親と神戸大学山岳部に入った私も当然含まれている。というよりは私中心に探すと言っているのかもしれない。毎年、合宿が終わった後にこの地域に入って行ったが、社会人になった後は仕事が忙しくなりその頻度も少なくなっていった。「こんなんでいいのか」と思うようになったある時、寝ている時に左右の家具が倒れて押しつぶされそうになってしまう「夢か幻視」が一週間程続いたことがあった。この時ばかりは本当に兄が「ちょっとは来んか！」と言っているように思えたので、さる靈感のするどい方を尋ねてみてもらったら「わしはご先祖さんの助けをかりて**幸せにやっとなるから心配せんでもいい**」との兄のメッセージをうけとり、その後そういう現象も消えた。

遭難当時、信州大学農学部二回生の兄は母親の願いで山岳部をやめた。遭難後、母は信州大学山岳部のメンバーに接し、誰であって

も（退部した部員の母親でも）ストレートに受け入れてくれる暖かい人間関係を感じ、捜索に参加してくれた当時の山岳部員や部長だけではなく山岳会員と一生の付き合いをしていた。「なぜ山岳部の持っているものを認識することなく入部や在部を反対したのだろう」と残念に思うことしきりだった。

兄は山岳部退部後も同じく退部した特定の友人と結構山に行っていたようだ。彼が残した山の写真はいくらかあったが、本人が山頂で撮っている写真は北アルプス鷲羽岳（と思われる）だけである。

この写真を見て鷲羽岳にのぼりたいと思った。いつでも行けると思っていたが、山岳部時代もOBになってからも意外にそういうチャンスが巡ってこない。2016年、死ぬまでに必ず行きたいと思っていた雲南省梅里雪山への巡礼の旅にでかけた。平井先生はじめ5人で船原君はじめ京大隊の遭難慰霊碑に詣ることができたが、帰国の翌日突如クモ膜下出血が起こり失神したまま手術を受けた。手術は成功したが翌日目覚めた時の夢が明確に頭に残っていた。どうも黒部源流か雲の平の東端にいるようで、ド

ローンで映している様に徐々に見える範囲が広がっていく、昇天しているのかと思った。三俣山荘とおぼしき小屋が目の下になった時、向こうに茶褐色の硫黄尾根が見えて、その後ろに緑色と黒灰色の槍ヶ岳北鎌尾根が見えて、更に上がり常念の向こう遠くに安曇野がうっすらとみえたような気がした。自分の脳内で作り上げた景色ではあるが、「これは行かにゃあなるまい」と思った。それからである。雲ノ平も同じく夜中のBSテレビで何回もみるうちに当然合せていくのがいいと確信した。具体的な計画を自分で作らないと行けるはずがないと気がつき、毎年「今年こそ」と計画を作ったがその都度、何かが起こった。義母の逝去、家の改築、コロナ危機での小屋閉鎖、先祖代々の墓の整理、更にカミさんの病氣入院も加わった。しかしながら、2024年夏は「何か」が起こらなかった。そしてACKUの例会「雷鳥沢サマーテント」に参加することができた。さあ、ここから鷲羽は狙えるか？



2. 雷鳥沢からの大縦走、すぐさま計画変更

雷鳥沢のサマーテントで今回の縦走の同行者、石原敏雄さんと合流した。石原さんは私より4歳も年長で大阪大学の理学部化学科卒業後、修士課程は神戸大学に、そして博士課程はまた大阪大学に戻ったが彼の修士課程の際に在籍した有機化学の研究室に1974年に私も入った。1976年神戸大学がカラコルムシェルピカンリに遠征隊を送った同じ時期に大阪大学は同地域のアプサラサス遠征隊を送って同じく初登頂に成功したが、帰路やイスラマバード大使館などで行動をとにもした。それ以来の交友関係で、今回の鷲羽岳狙いも「行ってもいいよ」との賛同を得た。



サマーテントに集まったのは田中信さん・壺阪さん・阪大石原さん・山田会長・大竹口副会長・中川さんと私（7月26日）。翌日は縦走のバディー石原さんと身体ほぐし、お花畑の中を真砂岳西尾根のビューポイントまで登った。登るとともに奥大日が高く大きく見えてくる。イワイチョウ・モミジカラマツ・クルマユリ・イワカガミ…、花が見えるたびにの石原氏がカメラを構えるのでゆっくり休める。真砂岳から富士ノ折立へ歩く人がしっかり見えるところで引き返す。テント場で縦走の食料・装備の絞り込み。石原重量検査官の検定にはずれたものは今回のメンバーが喜んで食してくれる。

縦走出発日の7月28日、朝4時頃より大雨。計画では一の越から竜王岳・鬼岳・獅子岳・ザラ峠経由で五色が原山荘のテント場に行く予定だったが数日大雨が続くそうなので、その後続く鳶岳・越中沢岳・スゴ小屋・間山・薬師岳・太郎平までの長い尾根の縦走への不安ですぐさま計画を変更。一旦下山し有峰の折立から太郎平へ登ることとした。7時過ぎには雷鳥沢のテントをたたみ出発、激

しい雨の中、室堂に戻り下山のバス・ケーブルの連絡もよく10時には立山駅に降り立った。食事でもと思ったがすぐさま富山行き電車が来たので飛び乗った。

3. 折立から雲ノ平へ

有峰口駅で折立行きのバスの時間をチェックすると、なんとこの夏の登山シーズンに一日一本10時30分発、なんとラッキーなことだろう。登山者は折立まで、富山からのバスまたは自家用車でアクセスするのだ。しかしまあなんと不用意であったことか。これを逃がせばどうしていただろう、冷や汗なのである。折立ヒュッテは無人、キャンプ場にはテント一張もない。バスガイドによれば、熊が当たり前ででてくるそうだ。熊よけの電気感電柵はあるが客を呼べないようだ。

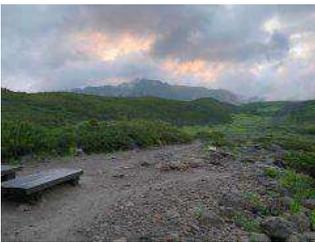
11:40 出発、折立ではまだ曇り空で雨は降っていない。急いで上にあがろう。太郎坂、この登山道は雨が降れば危険な川になるだろう。雷鳥沢キャンプ場で多少荷物は減らしたはずだがトレーニングなしの老人にはきつい登りだ。五光岩ベンチあたりでついに大雨が襲ってくる。森林をでて木道が現れた頃、年長だがトレーニング充分元気な石原氏には先に太郎小屋に行ってもらふことにする。登山道は丸太で囲われた柵の中に石を詰め込んであるので、あっというまに道だけが川状になり歩けない。小さな

サンショウオオらしき物も次々に流れてきた。しかし、この大雨がバテバテの疲労を忘れさせてくれ、なんとか18:20頃小屋にたどり着く。又この雨のおかげで太郎小屋は予約キャンセルや下山が多く、予約なしでも泊まることのできた。評判のラーメンは食べられなかったが…。

7月29日、雨は一旦休止、雲は多いが朝焼けの薬師岳や富山湾良く見えた。思い起こせば太郎平は山岳部1回生の春山で何日もテントで過ごしたところ。薬師沢にはスキーで滑り降りたという記憶しかない。小屋までは下りだけとっていたが小沢横断の為の登りもいくらかはあった。ほぼ全ルートが木道で、美しいカベツケヶ原を通って薬師沢小屋に着く。昨日の大雨による事故か、ヘリコプター救助があり結構待たされた。薬師沢小屋からは橋を渡って沢芯まで梯子で下りる。すこし歩くと雲の平への直登だ。この急登は風もなくとても暑く、大石の積み重ねを越えていくのがつらい。ここで昨日のような大雨が降るとどうなるだろうと心配になる。昨日と同様に雲ノ平西端の木道に出たところで、石原翁には先に行ってもらうことにした。ゆっくり木道を楽しむ。雨が降りそうだがなんとかもっている。視界はそんなによくはないが、祖母岳（ばあだけ）はよく見える。一般登山客でこの山にちゃんと祖母岳に登った人はいるのだろうか。ACKUでは？ 奥日本庭園の標識を見てしばらくすると遠くに憧れの雲ノ平山荘が見えた。本日もキャンセル多く幸せなことに小屋に泊まれた。まだ年数があまり経っていないのか宿泊エリアも食堂も本当にきれい、小屋名物の石狩鍋は真っ先におかわりをした。食事の後は小屋のメンバーのインドのレー旅行体験記のトークショーがあった。

翌7月30日は激しい雨が吹き荒れた、窓から外をみてハイ松の揺れ（風の強さ）と雨の量、その間隔などをしばらく観察していたが、大町の天気予報は夜まで降り続くとのこと。いろいろ考えたが連泊可能であったので贅沢にも小屋沈殿に決定。図書コーナーの本を楽しんだ。また連泊客にはおかずが一品追加でおいしくいただいた。調子に乗ってハーフボトルの塩尻「五-ワイン」(¥1800)なんか頼んでしまったが二人では一瞬でなくなる。

4. 鷲羽岳登頂、三俣山荘キャンプ場へ



雲ノ平山荘からの水晶湖



スイス庭園



祖母岳頂上からの南望

7月31日、起床時は霧・曇天であったが、日の出後一時的に水晶方面が開けた。昼からは晴れるという予報が貼り出されており、勇んで6時頃には山荘を出発した。うっすらと陽の光が感じられ青い空も見えてきた。振り返ると雲ノ平山荘の姿が美しい。スイス庭園でじっくり高山植物を味わった。祖母岳頂上からの景色も感動ものだった。祖母岳から比較的細い尾根を下りて岩苔乗越までやってきて「ここはこういう地形だったのか」とはじめて認識した。過去何回も地図をみていたがいい加減なものだ。



ワリモと水晶の分岐を過ぎてあの特異な姿のワリモ頂上に向かう頃は身体中がすでに喜びで高揚していた。やや大げさだがクーラカンリの頂上稜線をP2に向かっていった時のように感動していた。ルートはワリモ直下でショートカットしているので石原翁に待ってもらい頂上に向かった。残念ながらまたやや霧が出てきて頂上からの鷲羽はうっすらしか見えない。そこから一旦少し下りると霧がまた消え、「坂の上の雲」のタイトル画像のような尾根が伸び、そこを登ると遂に鷲羽岳の頂上に到着し大きな喜びを味わった。頂上にいた登山者に記念写真を撮ってもらった。当然持参した兄の写真を手にもって。石原翁にも

深い感謝である。外輪山の中の鷲羽池は美しい、その向こうの硫黄尾根と北鎌尾根の組み合わせは本当に美しい。十分に景色を堪能し三俣山荘に降り立った。キャンプ場はハイ松帯を切り開いた道を少し行くとすぐである。水が流れ最高の場所、昼過ぎには晴天になり濡れたものがどんどん乾いていった。

5. 双六小屋キャンプ場へ、ワサビ平小屋泊、新穂高下山

太郎小屋泊の時点で本来の計画より2日分短縮され雲ノ平山荘で1日沈殿したので都合まだ1日は余裕がある。晴天の8月1日は双六小屋までにして、ゆっくり贅沢な時間を過ごすことにした。三俣山荘からは三俣蓮華岳・双六岳を越えていくルートをとらず、沢のトラバースルートに行くことにした。ここも可憐な花畑があちこちに広がるプロムナード。雷鳥の親子が現われなかなか去らない。そういえばハヤブサかノスリのような猛禽類の鳥がとんでいた。むしろ人間の傍のほうが安全と危険がさるまで戦略的に待っていたのかも。すぐそこに見える双六の科尔だが、このルートは結構下がって結構上がるので予想よりは時間はかかった。しかし昼には到着した。双六池のほとりのキャンプサイトでゆっくり最後の晩餐と思ったが、コンロのガスがきれてしまった。応急の竈をつくりエスビットで湯を沸かし朝食予定のアルファ米と紅茶のみの食事をした。キャンプサイトで嬌声が聞こえるといって、食べそこなったマルタイラーメン類を石原翁がわざわざ女学生パーティーに届けにいった。嫌がられるどころか喜ばれたそうである。



双六山荘から 夕刻の鷲羽岳

遠く唐沢岳と餓鬼岳

日の出は燕岳頂上から

太陽の出入り時、石原翁は岩壁が赤く染まるタイミングを求めて忙しい、何枚の写真をとっているのだろうか。こちらもつられてゆっくり眺め何枚も写真を撮る。ここ双六の科尔からの景色もなかなかいい。鷲羽岳の形は確かに頭の両脇に肩が見えるので「成程、確かに鷲だ」と思う。さらに外輪山の東端から右に流れる尾根の頭(かしら)の形も「鷲羽」であるのに気がつき「小鷲羽」と呼ぶことにした。その右には小さく野口五郎が見え、更にその右遠くに唐沢岳、餓鬼岳が印象的だ。

翌8月2日、日の出はちょうど燕岳の頂上からであった。テント場からは笠ヶ岳大きく近く見える。小屋でお湯を購入してまたアルファ米で朝食をすました。晴天下、小池新道を下りる、樅沢岳から中崎尾根の頭までの尾根は結構長く複雑だ。この辺は昔走りまわった所だが正確にはあまり覚えてない。あの頃は、早く歩くことがプライオリティーだったのかもしれない。さてルートは弓折岳の手前から鏡平へ下りる。このへんからの景色の主役はやはり槍・穂高の稜線だ、誰もが池に映った槍穂を撮りたがる。

鏡平から下はあつという間と思っていたがコースタイムの時間の2倍程度をかけておりた。ワサビ平の小屋は宿泊可能であったので泊まることにした。昔ならこんなところの小屋泊まりなんてありえないが、今は有難かった。風呂あり、豪華な食事あり、そして安価(当たり前か?)

8月3日、幅3メートル以上の広い道をブラブラ新穂高に向かって歩く、笠ヶ岳の登り口を経て錫杖岳の岩壁を鑑賞しながら1時間半ほどで到着した。9時前には高山行のバスがあった。松本方面へ帰る石原さんとはここでお別れ。9日間の相棒になってくれて心から感謝!



双六キャンプ場から笠ヶ岳(右奥)

小池新道から樅沢岳(左端)から槍への稜線

鏡平の池 槍穂の稜線

合同セミナー&新年会（第257回例会）

長谷川 浩

2025年1月11日、神大深江キャンパスで山岳部・山岳会合同セミナー（勉強会）を行い、その後、会場を阪神深江駅前の寿司屋「ととや」に移し、新たにメンバーも加わって新年会を開催しました。

セミナーは、若手OBと現役リーダーシップの企画により、安全登山・緊急対応をテーマとし、前半は「御嶽山遭難（1988）での緊急対応」を長谷川、後半は「セルフレスキュー」を後藤君が講師となって実施しました。御嶽山遭難から36年経ち、事故のことを知らない現役もいる中、当時、救援隊に参加した居谷・山田・大竹口・長谷川が参加していましたので、当時の記憶をたどりながら事故の教訓を共有することが出来たと思います。セルフレスキューでは、座学に加えてザックを使った怪我人の背負い方や簡易担架作成の実演も行いました。



新年会参加者は写真のとおり、前列左から尾崎、後藤、藤原、山田、小宮、居谷、大竹口、岩井、後列左から石川、程、城間、侯、石川、小田、そして水谷先生。小池先生と長谷川は、撮影時には早退で映っていません。以上、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。（文中敬称略）。



第八章 山岳部活動報告（2024年度）

後立山連峰縦走 報告書

文責：長屋（工・B2）

日程：2024/9/9（月）～2024/9/12（木）

メンバー：後藤（B3・CL 装備）、小田（B3・SL 食糧）、長屋（B2）、藤原（B2）、石川（B1）、吉武（B1）
以下先輩方敬称略。

【合宿の背景】

今年度の新人山行は7月に南アルプスで予定されていたが、悪天候により中止となってしまった。また前期は上回生が忙しかったことにより、下級生へのクライミング指導が不足していた。以上の理由から、夏の合宿はクライミング定着合宿ではなく、新人山行を兼ねた縦走合宿となった。計画を任された私は夏の合宿である限り縦走合宿でもあっても難易度の高いルートに行くべきだと思い、かといって新入生をいきなりジャンダルムや北鎌尾根に連れて行くのもマズイので、間をとってアルプスの上級縦走コースの中では簡単と言われる八峰キレットを八方尾根→扇沢で縦走することにした。

0日目 9/9（月）晴れ

大阪→白馬アプローチ

初日は各自白馬までアプローチということで、青春18きっぷが販売期間を過ぎていたため、後藤先輩が金券ショップで二人分のきっぷをゲットしてきてくださり、2人は青春18きっぷで白馬まで移動、あとの4人は名古屋までJRで移動し、そこから松本行き的高速バスとJRを使い白馬まで移動となった。

その日の23時、白馬駅に集ったのは5人であった。そう、長屋はその日おきたJRの大幅遅延の煽りをうけて高速バスに乗れなかったのである。しかし高速バス勢のほかの3人は私とおおむね同じ時間に大阪駅を通過していたため、なぜ私だけが高速バスに乗り遅れたのかさっぱりわからない。若干の心当たりとしては大阪京都間において車内放送で快速のほうが遅れている新快速よりも早く京都に着くと言われたので私は快速に飛び乗ったが、JRは優等列車のダイヤ回復が優先だったのだろう、私が乗っている快速は京都に着くまでに3本の新快速に追い越された。そして新快速に先を譲ったため私の快速列車の遅れは大阪を発つときは30分であったが、京都に着くころには一時間以上となっていた。そうだ、それが理由だろう。快速のほうが早く着くとか言ったJR許さん。

結局私はJRで信濃大町駅まで行き、駅前の公園で一人さみしくステビバすることとなった。奇しくも、そこは5月の残雪期白馬合宿のとき、電車を乗り間違え白馬にたどり着けなかったため程と寝た場所と同じであった。私は信濃大町でステビバする呪いにかかっているのかもしれない。まあ、あの公園は静かで寝心地もいいので悪い気はしないが。

ほかの5人は白馬駅でステビバした。ベンチがたくさんあってよかったとのこと。

1日目 9/10（火）曇り時々晴れ

八方池山荘 9:45→唐松岳 11:45→五竜山荘 14:45

前日に信濃大町に泊まった長屋は始発で白馬に行き5人と合流。幸い始発が早かったため、計画に一切の支障はなかった。白馬のコンビニにて水を購入。今回の縦走は水場が少ないことを考慮して各自70ずつ持つことになった。白馬のアルペンリフトは始発前には大行列となっており、始発から15分ほど遅いリフトに乗ることになったので、当初黒菱平までリフトで行く予定だったが、八方池山荘までリフトで行くことになった。因みに価格はあまり変わらなかった。リフトで長屋は石川、藤原と同乗したが、このときゴンドラがユニバのアトラクションよりずっと面白い。というかテーマパーク自体嫌いという話になり、やはりこの部活は陰キャの巣窟となっていると実感した。なお、じぶんも例外でない。このときの周囲はガスっており、ひんやりとした空気が肌を撫でていた。

八方池山荘でトイレ休憩を経て出発。先頭は長屋であった。当初の計画では八方池に寄る予定であったが、ガスっていたためここを通過し、扇雪溪に向かった。八方尾根は下部が草原であるが、扇雪溪まで上がると逆に樹林帯に入るのが興味深いなんてことを考えていると扇雪溪に到着したが、そこに氷の一片もなかったためあつけにとられた。今年は6月から白馬大雪溪が通行不可になり、地球温暖化が如実に感じられる年であるが、まさか消滅するとは思っていなかった。ここで先ほどからしんどそうにしていた吉武が荷物が重すぎると訴えたため、今日の行程がまだ長いことを鑑み、吉武の共同装備である

食糧の一部を後藤と小田、長屋で分配した。扇雪溪からさらに上がると、再び森林限界を超えると同時に、ガスが晴れて不帰の剣が見えてきた。その草木も生えないほど荒々しい姿には惚れ惚れさせられた。そして最後のきつい階段を超えると唐松岳頂上小屋に到着した。ここまで来た時にはガスもだいぶ晴れており、唐松岳がどんと目の前にそびえたち、反対をむけば五竜岳が頂上に雲をまとっていることを確認できた。ここで荷物をデポして、唐松岳へと向かったが、荷物をデポしているにも拘わらず、この最後の登りが何気にしんどかった。頂上からは不帰の剣が非常にきれいに見え、皆しばしその美しい姿に見入っていた。その後集合写真を撮った時、藤原が「進撃の巨人」の作中登場する調査兵団の心臓を捧げるポーズをしていたのだが、なぜこのポーズをしたのか何に心臓を捧げていたのか疑問が残る。

さて、唐松岳から下り、山頂小屋で荷物を回収し五龍山荘に向けて出発。ここからは赤首の鎖という下りの鎖場連続地帯であり、一日目の核心部であるため、全員にヘルメットとつけさせた。この鎖場は名前の通り赤茶けた岩稜であり、足だけでなく手も積極的に使うため藤原や吉武など後輩たちは楽しそうにしていたが、肝心の先頭の長屋はチキンであるため、この鎖場で結構唐松岳までの時間的アドバンテージを失ってしまった。実際YAMAPで確認するとこのときの速度はYAMAP基準で97%とかなり遅くなっている。鎖場を越えた後は切れ落ちた長野側とゆったりとした黒部側の両方の景色を楽しみながら歩いていたが、このときには予報より早く曇り始めており、景色もどんどん悪くなる中で長く上り坂であったので、皆疲れの色が顔に出ている。結局五龍山荘に着いたのは14:45で計画より5分遅れであった。

山荘に着いてからしばらくテントも建てず休憩していたが、雨が降り始めたので、大急ぎでテントを建て、晩御飯を作った。晩御飯はおいしいカレーだったと思うが、長屋が無洗米を普通米の要領で炊いてしまったため酷くまずいゴワゴワした米が炊き上がってしまった。まずい飯を作ってしまったすみませんでした。寝る前には雨は止み、雲間から日暮れの唐松岳が見えた。唐松岳は八方側か見るよりも五龍山荘から見るほうがはるかに威厳高く、最初は見えている山が今日自分が登った唐松岳とは気づかなかったほどだ。日暮れ時には雲も随分とはけ、きれいな星空が見えたが、ここで石川と吉武が星空を見るためテントの外で寝ると言い出した。最初は寒いうえ雨が降ったら濡れるため止めるように言ったが、ならエマージェンシーシートをかぶせて寝るとか言い始めたので、後藤、小田、長屋は呆れて好きにさせることにした。明日雨の場合八峰キレットを通過するかどうか悩みながら眠りについた。



唐松岳山頂



五龍岳に向かう途中

2日目 9/11 (水) 曇りのち晴れ

五龍山荘 5:00→五竜岳 6:00→鹿島槍ヶ岳 12:20→冷池山荘 13:20

この日は予定通り起きた。昨晚テント外で寝ていた石川と吉武に聞くと昨晚雨は降らず、星空が非常に綺麗であったとのことで、ただ五龍岳は厚い雲に覆われていることをやや気にしながらも予定通り八峰キレットを通過することになった。予定通り5時に五龍山荘を出発。このとき空気は澄んでおり八ヶ岳、南アルプスだけでなく、富士山も見えた。ただ小田と長屋はまさか後立山から富士山が見えると思っていなかったもので、当初それを藜科ではないかと議論していた。ただ風が非常に強かったため、一行はあまりしゃべらず黙々と歩いていた。風が強いからか天気が良かったのもつかの間、我々が五竜岳上部の岩場を登り始めると黒部側より大きな雲が近づいてきて我々を覆い、五竜岳に着くころにはあたり

は真っ白となっていた。よって山頂付近で休憩した際、後藤、小田、藤原はなんの景色も見えないためわざわざ山頂に行く必要はないと言ったため、この間に山頂に行ったのは石川、吉武、長屋の三名だけであった。実際、この三名も何も景色が見えないため山頂の標識の写真だけ撮ってすぐ戻ってきた。

五竜岳の下りとはとにかくガレ場と鎖の連続であり、このときチキンの長屋が先頭であったため、五竜岳とピーク G4 のコルに降り立つまでにかかなりの時間を食ってしまった。ほかのメンバーにはこのときかなり煩わしい思いをさせてしまった。ピーク G4 とのコルに降り立ちほっとしたのもつかの間、目の前には霧の中に黒々としたピーク G4, G5 がゲームのラスボスの城のように聳え立っており、今からこのピークに取っ掛かるのかと思うと身がすくむ思いであった、実際ピーク G4, G5 は特に下りの鎖などで足場が見えづらい逆層スラブ気味で昨日の雨でぬれていたため、一個一個の足場確保に時間を要した。体感としては劔岳の比較的簡単な核心部がいくつか連続して続く感じであった。また霧の中では道が不明瞭で、先頭の長屋が後ろを待たせて道を探りに行く場面も多々あった。これは長屋のルーファイカの欠如から来るものであり、今後の課題である。いずれにせよこの G4, G5 が今回の山行の核心になった。

G5 から長いガレ場を下り、前を見ると再び霧の中に大きな赤茶けたピーク。北尾根の頭が聳え立っていた。怖気づいてながらも登り始めると案外こちらは簡単で、何回か梯子を上っただけで終わった。北尾根の頭にて今回の山行で初めてのライチョウにであったが、すぐそっぽを向かれてしまった。北尾根の頭を通過した直後、登山道にバツ印が付いていたので先を見るとなんとびっくり！登山道に大きな穴が開いており、その穴は切れ落ちた長野側の崖に通じていた。つまりその穴にはまればトンネルウォータースライダーのように滑って長野側の崖に放り出されるというわけだ。なんと恐ろしい…ここは黒部側に巻いて回避した。北尾根の頭を下ると口の沢コルに到着した。このあたりから天気が晴れてきて、劔の小窓の王から長次郎谷まで見えた。またここから先は難しくなかったため快適な登山ができた。しかしいくつもの小ピークを上ったり下ったりして中々キレット小屋にたどり着かないことは煩わしく感じた。まもなくしてキレット小屋が見えてきた。嬉しく思うと同時に、鹿島槍ヶ岳が思ったよりも遠いことに絶望を感じた。キレット小屋で長めの休憩をとった。キレット小屋のトイレをこのとき借りたのだが、このときキレット小屋のドッポントイレはほかの小屋のドッポンよりもはるかに深いことがわかり（尿が下に落ちる音がするまでかなり時間があつた。）、自分がいまキレットにいと実感した。

キレット小屋を出発してすぐにレコなどでよく見る梯子に到着した。曲がれて壊れた梯子を横目に、新しくなった梯子を一人ずつ慎重に下った。そこからはひたすら急登。キレット小屋と鹿島槍ヶ岳の標高差約 350m の間がずっと岩場で、道中休憩するほど道幅がないので道が落ち着くまでひたすら登る。藤原がややしんどそうであったが、石川、吉武は涼しい顔をしていた。初めてのテント泊でなかなか体力があるなと思った。

そうしてがむしゃらに登っているうちに鹿島槍ヶ岳がみるみる大きく見えてきて、気づいたら鹿島槍ヶ岳北峰と南峰の吊尾根に出ていた。ここで大休止をとる。吊尾根に小さな雪渓が残っており、休憩中に藤原と吉武が雪渓まで行き、初めてみる万年雪にキャッキャ騒いでいたので、それを見て若いもんは元気だなあと感じた（なお長屋と藤原、吉武は 1, 2 歳差です。）。その後南峰まで登った。南峰は山頂が非常に広いことに驚いたが、南峰に着くころに再び天気は曇ってきたため早々に冷池山荘に降りた。

冷池山荘に着いたのは 13:25。計画書では到着が 13:45 だったので、ピーク G4, G5 あたりで時間を食ってしまったがなんとか巻き返せた。冷池山荘のスタッフさんは優しく、学生証を見せると 1000 円引きするということを書いて下さったので、後藤の学生証をもらいにテント場まで戻りスタッフさんを 10 分ほど待たせてしまったが、一切怒られなかった。また宿泊者は水 10 無料だそうそう朝 4 時からやっていると聞いたので、本当に翌日の朝 4 時に貰いに行くのと快く水を配給してくださりました。本当に親切な方々でした。ありがとうございます。快適な冷池山荘だが、一つ不満があるとすればテント場と山荘がかなり離れており、行ったり来たりするのが面倒なことであった。実際この日、後藤が長年愛用していたサンダルがとうとう壊れてしまい、テント場から山小屋に行くためにわざわざ登山靴を履いてしばらく歩かなければならなかったので煩わしそうにしていた。テント設営後は晴れてきたため爺が岳の眺めながらゆっくり飯を作ることとした。こととき長屋がまたやかして、米はうまく炊けたものの、吉武が切ったくれたジャガイモをもらいコッヘルに入れて鍋に運ぼうとしたところ、コッヘルの柄が折れてジャガイモを全て地面にぶちまけてしまった。吉武ごめんなさい。寝る前に計画より出発時間を早めて余裕をもって下山することと、帰りの高速バスを決定した。その夜昨日味をしめた石川と吉武は再びテントの外で寝ることになった。



五龍岳から鹿島槍ヶ岳の間の八ツ峰キレット



種池山荘手前のお花畑

3日目 9/12 (木) 晴れ

冷池山荘 4:30→爺が岳 5:15→扇沢 8:00

この日は計画より 30 分早く起床、出発。昨晚外で寝た二人によると一昨日のほうが星がきれいに見えたとのこと。爺が岳に到着したころ日の出がきて、劔岳や立山にモルゲンロートがあたり、その山々に偉大さを去年の劔岳合宿以降久しぶりに別の方角から確認できた。またそれと同時に鹿島槍ヶ岳にも朝日があたり、雲がかかっていた昨日には気づかなかった鹿島槍ヶ岳のその荒々しくも美しい姿を見ることができた。また、槍穂の姿も遠方から確認できた。

爺が岳南峰を通過し、種池山荘に向かっていると登山道に手のひらサイズはあろうかというほどのナメクジがいて驚いた。後で調べるとヤマナメクジといい、日本最大のナメクジであることがわかった。妙に美味しそうという感想を抱いた。もちろん食わないが。

種池山荘では目の前にチングルマの風車畑が広がり、前に目をやると針ノ木岳や蓮華岳、スバリ岳など針ノ木サーキットの面々がそびえていた。爺が岳到着時は強風であったが、ここまできると風も穏やかなものになっており、ここは極楽かというぐらいきれいであった。こういうのがあるから登山はやめられない。下りは長ったらしいためできるだけ飛ばした。そのかいもあって 10 時 15 分に扇沢に着く予定であったが、実際着いたのはなんと 8 時であった。大阪行きのバスは 2 時に駒ヶ根から出るとのことでもまだ余裕があったため、市民工学科の藤原がぜひとも黒部ダムを見たいと言って、石川と吉武を連れて黒部ダムに行ってしまった。市民工学科の人にしては珍しく勉強熱心なやつである。その後藤、小田、長屋は先に大町に降りて風呂に入り、後藤の新しいサンダルを買いに行き、大町駅前美味しいと噂の地元の定食屋に行く暇があったが、藤原、石川、吉武は昼飯を食べる暇もなくあわただしく帰ってきた。ただ黒部ダム観光は充実したものとなったとのこと。大町からビールを片手に駒ヶ根まで電車に乗り、2 時発のバスに乗った。予定では 9 時ごろには大阪に着く予定であったが、渋滞の影響で大阪に着いたのは 10 時ごろとなってしまう、終バスを逃した住吉寮に住む石川を御影駅から寮まで歩かせてしまうことになってしまった。

感想

今山行は新人山行も兼ねており、いきなりキレットは時期尚早かと思われたが、三人とも全く問題なくついてきてくれた。これからの活躍が楽しみである。

反省点

今回の山行には反省点もあった。最も全体の反省点というよりは長屋の反省点であるがいくつか取り上げる。

- ・今回の山行ではカメラを忘れてきた。カメラを忘れたこと自体は全体の行程に一切の影響はないが、忘れ物自体がいけないことなので、出発前にきちんと確認する。
- ・鉄道の遅れによって山行の計画に支障が生じないようにアプローチも余裕を持って行動する。
- ・鎖場などを通過する場合は通常よりも余裕をもった行動計画を立てる。
- ・無洗米の炊き方ぐらいは知っておく。
- ・事前にルートなどをよく調べ、ルートファインディング能力を向上させる。
- ・普段の練習で岩場鎖場慣れしておく。
- ・食料は貴重。丁寧な扱いを心がける。
- ・帰りの予定も直前に組むのではなく、きちんと山行前には組み、余裕を持ったものにする。

荒島岳雪上訓練

文責：程 研塚 2年 経済

こんにちは、山岳部2回生の程（チェン）です。

1月18日（土）～1月19日（日）にかけて、荒島岳で雪上訓練をしてきた！

計画ルートは、18日の朝5時ごろ六甲道をレンタカーで出発し、道中でメンバーをピックアップしながら荒島岳へ向かった。勝原登山口駐車場に9時半ごろ到着し、そこから登山を開始。深谷ノ頭を經由してシャクナゲ平まで進み、そこで1日目の雪上訓練を行った。翌日は早朝に出発し、山頂を目指して登り、下山後にシャクナゲ平で2日目の雪上訓練を実施。14時10分ごろに駐車場へ下山すると計画を組んだ。

○アプローチ

出発時間が早かったので、電車がまだ動いていなくて、みんなそれぞれ違う場所でピックアップした。レンタカーは結構大きくて、足を伸ばせるくらいの広さがあったから、移動中にちょっと仮眠をとった。

○1日目 09:30 荒島岳勝原登山口駐車場→11:30 深谷ノ頭→13:00 シャクナゲ平 雪上訓練

寝坊したメンバーがいて、入山は予定より15分ほど遅れた。駐車場に着いたら、魔法瓶に水を入れ、ゲイターやサングラスをつけて、簡単に準備を済ませて出発。

天気は快晴で風も少ないが、雪はやわらかめで少し歩きにくかったけど、ちょうど優しいなラッセルの練習になった。最初は新生に踏み跡のないところをわざと歩かせようかと思ったけど、雪に慣れていない状態では厳しいかもしれないと考えて、諦めた。

1日目の登りでは、一年生はペースが遅かったり、アイゼンをうまく装着できなかったり、足がつったり、歩き方などいくつかの問題に苦戦した。もちろん体力が足りていないものもあるけど、それ以上に雪に対する適応力の違いが大きいのを感じた。夏山とは違って、アルパイン登山靴やアイゼン、さらには雪の重さも加わって、脚にかかる負担は倍増する。さらに、衣装の厚さと動きやすさのバランスも考えなきゃいけない。雪に慣れてしまえば、こういった問題もそれほど気にならなくなるのかもしれない。でも正直なところ、自分が一年生の時は本当に苦労したのを覚えている。人それぞれ体質や適応力が違うから、ぶつかる壁も違うけど、それでも一年生は頑張ってくれたと思う。二年生として、自分の成長を感じるとともに、雪上訓練の重要性を改めて実感した。

そういえば、数日前に関西学院大学で開かれた冬季山岳気象講演会で、猪熊隆之さんが「雪上訓練の前に、雪に慣れるための山行をする大学もある」と話していた。今になって思えば、本当にその通りだなと実感した。今年の雪上訓練の前か、5月に新生を連れて日帰りで雪山に行って、少しでも早く雪に慣れてもらいたいかもしれない。でも、雪上訓練の目的の一つは「雪に慣れること」だから、わざわざ訓練を2回に分けてやるのは、ちょっともったいない気がする。



入山直後、ワクワク



進行中

テント場についてから、まず雪かきをして設営した。その後、スノーアンカーの設置・雪崩捜索・歩行の3つの訓練を実施した。また、緊急時に備えて、先週の研修会で学んだ雪洞の知識をもとに、実際に雪洞を掘ってみた。強度テストも行い、しっかりの頑丈さだった。主将がその夜、雪洞で一晩過ごした。テントと同じくらい快適だったらしい。(ちなみに、テントには穴が空いてしまった)



雪洞掘り中



設営完了！天気も最高

○2日目 07:00 シャクナゲ平 → 08:00 前荒島岳 → 10:40 中荒島岳 → 13:00 荒島岳 → 09:10 中荒島岳 → 10:40 シャクナゲ平、雪上訓練 12:00 → 13:00 深谷ノ頭 → 14:10 荒島岳勝原登山口駐車場

2日目は予定よりも早めに出発することになり、朝4時起床、5時半に出発した。準備中、アイゼンの劣化で装着に手間取り、自分は少し時間がかかってしまった。朝は風が強く、稜線に出るとガスも濃く、視界がかなり悪かったが、それによって「悪天候への対応」と

いう雪上訓練の一つの目的はしっかり達成できたと思う。道中は、暗さと小雪の影響で足跡が薄くなり、1度ルートを間違えてしまった。山頂に到着すると、積雪が深く、すべてが雪に埋もれていた。濃いガスのせいで何も見えず、「まだ登らないといけないのでは？」と錯覚するほどだった。景色を楽しむことができなかつたのは少し残念だったけど、いい訓練になったと思う。



アイゼンつけ直し中。前荒島岳からの景色
まだ綺麗。



途中のピース, 楽しんでいるね!

下山して宿泊地に戻った後、風がまだ強かったため、雪上訓練はふもとまで下りて行うことにした。2日目の訓練では、アックスビレイ・滑落停止を実施した。ただ、雪が柔らかくて、滑落は思うように落ちなかった。それでも、下山の途中で簡単に新入生に教えて何度か練習したので、やり方はしっかり身についたと思う。

総括

今回の雪上訓練では、いくつかのトラブルが発生したものの、ほとんど想定内で、全体的にとっても楽しい山行となった。とはいえ、いくつかの課題も浮上した。装備に関する問題、上級生の指導不足による新人育成の課題、そして個人のミスなど、改善すべき点がいくつか見えてきた。2025年の新体制に向けて、まずは古くなった装備の更新やメンテナンスを進め、今後の山行をより安全に行えるよう準備を整えていく予定です。今回の経験は次回
の冬山登山にしっかり活かしたい!

ご閲覧いただき、ありがとうございました!

以上

第九章 事務局報告（総会・理事会・会計・予算）

2024年度 神戸大学山岳会定例総会 議事録

事務局

開催 2024.4.20 14:00～17:00 神戸大学 大阪クラブ （文中敬称略）

出席者（名誉会員）居谷千春、山形裕士、小池淳司、水谷淳 （特別会員）石川毅、山本恵昭、
（正会員）土山尚彦、白形洋、山口幸久、大仲秀治、酒井利直、坂本淳、松村政則、
尾崎竜平、金隼泳
（理事）山田健、岩井正隆、大竹口誠治、長谷川浩、野邊久美 （監事）金井良碩、
（現役）大澤遼、後藤潤、小田優真、長屋徹也、程研塚 （Web参加）井上達男
計 37 名：出席 21 名、Web1 名、準会員 5 名、委任状提出 32 名（開催案内 130 名）
出席 21+Web1+委任 32 計 54 名で総会成立。

1 会長あいさつ 山田会長

2 議事（議長：事務局長）：各議案とも満場一致で承認

（1）2023 年度活動報告（第 1 号議案） 事務局長

① ACKU-News47 号の発行（2024.3）

② 2023 年度定時総会開催（対面・Web 併用開催）（2023.4.22）

③ 例会山行（第 251、253、254、255 回）

④ 理事会（第 104、105、106 回）

（2）2023 年度決算報告（第 2 号議案） 会計担当理事・監事

（3）役員改選（第 3 号議案） 理事会案

会長_山田健、副会長_大竹口誠治、事務局長_長谷川浩、理事_岩井正孝（会計）、
香山博司、野邊正彦、野邊久美、藤川佳祐、監事_金井良碩・森長敬、
（報告事項：事務局_俣慧開、城間一輝）

（4）2024 年度活動計画（第 4 号議案） 各担当理事

・例会山行

・ACKUニュース（No.48）の発行

・海外登山研究会（適宜開催）

（5）2024 年度予算案（第 5 号議案） 会計担当理事

（6）名誉会員推薦 水谷淳（神戸大学海事科学部、山岳部副部長）

3 連絡・報告事項

（1）物故会員（大森公一）、新正会員（城間一輝）

（2）会員近況報告（懇親会）

4 懇親会（進行：野邊久理事）

・現役紹介／活動報告 後藤 潤

・ネパールトレッキング報告 酒井利直

・出席者近況報告 出席者

5 閉会（大竹口副会長）



酒井会員によるネパール・トレッキング
報告会

2024年 定例総会案内への出欠連絡と近況報告（2024.4）

直木嘉也	231	欠席	（ご息女より）父は施設に入所しており、娘の私が代筆しております。委任状等は詳細不明のため空欄失礼いたします。認知症が進行しておりますが、神戸大学山岳部の思い出を今でもよく話してくれます。
東郷賢治	258	欠席	不整脈と前立腺で体調必ずしも良好とは言えませんが、今日も2万歩徒歩訓練を続けています。（例会山行No255. 藤川さんの住所か電話連絡先を教えてください、との事）
柏田統一	277	欠席	年末から2月13日まで49日間入院しました。腰がぬけ立ちあがれませんでした。救急車で入院、治療。日常生活にもどれました。
田中信行	282	欠席	昨年夏、食道がんを内視鏡オペで切除しました。経過良好でスキーとゴルフを楽しんでいます。親しい岳友が少なくなるのが寂しいですね！
壺阪祐三	285	欠席	元気です。
原田 聡	292	欠席	高齢のため欠席します。夏場は蓼科、冬場は西宮の生活を送っています。
岡市敏治	294	欠席	「山と人」基金として4/9付 岩井口座に25万円振込み。基金趣旨については大竹口副会長と連絡とってください。
井上 薫	303	欠席	登山は出来ていませんが、仏道修行に励んでいます。
鶴谷将俊	312	欠席	会費を本日送金します。
白形 洋	319	出席	懇親会へも参加します。
瀬野鋼太郎	322	欠席	最近、街歩きの会に参加しています。4/20は15:30頃から懇親会に出席します。
高屋義治	327	欠席	山岳会入会後50年を経ました。年も75歳となりましたので本年にて退会申し上げます。
森長 敬	337	欠席	今年古希を迎えましたが、未だに現役社長で、山岳会には何の貢献もできず申し訳なく思っています。ご盛会をお祈りいたします。
吉原敏明	349	欠席	週一回の関西近郊の日帰り登山、年数回の山小屋登山をマイペースでやっています。下山後の居酒屋飲みが何よりの楽しみです。
山本裕宣	351	欠席	痔や大腸憩室出血などで、ちょっと体調をくずしています。座ってられないので欠席します。
川端 充	363	欠席	元気でやっています
小宮勇介	389	欠席	正月に段ヶ峰を目指したが、雪のため引き返す(ジョギングシューズだった) 年末に高野山に行った(JR妙寺駅～歩き～高野山～歩き～JR紀伊山田)
藤川佳祐	415	欠席	出席を予定しておりましたが、クレーム対応にて急遽タイ出張が入りました。欠席となり大変申し訳ございません。
金 隼泳	421	出席	本年度からも、再び大阪公立大学(旧市大)の学生になりました。相変わらず、なるべく月1回はテント泊山行ができるように登山を続けています。
侯 慧開	422	欠席	仕事が忙しいです。山へは全然いけておりません。
吉井 修	902	欠席	4月15日～6月29日までの予定で、日本山岳会の第5回グレートヒマラヤトラバース隊で、西ネパール踏査に出ていますので、出席できません。
桜井勝之	特別	欠席	いつもご連絡ありがとうございます。 会の発展と活動の安全を祈念しております。
山本恵昭	特別	出席	人並みに、腰や膝が痛くなってきました。でも、まだボチボチと登りたいと思っています。
水谷 淳	名誉	出席	お世話になります。挨拶も承知しました。よろしく願いいたします。

神戸大学山岳会第 105 回理事会 議事録

2024 年 2 月 3 日（土） 20:00～21:00（文中敬称略）リモート開催

事務局

1. 参加者：理事_山田、岩井、大竹口、長谷川、監事_森長、事務局_侯

（欠席：金井良、香山、藤川、野邊久）

2. 議 題：2024 年度総会開催の準備

① 役員改選準備 理事会として以下を役員候補とする。

山田（会長）、大竹口（副会長）、長谷川（事務局長）、岩井（会計）、香山、野邊久美、野邊正彦、藤川、監事：金井、森長、事務局：侯

② 2024 年総会準備

1. 日時：4 月 20 日（土）14：00-15：00、懇親会 15：00-17：00

2. 会場：神戸大学大阪クラブ（仮予約済み、担当 岡部さん）

3. 議事：決議・報告事項（案）

1. 開会・会長挨拶、2. 2023 年度活動報告（長谷川）、3. 2023 年度決算報告（岩井）

4. 役員改選（長谷川）、5. 2024 年度活動計画（長谷川、藤川）

6. 2024 年度予算計画（岩井）、7. 報告事項 会員異動、新入会員、物故会員

8. 懇親会：講演（案：酒井会員ネパールトレッキング）、（現役活動報告と部員挨拶）

③ 会費徴収等

・基本 90 名×5000 円＝45 万円が現状 50 名 20 万円台で低迷、赤字ギリギリ。

まずは、メール登録の会費未納会員に 3 月末間の納入をメール催促。

・ACKU-News47 号でも会の会計現状を掲載発信し、総会案内でも納入を促す。

・新年度活動でも年代別の会費徴収などを検討する。

④ 今後の準備日程（一部、詳細略）

・3/9 まで 発送印刷物作成／理事会メンバー確認（メールベース）

・3/16 拡大理事会（対面）（15:00-17:00）@神大深江キャンパス講義室

・ACKU-New:最終入稿 3/6、納品 3/15（現役が学生寮で受取、3/16 深江学舎持込）

・4/13 会計監査（捺印完了）、総会出席回答・委任状締め切り

・4/14 総会資料送付（All-Mail）、・4/20 総会

⑤ その他

・氷ノ山ヒュッテ（補修見積りを入手し大学へ提出を予定）

・緊急連絡網整備（遭難対策）が遅れている。長谷川、侯にて対応。

・特定会員への山岳会業務依頼（広報・HP、現役支援、ヒュッテ他、基本は 2 年毎）

以上

神戸大学山岳会第 106 回理事会 議事録

2024 年 3 月 16 日（土） 14:00～15:00（文中敬称略）

事務局

1. 場 所 : 神戸大学深江キャンパス 4号館 4201号
2. 参加者 : 理事_山田、岩井、大竹口、長谷川、事務局_侯、現役
3. 作 業 : ACKU-News 郵送物作成/発送（会員 138 通、外部 10 通）
 - ・ 発送案内文（会員向け総会案内、外部向け発行案内）
 - ・ 会費納入案内、・ 例会山行案内、・ 出欠返信ハガキ
4. 2024 年度総会の開催準備
 - ・ 開催 : 4 月 20 日（土） 14:00-17:00（案）（総会 1 時間、懇親会 2 時間）
（対面&リモート_ハイブリッド開催（Teams 利用））（要機材等準備）
 - ・ 会場 : 神戸大学大阪クラブ（大阪駅前第一ビル 11F）（料理手配、予算）
 - ・ 議事進行確認
 1. 会長挨拶（山田） 10 分
 2. 総会議事（長谷川） 40 分（詳細省略）
 3. 新山岳部副長挨拶（水谷）
 4. 懇親会（野邊） 2 時間 ネパールトレッキング報告（酒井会員） 他
 5. 閉会の辞（大竹口）
 - ・ 事前準備
 - ・ 3/17 All-Mail 総会案内、出欠確認開始
 - ・ 4/13 会計監査（捺印完了）
 - ・ 4/15 総会出席回答締め切り、4/16 総会資料送付（All-Mail）
 - ・ 4/20 総会当日資料、PC/機材準備、
 - ・ 活動協力（事前確認）: HP（井上）、現役（若手 0B、緊急時対応）、
5. その他 現役支援確認 : 侯、城間、金

以上

神戸大学山岳会第 107 回理事会 議事録

2024 年 7 月 21 日（日） 20:00～21:00（文中敬称略） リモート開催

事務局

1. 参加者 : 理事 山田、岩井、大竹口、長谷川、野邊正、野邊久、幹事_金井良、事務局_侯
欠席 : 香山（長谷川に議決委任）、藤川、城間（理事出席 6+委任 1 により会成立）
2. 議 事 : ① 岡市会員寄付のヘリテージ基金の取扱い
 - ・ 2024.4 受領分（25 万円）について、遠隔地の役員の会活動（理事会等への出席 交通費）支給の用途指定を受け、役員の申請により関東から関西への移動につい

て1.5万円／回を支給、支出状況は総会で報告することとした。

- ・2020.3受領分（100万円）について、現役の活動支援（装備充実等）のために毎年定額（10万円）を支給との用途指定を受け、年10万円に固定せず、現役の装備購入要望に基づいて拠出することとした。今後、現役とも協議しながら運用方法を作成（担当：事務局長）する事とした。

② 山岳会一般会計の健全化

- ・岡市会員からの一般会計収支シミュレーションの要望について

理事会として、一般会計の健全化計画を作成する必要ありと判断し、会計担当によるシミュレーションを行った結果、現状では、2026年度にも一般会計が赤字となると判断。こうした情報を会員にも説明の上、まずは今年度及び滞納会費の納入促進を図る事とする。

- ・会費納入の方法や案内タイミング

現状、年度末に新年度分をお願いしているが、前年度分と混同されている例もあるので、新年度上期徴収に変更すべき。まずは、この夏をめどに会費納入依頼を再度発信する。

- ・会費納入の依頼文書を会長が作成し、滞納会員には、納入状況の通知と遡っての納入依頼も発信。依頼文は盆休みまで、滞納案内は8月中の発信を目指す。
- ・滞納分については、一部納入でも構わないとする一方、過去未納分の免除は認めないこととし、滞納分のある退会希望者に対しても未納分支払いを要請。
- ・ゆうちょ銀行専用払い込み用紙（赤紙）の導入について検討し、岩井理事にて必要な手続きや運用方法を調査したが、口座開設の労力や預金出納に関する制限も多いことから、今回は導入を見送ることとした。
- ・過去に実施したような、各会員への個別連絡による納入催促はおこなわない。

③ 会の活性化、若返り（世代交代）に向けた仕掛け等

- ・岩井提案の「神戸大学山岳部OB近況便り」（内容：名前、卒業年度、写真、近況、メッセージなど）については、会員の交流活性化につながる所以実施する事とし、どのような発信媒体を使うのが良いか、なども検討の上、進める。

④ 千本杉ヒュッテの修繕

- ・6月22-23日に荷揚げ作業行い、7月4日完成済。居谷さん確認済み。

正垣工務店見積に基づき、大学が498,500円（50万円MAX）を負担。不足分55,000円は山岳会のヒュッテ維持管理金からの支出とする。

⑤ 山岳会関連図書Kindle版の件

- ・岩井理事が個人ワークで進めてきた山岳会関連図書の電子化と販売対応を、山岳会（理事会）の活動としておく必要がある。次回理事会で、活動の内容（対象図

書、実施作業と費用、著作権確認・承認、収入予測等)を书面報告し、理事会承認を受ける形とする。活動の成果(販売収入)は、山岳会の収入として一般会計に計上。

以上

神戸大学山岳会第 108 回理事会 議事録

2024 年 10 月 26 日(土) 20:00~21:00(文中敬称略) リモート開催

1. 参加者：理事 山田、岩井、大竹口、長谷川、野邊正、野邊久、藤川、事務局_侯、城間、
現役 後藤、小田(欠席：香山、金井良、森長、香山)(理事 7 名出席で会は成立)
2. 議 事：① ヘリテージ基金_使途指定寄付金の運用ルール設定
 - ・長谷川作成の「現役装備等給付金に関する内規(案・事前配布)」を協議。内規を汎用的なものとなせず、岡市会員からの使途指定寄付金限定とし、もう少し簡便なルール設定とする事となった。長谷川にて再作成し、役員に配布、承認を受ける事とする。
 - ・寄付金の趣旨と運用について、現役の後藤、小田とも意見交換をおこない、決定プロセス、個人装備の扱い(部からの貸与/返却)等の理解を得て決定。
- ② 一般会計の状況と今後の対応
 - ・作業報告
 - 8/11_メール登録会員に「本年度山岳会費・過年度滞納会費」納入依頼発信
 - 8/14_会員 23 名(滞納通知 10 名含)に同納入依頼書を郵送(戦前 5 名除く)
 - 8/24_メール登録会員のうち滞納会員 25 名に滞納記録を個別メール発信
(会費請求対象メール会員 72 名 - 2023 年まで納付済み会員 47 名 = 25 名)
 - ・通知結果/納入状況(岩井報告)
 - 滞納会員 5 名(瀬野・片山・平賀・壺阪・前田)より計 9 万円、協力金 2 名(山田・中川) 1.5 万円入金のみ。低調であったが ACKU ニュース原資は確保。
 - ・若手会員で、住所・メール不明者がいるので、別途、確認の必要がある。
 - ・前田会員から滞納会費納入と共に退会届が提出されたので、これを受理。
- ③ 年会費自動引落(銀行口座・カード)導入の可能性協議(長谷川より情報提供)
 - ・登録が少ないと固定手数料負担増となるが現状の振込費用の会負担分は相殺。
(会員は申請書類作成手間のみ、費用ゼロ、会は固定費と個別手数料)
(30-50 名登録で一人当たり 215-315 円分を会で負担。年間 1 万円程度の経費)
 - ・導入時、自動引落としては、あくまでも任意登録の呼びかけ。
 - ・会費を毎年納入している会員にとっては利便性向上、新規入会員(卒業部員)の

登録が得られれば会費収入安定化する点がメリット。

・ 次回の総会で会員に情報提供し、意見を聞く事とした。

④ ACKU ニュース発行準備（大竹口理事より計画書提出）

・ 物故会員確認、追悼文掲載検討（理事会後、山戸昌会員のご逝去を通知）

・ 郵送費値上りのため送料軽減策の検討が必要（HNA の事例等確認）。

（500g 以内：390 円⇒値上 510 円、レターパック 4300 円、クリックポスト 185 円）

・ 会費滞納会員への送付停止（Data 版のみ提供）も一案で、次回総会で提案、承認後の適応も検討。承認時、次年度会費案内で通知、次年度発送から適応。

⑤ その他

・ 前回理事会での「山岳会関連図書 Kindle 版の件」

岩井理事に書面報告を再依頼。次回総会で報告とする。

（実費発生分も山岳会会計で処理し、請求しない場合は協力金収入とする事。）

・ 次回例会（第 258 回 現役OB懇親忘年会（12/7 又は 8 予定）は、懇親会前に若手OBと現役によるセミナーや勉強会開催案を説明（幹事：長谷川）。海外登山報告なども検討する。

神戸大学山岳会第 109 回理事会 議事録

2025 年 2 月 1 日（土） 20:00～（文中敬称略） リモート開催

1. 参加者：理事_山田、岩井、大竹口、長谷川、野邊久、幹事_金井良、

事務局_侯、城間（欠席：藤川、野邊正、香山（委任有）、森長）

<理事 8 名中、5 名出席+1 名委任状提出 2/3=6 名以上で理事会成立>

2. 議事

①2025 年度総会開催の準備

・ 開催：4 月 19 日（土） 14:00-15:00、懇親会 15:00-17:00

（対面&リモートハイブリッド開催、Teams 利用）

・ 会場：神戸大学大阪クラブ（仮予約済み、担当 藪さん）

人数 25-30 名程度、オードブル形式（仮 5000 円×10）、マイク&ディスプレイ

・ 議事：決議・報告事項（案）：岩井さんが遅れて参加のため会計関連も長谷川

1. 開会・会長挨拶

2. 2024 年度活動報告（長谷川）（例会山行、理事会、ACKU-News 発行）

3. 2024 年度決算報告（長谷川）（Kindle 出版費用含む）

・ ヘリテージ基金収支（使途指定 岡市会員 125 万、東郷会員 100 万）

・ 現役設備援助についても運用方法と実績状況も説明）

4. 2025 年度活動計画（長谷川、藤川）

- ・ ACKU-News 発行
 - ・ 例会案：6月氷ノ山整備、8月立山、12月忘年会、3月氷ノ山
5. 2025年度予算計画（長谷川）

- ・ 提案 ① 会費滞納者への会報郵送停止（Data 配信のみ）
- ② 銀行引き落としサービスの導入

報告／協議事項

- ・ 会員異動 名誉会員 酒井先生（山岳部副部長）（紹介・ご挨拶）
- 新入会員、物故会員、退会会員（前田会員）

- 懇親会：① 現役の活動報告と部員挨拶
- ② 近況報告（海外登山紹介：大竹口さんネパールトレッキング等）
 - ③ 近郊報告参加者全員

② 今後の準備と日程

- ・ 配布・発送物
 1. ACKU-News：最終稿入稿 3/5、納品 3/14@学生寮、3/15 作業場搬入
 2. 会員案内文&総会案内 （長谷川⇒理事会チェック）
 3. 外部案内文 （大竹口）
 4. 会員向け 事務局&会計案内 （長谷川・岩井⇒理事会チェック）
 5. 会費滞納情報（正会員個別） （岩井）
 6. 返信ハガキ（郵送会員のみ 22 枚）、封筒、発送ラベル（長谷川）
- ・ 準備実務
 1. 外部向け住所リスト（大竹口）、
 2. 住所・メール登録の不確な会員確認絡（長谷川、城間）
 3. 会員向けは信書扱いのためレターパックライト（@430 円）とする。
- ・ 総会準備
 1. 会計監査（捺印完了）4/12（土）
 2. 総会出席回答・委任状締め切り 4/5（土）
 3. 総会資料送付（All-Mail）
- ・ 次回 発送作業&拡大理事会（対面） 3/15（土）14:00-16:00

場所：神大深江キャンパス講義室予定（手続き：長谷川、後藤）

作業：News 手配、封入（同封物確認）、発送（郵便局時間外）

③ その他

- ・ 東郷会員からのヘリテージ基金ご寄付（100万円）の用途指定と通知

- ・現役及び若手 OB の海外登山を援助したいとの事で、例えば、本年秋の HNA のトレッキング参加者なども対象候補と考える。
- ・現役装備代援助の件、申請が来ていないが年度内支出状況を確認。
- ・本年はバダリ峰遠征（2015. 10）から 10 周年。隊の参加者による企画での記念イベント及び海外登山研究会を考えたいところ。11月のネパールトレッキングの話もあり、7月頃でどうか？
- ・来年はシェルピ 50 周年&クーラカンリ 40 周年。記念イベントは、2026 年 4 月の定例総会に合わせて実施を考えたい。中国から人を呼ぶことは考えない。

以上

2023年度会計決算報告

事務局長 長谷川浩 理事(会計) 岩井正隆

(2023.4.1~2024.3.31)

1. 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
前年度繰越金	265,628	265,628	0
会費収入	450,000	286,247	-163,753
協力金/寄付金収入	0	70,000	70,000
雑収入(預金利息)	100	16,503	16,403
計	715,728	638,378	-77,350

雑収入:利息2円, 山と渓谷社掲載費16,500円, Kindle登録費1円

<支出の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
事務・通信・振込手数料	70,000	1,500	-68,500
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	200,000	136,030	-63,970
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	0	-5,000
雑費	50,000	66,901	16,901
次年度繰越金	265,628	153,947	-111,681
計	870,628	638,378	-232,250

2. 特別事業基金

(単位:円)

費目	22年3月現在残高	23年3月現在残高	増減
「山と人」積立金	388,086	488,090	100,004
海外登山準備積立金	300,000	400,000	100,000
千本杉ヒュッテ維持管理金	55,509	96,208	40,699
総計	743,595	984,298	240,703

「山と人」収入:積立金 100,000円、利息 4円

海外登山準備積立金 100,000円、

千本杉ヒュッテ維持管理金

収入:ヒュッテ使用協力金 41,000円、管理業務謝金 35,000円

支出:備品購入 7,760円、整備作業食料費 27,541円

3. 遭難対策基金

(単位:円)

費目	22年3月時点残高	23年3月現在残高	増減
遭難対策基金	2,517,159	2,517,170	11

利息 11円

4. ヘリテージ基金

(単位:円)

費目	22年3月現在残高	23年3月現在残高	増減
ヘリテージ基金	2,650,071	2,650,095	24

利息24円

●詳細は次頁の貸借対照表・財産目録・活動計算書を参照ください。

※一般会計:「三井住友銀行」東加古川支店普通預金にて管理

※「山と人」積立金、海外登山準備積立金:「みなと銀行」春日野支店普通預金にて管理

※千本杉ヒュッテ維持管理金:「三菱東京UFJ銀行」東神戸支店普通預金にて管理

※遭難対策基金:「みなと銀行」春日野支店普通預金にて管理

※ヘリテージ基金:「三井住友銀行」神戸営業部(店番号500)普通預金にて管理

【監査報告】

以上、監査の結果 適正且つ妥当であることを認めます。

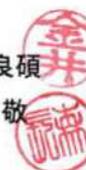
2024年 4月 8日

監事

監事

金井 良碩

森長 敬



2023年度貸借対照表・財産目録・活動計算書

(一般会計)

貸借対照表・財産目録

科目	金額	預け先
普通預金	153,947	三井住友銀行
流動資産合計	153,947	
資産合計	153,947	
負債合計	0	
前期繰越正味財産	265,628	
当期正味財産増減額	-111,681	
正味財産合計	153,947	

活動計算書

科目	金額
会費収入	286,247
協力金収入	70,000
雑収入	16,503
収入計	372,750
事務・通信・振込手数料	1,500
山岳部活動援助金	50,000
ACKUニュース	136,030
「山と人」積立金	100,000
ヒュッテ補修費	0
海外登山準備金	100,000
兵庫県岳連年会費	15,000
日本山岳会年会費	15,000
ホームページ管理費	0
雑費	66,901
支出計	484,431
差し引き	-111,681

(特別事業基金)

科目	金額	預け先
山と人積立金	488,090	みなと銀行
海外登山準備積立金	400,000	みなと銀行
千本杉ヒュッテ維持管理	96,208	三菱UFJ銀行
資産合計	984,298	
前期繰越正味財産	743,595	
当期正味財産増減額	240,703	
正味財産合計	984,298	

活動計算書

科目	金額
山と人積立金	100,000
利息収入	4
海外登山準備積立金	100,000
ヒュッテ使用協力金	41,000
管理業務謝金	35,000
収入計	276,004
ヒュッテ備品購入	7,760
ヒュッテ整備作業食料	27,541
支出計	35,301
差し引き	240,703

神戸大学山岳会

2024年度予算

(2024.4.1~2025.3.31)

1 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	23年度予算額	24年度予算案	増減
前年度繰越金	265,628	153,947	-111,681
会費収入	450,000	450,000	0
雑収入	100	100	0
計	715,728	604,047	-111,681

<支出の部>

(単位:円)

費目	23年度予算額	24年度予算案	増減
事務・通信・振込手数料	70,000	70,000	0
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	200,000	150,000	-50,000
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	0	-100,000
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	5,000	0
雑費	50,000	50,000	0
予備費(次年度繰越金)	110,728	149,047	38,319
計	715,728	604,047	-111,681

<「山と人」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	488,090		488,090
当該年度積立金	100,000		588,090

<「海外登山準備金」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	400,000		400,000
当該年度積立金	0		400,000

<千本杉ヒュッテ維持管理金>

(単位:円)

	収入	支出	計
前年度繰越金	96,208		
ヒュッテ使用料	35,000		
管理業務謝金	35,000		166,208
食料費等補助金		10,000	
備品購入費		60,000	
予備費		96,208	166,208

< 編集後記 >

ACKU news48号は、2年連続の発行となりました。2024年4月から、会長・副会長・事務局長等が再選となり、理事が一部交代しました。

会誌担当も、9年目になりましたが、編集内容等につき、忌憚のないご意見を頂きたく。

2024年度の山岳会のイベントとしては、前年度同様、特になく、2024年度に実施された会員の海外及び国内での個人活動記録及び新型コロナ明けで復活した山岳会の例会山行（数が少ないですが）掲載しております。個人山行をされた方々から沢山の紀行文を投稿して頂きました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。

ACKU ニュースは、経費削減のため、すべてモノクロ印刷となっていますが、ACKU のホームページにアクセスして頂ければカラーの写真もご覧になれるようにしております。

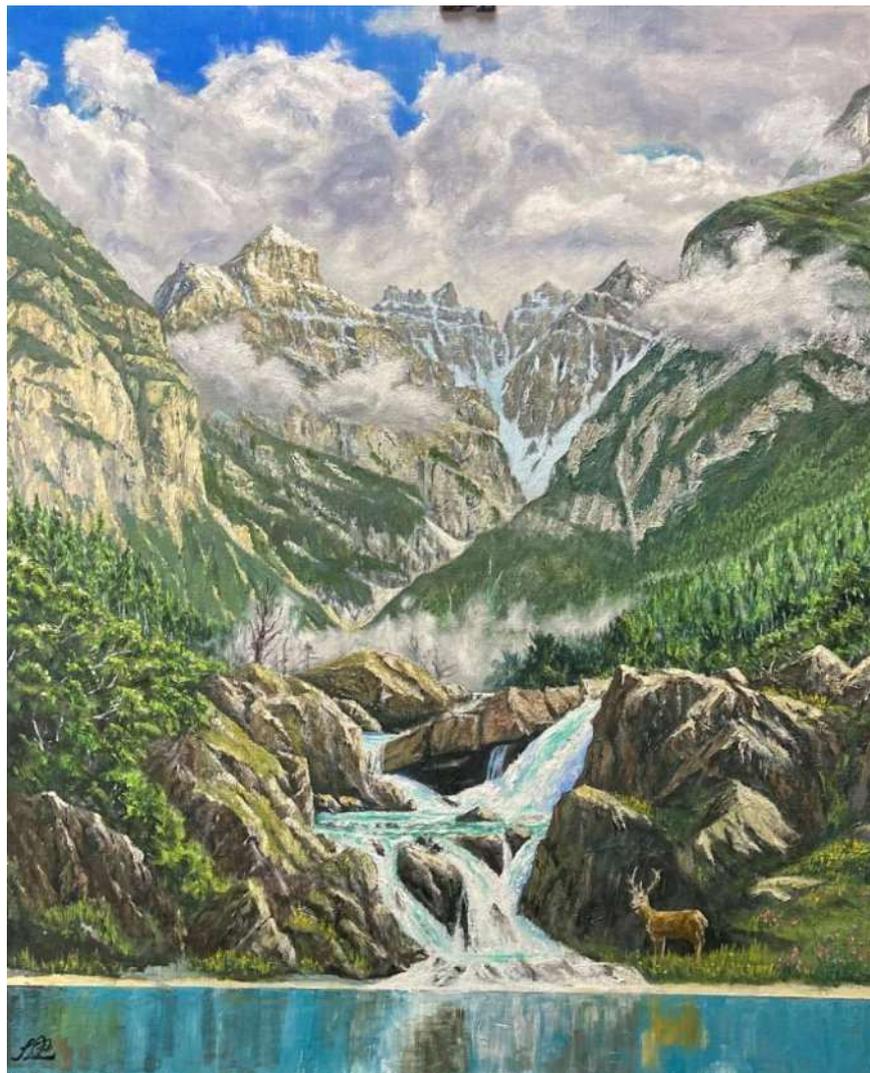
今後も、例会山行記録の掲載だけでなく、新執行部の活動方針である①海外登山への機運を醸成②他団体との交流を促進③山岳部活動への支援拡大④ヒュッテの活用促進⑤財政基盤の強化に沿った記事を掲載して行きたいと思います。

また、若手・中堅・熟年各OBからの積極的な寄稿をお願い致します。特に、今後は、若手OBの投稿に期待したいと思います。

個人的には、国内の山では、70歳までに百名山を達成すべく、去年は北海道の羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳等を登り、残り20山を2年以内で達成すべく山行計画を立てています。

海外の山では、昨年11月に30年振りにネパールを訪問して、初めてアンナプルナ山群のトレッキングをして来ました。まじかで見るとアンナプルナ山群とダウラギリ山群は圧倒的な迫力があり、今後も機会があれば、トレッキングへ行きたいと考えています。

2025/2/28 大竹口誠治 記



来年オリンピックのあるコルティナダンペッツォの北側に聳えるクリスタッロ山の谷。圧倒的な岩壁とこのぎりの刃のような頂稜、針葉樹林、美しい溪流、青い湖、そして野生動物と、ドロミーティのすばらしさを凝縮したような画にしてみました。

ACKU-news 48 発行日 : 2025年3月15日

発行 : 神戸大学山岳会・山岳部

発行人 : 大竹口誠治

編集長 : 大竹口誠治 編集委員 : 小林功、近藤昂一郎

原稿送付先 大竹口誠治 〒338-0011 埼玉県さいたま市中央区新中里 1-9-14

E-MAIL: 6824vgdn@jcom.zaq.ne.jp

小林 功 〒197-0823 東京都あきる野市野辺 508-11

E-MAIL: charin8458@gmail.com

近藤昂一郎 351-0104 埼玉県和光市南 1-22-8-2

E-MAIL: k.kondo331@gmail.com

本誌 ACKU-news は神戸大学山岳会山岳部の内部的機関紙として発行しています